
クローズファンタジー 蒼の巻 第1章

ケイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クローズファンタジー 蒼の巻 第1章

【Zコード】

N9320X

【作者名】

ケイ

【あらすじ】

これは三つの種族が織り成す繋がりの物語。

では、まず最初に蒼き瞳に蒼き翼と尻尾を有した青年とその仲間達の冒険談が記された巻を開くとしよう。
長い長い物語が今、産声をあげる――

蒼の巻 プロローグ ハジマリノトキ

蒼い輝きを放つ巨大な宝石が不気味に照りつける鍾乳洞の中、青年が立っていた。片手にはサーベルを携えて、目の前の蒼海のように澄んだ蒼の宝石を爬虫類のような瞳で睨みつける。

壊すべきだ、と。

なのに体が動かない。金縛りに合ったかのようにサーベルを構えたまま動かない。恐怖に悲鳴をあげる事も震える事さえも許されず、ただただ目の前で静かに、かつ強烈な存在感を見せ付けながら佇む蒼の宝石を前にして……

「これはお前の手に負える代物じゃない」

蒼の宝石の真上には、全身をスッポリと包むように整えられた漆黒のロープを纏つた男が俯きながら座っている。その声は少年だったが、少年にしてはあまりにも冷たく機械的な口調。

そして、黒ロープの少年は左手にアメジストのような紫色で透明感のある艶美な太刀を持つていた。

一見、ただ豪奢に仕立て上げただけのような刃物だが、その内側では、まるで太刀そのものが電気を作っているかのように絶え間なく小規模の雷が発生している。

「この世のものは思えない素材で作られた太刀を手に少年は俯い

ていた顔をあげて、じらりと凝視してきた。

その拍子に、今まで見えずに隠れていた顔が映る。

「なつー?」

黒曜石のような短い黒髪。お世辞にも健康的とは言えない白い肌。そして、感情が全く読めない人形のような瞳。

その顔には、歳相応とは思えないほどに時間を重ねたような風格と疲労が浮き出ていて驚きの余り声を漏らした。そして気付く。金縛りにあっていたはずなのに声を出す事が出来たと。

「君は一体、何者なんだ?」

「それを言ひなら、お前の存在の方がよっぽど気になるわ」

「何を言ひて……」

少年の意味深な返事に、うろたえる。

「まあ良いや。名前だけでも名乗つておくれ」片手で悠々と少年は太刀を持ち上げ、「俺の名前は『雷』のような速さで太刀を豪快に振るつた。

「――」

少年が名乗ると同時に雷鳴が木靈し、視界がフワッショバッくする。

——死んだのだろうか？ 誰かの声が聞こえてきた。

「……どういば。起きなさいよ」

とても聞き覚えのある女性の声。

「これは天国なのだろうか？ それとも地獄？ 自分の今までの所業の数々を考えれば地獄の底に違いない。」

「起きろって言つてんでしょう。寝ぼすけレイドー！」

突然も突然。頭上から襲い掛かつてきた打撃にレイドと呼ばれた青年は奇声をあげる。

そこには天国でも地獄でも無く、馬車の中だった。

馬車は軽快な音を立てながら走り続けている。

まだ目的地にはついていないようで外に広がる景色からは野生の動植物が顔を見せていた。

「こつたいなあ。もう少し寝させてくれたって良いじゃん

頭をさすりながら、女性の声の主を睨みつけた。

茶髪のツインテール。身だしなみは動き易さを重視した軽装で、見栄えにも気を配れば見違えるほどの美人になるであつた。だが、整つた綺麗な顔を崩して怒りの表情を浮かべる今現在は……

「寝れる時は寝る、食べる時はとことん食べる。全く、お姉さん呆れちゃうわ~」

女性とこう概念を捨てた、お世辞にも美しいことは言えない姿と口調である。

「なつ、酒癖の悪い姉さんを持つて弟は大変ですよ」

レイドは姉を名乗る相手に向かつて、むすっと頬を膨らませながら仕返した。

普段なら、軽く受け流して無視するが今は寝起きという事もあり非常に不機嫌だ。それに良くも悪くも先程の夢の続きを見れなかつたのが残念で仕方が無い。

肝心な部分で目覚めてしまつのが夢といつものだが絶賛不機嫌中のレイドには、そんな事は一切も考えられない。

「クッ、壱つてくれるじゃない」

ツインテールの女性が唇を？みながら、否定しきれない事実に顔を曇らせる。

「ま、まあまあイリア君。落ち着きたまえ」

そんな険悪モードの最中、ツインテールの女性を止める男の声が

響いてきた。

レイドと、イリアと呼ばれた女性は声の方向に頭を傾ける。

そこにいたのは丸っこい体型の白兎なのだが、人間のように一足で立つており骨格も人間に近い。服も人間と同じもの（子供サイズ）を着ていた。

一緒にたにすれば”獣人（じゅうじん）”と呼ばれる、その男性は険悪ムードの中でも笑みを浮かべ言葉を紡いだ。

「諍（こさか）」いは止めたまえ。心の輝きを濁らしてしまひ。そして何よりも怒りに染まってしまった君の顔は美しくない」

決まったと言わんばかりに自分より背丈が一倍はある一人を見上げながら白兎は返答を待つ。

「……はあ」

溜め息のタイミングはほぼ同時。やつてらんないと言わんばかりに先程までいがみ合っていた二人は静まった。

「分かってくれたようだね。そう、争いは何も生まない。愛こそが……つて、ちょっと君達。聞いているのかい！？」

徹底した無視に喚く白兎を他所にレイドは窓から外を眺める。

今いる場所は名の知れた鉱山で、坑道なども開発。周辺に街を作るという計画まで進んでいたらしい。過去形なのは、今現在は腐敗が進み坑道という坑道が閉鎖。廃坑と化しているからだ。

突如、ツンと鼻をついた匂いにレイドは顔を歪める。

廐坑と化した理由の一つしてあげられるのが、これである。有毒かつ除去のしようが無い原因不明の刺激臭。

「匂うぞ……俺達を甚振つて鬻（（なぶ））り殺そうと付け狙うような腐った匂いだ」

むんずと、今まで微動だにしなかった人影が動く。それは発言とは裏腹に鼻歌でも歌いそうなほどの余裕を見せる女性だった。

「おお、レナ君！　君からも何とか言ってくれたまえ。僕の心は既にブルーで爆発寸前だよ」

その名をレナといづ。全身を紫色の鱗に覆われ、背中には広げれば三人は収まるであろう大きさの翼。そして棘を持つ尻尾を持つ、その姿はまるで”竜”。

服装は自身の鱗に同化させるようなチエインプレート。至る所に傷がついたチエインプレートからは何度も戦いを切り抜け生き残つたと言わんばかりの風格が漂っている。

「不発弾のまま、真っ青な海の中で沈んでる。女垂らしのルーフェンス」

更に別の声がレナに助けを求める白兎を罵倒した。

その声は馬車の手綱を引く方向から聞こえてくる。今までと違つるのは、その声が男性でも女性でもなく機械音声といつ事だ。中性的といつ訳でもなく、不気味な程に単調な声。

「ロア君まで……ひびこッ！」

シクシクと、わざとらじい声を漏らしながらルーフェンスと呼ばれた白兎は遂に沈没した。

「み、監さん。あんまり苛め過ぎるのは良くないかと……」

よしやく仲裁の声が加わる。

「ヴィロ教授は分かつてらっしゃるー。」

ルーフェンスが歓喜の声をあげ俯いていた顔をあげ、声の主の元ヘトコトと駆けていった。

駆けてくるルーフェンスを困った表情で見ているのは青年と中年の半ばといった感じの男性。学者肌なのか、周囲と比べると浮くような高尚なスーツを着こなしていた。

馬車に乗つてゐる同乗者はこれで全員。

レイドにイリア、レナにルーフェンス、ヴィロ。そして姿こそ見えないが手綱を引いているであろうロアと呼ばれた機械音声の御者（（ゑよしゃ））。

「全く、放つておけばいいものを」

レナが、呆れた素振りを見せる。顔は笑いを堪えており、その場を楽しんでいるのが見え見えではあるのだが、他の面々は気付いていない。

加えて言うならレナが同時に何かの気配を察知した事にも、まだ周りの人間は誰も気付いていなかつた。

「茶番劇もそろそろ終いにした方が良さそうだぜ。」山賊のお出ましだ

レナの言葉に、ヴィロ以外の全員が身構えた。

この鉱山が廃れた理由は他にもある。元から、ここに住んでいた山賊が暴動を起こしたのだ。廃坑となつた今は山賊の住処となつてしまい、無法地帯と化している。

レナの反応が一番早く、その手には既に武器が握られていた。槍と薙刀を割つて足したような独特な形状をした武器で馬車の天井を突き抜けそうなほどに長い。

「こつちよ、片付けるとしますか」

お次にイリアが背中に抱えた大筒から木製のロッド（棒）を取り出す。

「あくまで相手は”聖王國（セイオウノク）”の民。護衛が最優先ですが、撃退するだけに抑えて下さい。田的こそ違いますが、事を荒立てたくはないのです……」

「分かつてゐる。帝国出身の俺が聖王国の人間に迂闊に手を出せないのは重々承知の上だ」

レイドの言葉を遮つて、レナが先に答えた。

「助かります。ロアさんはルーフェンスさんとヴィロ教授の護衛をお願いします」

「了解」

レイドが指揮をとると同時に馬車が止まり、全員が動き出す。

「僕も動くとするか」

腰に携えた剣帯に手を伸ばしながらレイドは馬車から降りた。

馬車から降りて改めて確認したが双方は崖に阻まれ、前と後ろしか逃げ場は無い。格好の餌場にレイド達は飛び込んでしまったという訳だ。しかし、何も対策せずに飛び込んだ訳ではない。

レイドが向かった先は崖の上。急斜面の域を遙かに上回った断崖絶壁を人間業とは思えない動きで駆け登る。

まるで戦場から逃げ出すよつて駆け登る。

『我は魔 汝は魔力 立ち塞がるものを退ける清淨なる炎よ』

イリアは馬車の前方に大きく移動して立ち止まっていた。その場から一切動かず、まるで絵画を描くようにロッドで華麗に、かつ精彩に空をなぞりながら念仏のように何かを唱えている。

『我らを導く灯火となりて 悪しき者には裁きの鉄槌を』

山賊が崖から飛び出していく。前方に飛び出していく、尚且つ無防備な彼女は真っ先に狙われた。

それでもイリアは微動だにせず一連の動作を止めない。むしろ来いと言わんばかりの気迫を漂わせながら山賊達には目も暮れずに。

突然、空をなぞるロッドの先端部分から火が現れた。

「術式完成つと」

満足げにイリアが笑う。木製のはずのロッドは何故か燃えない。そして灯された火も衰えることを知らずに、轟々と燃え続ける。

「火傷しない内に逃げた方が良いわよ」

山賊達にイリアは火を灯したロッドを差し向けながら挑発する。イリアを囲むように集まつた山賊の数は、およそ10人。そのうち2、3人は目の前で起きた超常現象に臆したか、あるいはイリアの気迫そのものに恐れをなしたか腰を抜かして一目散に逃げ出す。

「テ、テメー等。相手は女狐一匹だ！ 何、腑抜けた面してやがる！」

勇猛か無謀か。仲間を鼓舞しながら巨漢の男がイリアに向かつてナイフを片手に襲い掛かつてきた。

「折角、忠告してあげたのに。それと女狐って言つたわね？」

女狐と呼ばれた事に、ピクリと青筋を立てながらイリアは火の灯されたロッドを地面へ向けて突き刺す。

すると周囲一帯を包み、覆い隠すように円形の火柱があがつた。丁度、イリアを中心にならって山賊達は逃げ場を失う。

ナイフを片手に襲い掛かつてきた巨漢すらも、言葉を失つて動きを止める。

「もう逃げられないわよ。煙の吸い過ぎでくたばるか、肉焼きになつて灰になるか。好きな方を選びなさいな」

炎で形成されたリングの中心に立つて居るにも関わらずイリアは余裕の笑みを浮かべ、愚かにも煙が舞う中、口を大きく開けて山賊達に問い合わせた。

山賊達は死を前にして降参する。

「懸命な判断」苦勞様

イリアはロッドを逆さにしてから、火の灯つていらない部分で地面に突き刺す。

すると、先程までの炎のリングが嘘のようにジュー・ジューと煙を

あげながら消化されていく。

「……少しの間、眠つてなさい」

瞬間、安堵の息を漏らす暇も『えす』にイリアはロッードで戦意を挫かれた山賊達を気絶させた。

一方、レナは馬車の真上を陣取りイリアの一連の行動を眺めていた。その顔は氣分を害されたと言わんばかりに不機嫌さを醸し出していた。

(魔人……か。相変わらずふざけた力を持つてやがる)

レナが氣分を害している理由の一つに彼女が”魔法”と呼んだものがある。

イリアのような存在を”魔人”と呼ぶ。ただの人と何ら変わらない外見容姿。華奢で脆く、知恵で生き残ってきた人間のそれと全く変わらないように見える肉体。

けれど彼らは”魔力”と呼ばれるものを巧みに操り、”魔法”として扱う事が出来る肉体の持ち主でもある。

”魔力”とは、自然を作る元素や氣体、物質とは全く異なるもので空氣と何ら変わらず漂っているのだが、空氣の濃度が濃くなれば危険を伴うように魔力も濃度によって、その本質を露にする。

火の元が無からうと火を作れるし、何処からともなく見えないバケツをひっくり返したように大量の水を降らせる事だって出来る。

これらの現象を人為的に引き起こすのが”魔法”。

術式を作り上げる事で術者の思い通りに魔法を発動できる。

「ふざけてやがる」

今度は口に出してレナは毒を吐く。

魔力は自然の法則を根本から否定する力。それ即ち自然の法則に従つて存在する万物にとつて害になり得る。

それはレナにとつても例外ではない。比喩でも何でもなく言葉通り有毒ガスを吸っているようなものなのだ。

「……だから俺の前で」

レナは右手一つで独特な形状の武器、じんそう迅槍を持ち上げる。

「魔法を使つなつつてんだ！」

怒りに任せて迅槍を横に廻ぐ。ブンッと鋭い音をあげながら風が唸り鎌鼬（（かまいたち））のように標的を切り裂く。

それはイリアに向けられたものではなく、岩陰に隠れて必死に魔力を凝縮させていた山賊に向けられたものだった。

「フン……」

結果に満足したのかレナは鼻を鳴らし更に迅槍を振り回す。次々と崖の裏に隠れていた山賊が、その障害物ごと強烈な突風によって吹き飛ばされていく。

レナのような外見をした種族は”竜人”と呼ばれている。

魔法が自然の法則を根本から否定する力なら、自然の法則に従つて最大限の力を。それこそ魔法に匹敵するほどの現象を引き起こす力をレナは持っていた。

だから、魔法が使える魔人を反則とは思わない。とても華奢で脆い彼ら魔人の体では竜人のように自然の法則を最大限に利用するなんて不可能なのだから。

「ん?」

悦に浸つていると突然、近くの岩壁が擦れるような音がした。

気付いた時には、もう遅く馬車の周辺を山賊に囲まれていた。何処からとも無く、次々と次々と虫の群れのように沸いてくる。

「はめられたか」

迅槍を大きく屈いで、今まで以上の突風を引き起こしてやるひつとも考えた。

だがレナは威嚇程度に迅槍を振るうだけで、大技を繰り出そうと思つても躊躇つて動けない。崖が崩れたら取り返しがつかないからだ。それに、ここまで近付かれてしまつたら迅槍の突風で死人が出る。

(チツ、背に腹は変えられないか)

レナが覚悟を決めよつとした最中、

「そこから動かないで！」

頭上、空高く舞い上がり太陽を背に地上を見下ろしながら剣を構える青年の声が響いてきた。

「レイド・コール……」

思わず、頭上高くにいる青年の名前をレナは口づさむ。その後の出来事はあつという間だった。

時は遡り――

「上手くやつてるな」

直角の断崖を登り切つてレイドは下方で展開する一方的とも呼ぶ

に相応しい戦場を眺めていた。

ただ一方的に展開しているのは彼女達が強いからだけではない。

山賊は、こちらが自分達のテリトリー（領域）に踏み込むのを待ちわびていたのだ。地形を把握している山賊達の方が明らかに有利。特に双方を崖に挟まれた、この地形なら上方から攻め込むだけで簡単に仕留められる格好の餌場。

では何故、こんな不利な状況で一方的な展開が引き起こされたのか。その理由はレイドが崖上で待機していた山賊全員を、ものの数秒で片付けてしまったからである。

（地形に固執し過ぎたのが敗因かな。纏まつて集団射撃でも狙つてたんだろうけど、その分、簡単に片付けられた）

レイドは、敵であるにも関わらず山賊達の敗因を冷静に分析する。今となつてはこれぐらいしかする事が無いからだ。

崖の上でボウガンやスリングショットを構えていた、ほぼ全ての山賊。おおよそ20人近くが倒れている。

一部のものは、まだ立ち上がっているが戦意を喪失して呆然と目の前の惨状を見つめる事しか出来ない。

「……さてと」

レイドは、剣帯に剣を収めながら腰を抜かしている山賊の一人に目をつけた。

「ぐ、来るな化物」

その山賊は心底怯えた様子で、レイドを蔑む。いや、正しくはレイドの外見を化物と呼称したと言つた方が正しいか。

「ツ……あなた方も一応、聖王国の民である事に変わりは無い。ここで引いてくれれば、これ以上の危害は加えない」

「来るなって言ってんだよ、化物！」

山賊の持っていたスリングショットがバチンと枝をしならせながら小石の弾丸を射出する。ただの小石でも近距離なら人一人の頭をかち割れる程度の威力は持つている。

「聞き分けが無いですね」

けれど、レイドには傷一つつけられない。眼前に迫つた小石は抜刀の要領でレイドが鞘から引き抜いたサーベルによつて真つ二つに引き裂かれていた。

「ヒツー!?」

更に、サーベルの剣撃はスリングショットすらも綺麗に切つていた。腕を突然襲つた衝撃に驚いた山賊は狂つたように岩陰へと逃げ出す。

「……?」

細心の注意を払つに越したことは無い。レイドは見逃すとは言つ

たものの、本当に撤退したか岩陰へ逃げ出した山賊を追つた。

すると、そこには抜け穴があった。おそらくは廃坑の一部。険しい崖の上に20人もの山賊が集結しているのはシユールな光景だと思つたが、どうやらアリの巣のように崖の内部にはトンネルが掘られているようだ。

そしてレイドはある事に気付く。

「しまった」

嫌な予感を察知したレイドは眼下に目を向けた。

予感は的中。突然、現れた大量の増援が馬車を襲おうと今にも迫つてきているではないか。

イリアは馬車から大きく離れてしまつた為、孤軍奮闘で手が離せず、レイドが目を見張るほどの実力を持つたレナでさえ数の暴力と奇襲を同時にいなすのは難しいようだ。いや、”別国の人間を殺してはいけない”という暗黙の了解が彼女の強過ぎる力を逆に抑圧しているのかもしれない。

ならば、

「そこから動かないで！」

レイドは落ちれば、ただでは済まない高さから飛びながら眼下へ叫びながらサーベルに魔力を収束させる。

——隼の型・鳶雨（（とびさめ））

型の名称が脳裏をよぎり、自然と体が構えた。後は標的だけを確実に仕留め、かつ確実に生かし戦闘不能に追いやることだけを考えて剣技を放てばいい。

中には後遺症が残るものもいるだろうが、そこまで細かい事は気にしてはいられない。

太陽を背に映る、レイドの姿はほぼ全ての人間から異様な姿として映つただろう。

何せ、その姿は魔力を使えるのに魔人では無く獣人でも無ければ竜人でもない。魔人のような体毛がほとんど無い身体。だが、その綺麗な肌の至る部分には蒼く光る竜の鱗が浮き出ていた。そして、何処か未完成のようにただれた竜人のような蒼い翼と尻尾をレイドはもつっている。

『ぐ、来るな化物』

山賊が恐怖と共に放つた罵詈は、レイドの圧倒的な力の部分にで

はなく、この姿に對してだつたに違いない。

サーべルに込められた魔力が限界値まで引き上げられると同時に真下に向けてサーべルを振るう。

すると、雲一つ無い空から大量の雨が降り注いできた。ただの天氣雨のようにも見えるが、その雨粒一つ一つが形を保つたまま、超高速で地面へ落卜していく。

ただの雨粒でも、この高度から高速で降らせば立派な鈍器になる。その鈍器が何百粒と降り注がれるのだから、まるで集団リンチを受けたような激痛が山賊達の体を襲う。

ズガガガガガンと鈍い音を何重も奏でながら、レナ達を取り囲んでいた山賊達は全員、突然の空からの空爆に悲鳴を上げ次々と倒れていた。

これ以上の増援は来ないだろうと踏んだレイドは不安定な飛行しか出来ない不完全な翼で地上に降りる。

「ブラボーブラボー！」

ルーフーンスが安全を確認した後、馬車から降りてレナとイリア、そしてレイドに拍手を送った。

「いやー、猛牛の如く戦う戦乙女（こくせおとめ）も素敵だね

「誰が猛牛ですか？」

ルーフェンスの失言にイリアが青筋を立てる。

「は、ハハハ。言葉のあやだよ。そしてレイド君。君の華麗な剣技には惚れ惚れする」

鬼の形相で睨みつけてくるイリアから逃げるようルーフェンスがレイドに近寄ってきた。

レイドはルーフェンスの褒め言葉に対し謙遜の言葉を述べる。

「ふふっ、その余裕を醸し出すクールな対応も相変わらず素敵だね。今度、夜に一杯かわさな……」

「相変わらずって何ですか。変な誤解を招くような言い方はやめてください！」

レイドは慌てて、ルーフェンスから逃げ出す。

「あれが、聖王国の竜騎士（りゅうきし）、レイド・ゴールの実力という訳か」

先程までの修羅場が嘘だつたように茶化した場を一人、眺めながらレナは呟く。

レナは魔法を巧みに使える魔人を反則とは思わない。けれど、目の前にいるあの存在だけは反則だと断言できた。

蒼の巻 プロローグ ハジマリノトキ（後書き）

余談ですが、御者は馬車の手綱を引く運転手のような立ち位置の人を指します。馬車に乗る機会は滅多に無いでしょうが、もし今後、馬車に乗られる方が読んで下さった方の中にいらしたら「運転手さん」ではなく「御者さん」と読んであげると、馬車の手綱を引く人達は喜ぶかもしません。

ではでは、あとがきはここまで。次回もまだ公開は未定ですが、どうかお楽しみ下さい

【蒼の巻】 魔鉱石 1 三種族四大国

第1章『魔鉱石』

雨に打ちひしがれれば、人は弱る事をレイドは知っている。

ただの小石でも投げつけられれば、人は傷つくし、それが何十何百という数になれば大怪我を負わせられる事だつてレイドは知っている。

(あの時、僕はどんな顔をしていた)

集中殴打を喰らつて氣絶した山賊達を邪魔にならないよう、道脇にどけながらレイドは崖上でスリングショットを真つ二つにした時の自分の心境について頭を悩ませていた。

(やつぱり、怒つてた?)

自分で自分に問いかける。

答えは過去として返ってきた。

10年前、レイド・ゴールがレイド・ゴールといつ名を持たず、
ただのみすぼらしい獣けだものとして生きていた頃の話。

その少年には沢山の肩書き、いや悪名がついていた。

『混ざり物』『化物』『ケダモノ』『悪魔』『人間の皮を被つた怪物』『蒼き悪靈』『冷酷非道』『殺人鬼』

数えていたら、きりが無いほどの悪名を抱えながらも少年は大して気にしていなかった。何せ彼には記憶が無かつたのだから。本当の両親も、故郷も、自分の名前すらも。

何もかもが、少年には分からなかつた。

だから、自分の存在が周囲にとって恵まわしいものである事が当たり前であり何ら違和感を感じずに生きていた。

「ふふっ……」

そこまで考えて、レイドは嘲笑する。

山賊に化物と言わされて腹が立つた自分がいた事に気付いたからだ。

冷静に越した事は無いが、仮にケダモノのまま生き続けていたとしたらレイドは化物と言われようが何も感じず、ただ剣を振るつて目の前の障害を排除しただろ？

つまり、良くも悪くも自分が化物扱いされたら怒りを露にする程度には”人間らしくなつた”という証拠。

「レイドー、これくらいにして、さつと先に進みましょ」

「アの呼ぶ声がしてレイドは振り返った。

確かに、これ以上は山賊達をどけなくとも通行の妨げにはならないだろ。じ時間が取り過ぎると田を覚ましてしまうかも知れない。

「分かつた」

白色で青色のラインが幾つも入った特徴的な騎士服から砂埃を払い、レイドは馬車に乗る。既に他の面子は乗車していた。

「いやあ、しかし三つの種族。それも四大国の人間が揃つて一つ馬車の中とこいつも珍しいね」

パカラッパカラッと馬の蹄が小石を蹴散らす音が軽快に響く中、ルーフェンスがしみじみといった様子で呟く。それに、ほぼ全員が賛同するかのように頷いた。

「へ？ そんなに珍しいことなんですか？」

その中、レイドだけが首を傾げる。何せ妙に全員溶け込んでいるではないか。

「おいおい、聖王國ではのは箱庭なのか？」

そういう問題ではないと、レナが鼻で笑いながらレイドを小馬鹿

」する。

「違う。レイドが世間知らずなだけ」

「イリアまでー!？」

「まあ、確かに異様な光景ではあるかもしれませんね」

イリアにまで馬鹿にされ、落ち込むレイドをフォローする形で中年半ばの学者、ヴィロが口を挟んだ。

「(イ)は聖王国の領土。増してや、”亞人戦争”が終戦したばかりですし」

「俺達、別の巣で暮らしじてる連中がいる」と自体が可笑しい一つ話だよ」

レナがヴィロが言つよりも早く結論を導き出した。

「ま、まあそりこいつ事です」

レナの比喩に苦笑いを浮かべながら、ヴィロがすり落ちしそうになつた眼鏡を整える。

(そういえば、詳しい事は知らないけど亞人戦争が10年前に終戦してたんだつたな)

レイドは10年前からの記憶が無い。その頃、丁度、亞人戦争と

呼ばれる種族間の偏見、差別から起きた戦争が終戦したらしい。

未だに、戦争の名残は各地に残つており三つの種族、魔人と獣人、そして竜人も他の種族とは関わるのを躊躇う傾向にあるらしい。

「ふつ、これも何かの巡り合わせと考えるべきだらう。そういえば、ろくに自己紹介もしていなかつたね」

ルーフェンスが場を締め括り、自己紹介に流れを変えた。

レイド達は同じ馬車に乗り、同じ目的地に向かっているが皆が皆、同じ目的を持つて行動しているわけではない。

とどのつまり、世間話をするような関係では無かつた。

「僕は帝国出身の吟遊詩人でね。聖王国には、旅目的で入国したのだが生憎、路銀が尽きてしまつてね。そのロア君と共にこの馬車を利用した運送業を嘗んでいる。ちなみにロア君が御者ぎよしゃで僕がガイドだ。それと僕の名前は長いからね、ルーフェと呼んでくれると嬉しい」

「この馬車はルーフェンスとロアの所有物で、山道だらうと何だろうと早く走れるのが売りらしく、使つている馬も他の馬よりも一回り大きく遅たくまい体つきだ。

「ああ、ちなみにロア君は重度の人見知りなんだけどね。ああやつ

て顔を隠してはいるが実は誰かが話しかけてくれるのを常に期待しているような人間だから、是非とも構ってくれたまえ。とても喜ぶ」

「変な嘘を吹き込むな」

機械音声越しでも怒っているのがハッキリと分かるぐらいに、大きな音を発しながらロアが否定した。

「ほら、こんな風にからかいがいがあるのでよ」

「さ、貴様……」

引っ掛けたと言わんばかりに笑いをこらえるルーフェに対し、ロアはこれ以上、反応したら負けと言わんばかりに機嫌を損ね、それ以降はだんまりを決め込んでしまった。

「群れるのは嫌いだが、俺も名乗つておくか」

お次はレナが乗り出した。

「俺の名前はレナ・トレアス。トライドラ牙竜国^{トライドラ}の出身だが野暮用で、ここに来た。短い付き合いになるだろうが宜しく頼む」

ロアは悪いが、意外と義理堅い性格なのかレイドに握手を求めてきた。

喜んでレイドは握手に応えるが、何やら故意的に強く握られる気がしてならない。

「では次は私が」

レナの強烈な握手のせいで渋面を浮かべるレイドを他所に自己紹介は続いていく。

「私の名前は、ヴィロ・アルベイン。自由国^{バーロス}で魔力に関する研究を続けていたのですが、聖王國の各地にて魔力の大量発生が確認されていると聞いて検分の為に出向いてきた次第です」

ヴィロが丁寧にお辞儀をし、

「そんじゃ、締め括りといきましょうか」

イリアが自己紹介のラストバッターを務める。

「私はイリア・ホーネット。んで、そつこいるのが……って、何やつてんのよ、レイド」

レイドの異変に気付き、イリアが何やら如何わしいものを見るような目つきで会話を中断する。

(やつと氣付いてくれたツ……！)

レイドは心の中で救いの手が、よけやく差し伸べられた事に感謝した。

というのも、レナは相も変わらずレイドの腕に謎の重圧を加えており、いい加減レイドにも嫌な汗が滲み出していたのだ。しかも相手は口調こそ男のそれだが女性である。レイドは反抗精神で握り返す事も出来ずに、耐え続けるしかなかつた。

「フツ……」

レナが笑いながら、手を離す。

「少し力勝負がしたくなつてな。膝をつけないタイプの腕相撲をしていたんだ……」

(だろ……?)

作り笑いを浮かべながら、レナはあからさまな嘘をつく。そして、同意である事を促すように。いや、脅すようにレイドに耳打ちした。

全く以つて、レナの意図が読めないレイドだったが、とりあえず話を合わせないと嫌な予感がしたので、ぎこちない笑いを浮かべながらレナに合わせてみる。

「うう、そうです。レナさんはお強いですから少し力比べをしてみたくて」

心の中では、誰か察してくれと願つてやまないレイドだったが、

「ほら、腕相撲つて普通なら膝をついて根っからの力勝負になっちやうじやないですか。だから敢えて膝をつかないアンバランスな腕相撲で勝負しようかと……ハツ、ハハハ」

一同がレイドの発言に沈黙する。こんな滅茶苦茶な嘘をついたら怪しまれるに決まっている。

「まあ、確かに種族によつて腕力差は大きく変わつてくるし、その変なルールの方がフェアに機能するかもね」

幸か不幸か、イリアが嘘をカバーするかのようにレイドのフォローリーをしてくれた。目は笑っていないが……、

「あーもう。話が脱線しちゃったわね。改めまして、私はイリア・ホーネット。武術家だけど”ハイデルヴェルグ騎士団”的魔法騎士を務めてる。んで、そっちのレイドは同じく”ハイデルヴェルグ騎士団”的龍騎士^{ドラグーン}で同僚。私達がヴィロ教授の護衛を務めてるって訳」話の軌道を修正しながら、レイドも纏めてイリアが自己紹介をした。

ハイデルヴェルグ騎士団というのは、レイド達が所属する騎士団で亜人戦争の終戦後に勢力を拡大。主に治安維持の為に動いているが、内容によつては今回のように単身の護衛任務を請け負うこともある。

「あの、私は教授というほどの人間では……確かに路銀を賄うために魔力研究の知識を広める事はありますが、弟子などは持つておりませんし」

ヴィロが自身に対する呼び名に違和感を覚えたのか、ハンカチで額を伝う汗を拭いながら困った顔を浮かべる。

「いえいえ、魔力なんて摩訶不思議なものを論理的に解明しようと/or>してる時点で凄いし、ヴィロ教授の実績は聖王国でも有名です。それに、ヴィロ教授だと語呂が……」

「ストップ！ イリア！」

イリアが思わず口に出そうとした言葉をレイドが遮る。

語呂が良いから呼んでるなんて本人の前で言つたら失礼だ。

「聖王国シャルティエのレイド君にイリア君に自由国バーロスのヴィロ教授。牙竜国トライドラのレナ君に僕達、帝国グランベルクの人間か。しかも種族も目的も違うものだらけ。ふふっ、亜人戦争の影響が最も少なかつたと言われる聖王国だからこそ形作れる状況なのかもしないね」

ルーフェンスことルーフェの言葉に一同が頷く。イリアに世間知らずと罵られたレイドも流石に頷いた。

今、レイド達が踏みしめている大地は”クレアシオ”と呼ばれる大陸で四つの国に別れている。

一つ目が聖王国シャルティエ。東南に面しており、騎士団発祥の地で亜種族間での諍いは比較的、少ない方で他国との貿易も盛んな国。

二つ目は帝國グランベルク。西に面しており、クレアシオでは最も大きな面積と人口を誇る国。技術力はトップクラスだが亜人戦争発端の地とも呼ばれ、今現在もレジスタンスやテロリスト等の動き

が目立つてゐるらしい。

三つ目が聖王国シャルティエと帝国グランベルクに挟まれるような位置にある自由国バーロスで、”ギルド”と呼ばれる組織が国を構成されている。中心部という事もあり、様々な種族、人種の人間が入り乱れて暮らしている。

最後に牙竜国トライドラだが、クレアシオの最北端に位置しており竜人が主に暮らす狭い国。人口も最も少なく土地の環境も悪い貧民国で、竜人以外は住めないとさえ呼ばれるほど地形をしている。

以上、四つの国で構成されたクレアシオだが今レイド達が居るのは聖王国で、これがもし帝国の領土でもあるうもんなら亞種族間のいざこざで険悪な状況になつていただろ。

簡単な話。どの国も戦争の名残を受けてギスギスしており、他国からの刺激を受けたり与えたりすることを極力避けているのだ。
(そういえば、聖王国以外の話つて滅多に聞かないな)

レイドには10年前からの記憶が無い。気付いた頃には聖王国にして他国には出向いた事なんて無かつた。そもそも、記憶があつた

としても聖王国以外の国にいたかどうかなんて分からぬ。

(特に牙竜國の人なんて滅多に見れないし……まだ目的地まで時間もあるようだから聞いてまわってみようかな)

レイドから近い席に座っているのはレナだが近寄りがたい空気を放つてゐるのと、ついさっきの謎の握手の件があるのでまずは最も友好的な雰囲気を漂わせているルーフェに話しかけることにした。

「そうだな。僕は四大国を全て周つたことがあるが、やはり帝国の堅苦しさにはキツいものがあるね。質実剛健なのは良くも悪くも住みづらい。それに比べ、聖王国は機械が普及していないのが不便だが人も土地も価値観も美しいものばかりで色がある」ルーフェは珍しく曇った表情を浮かべ、「帝国は色に例えてしまふなら灰色さ。衝突ばかりが繰り返される土地は荒み、軍が徹底した鎮圧を行わなければ簡単に自滅してしまうような国だよ。だから僕は帝国に定住せず、あちこちを転々としながら旅をしている」

何處か遠くを見るような目で語つたルーフェにレイドは怪訝そうな表情をしたが、内面では次々と好奇心が湧き出てきていた。

「機械というと、あのカラクリ細工みたいな便利な道具ですよね。帝国だと翼が無くても人を乗せて空を飛ぶ乗り物があるとか風の噂で聞いたことがあります」

「飛行船の事かな？ まだ開発途上だが確かに鳥獣人や竜人でなくとも遠くへ飛べる船はある。しかも複数の人を乗せて同時にね」

「おおっ！ 一度、大空を飛んでみたいのが夢だつたんです。飛行船か～」

上の空で飛行船に憧れるレイドに今度はルーフェが訝しげな表情をする。

「君も飛べるのではないかね？」

ルーフェの問いに我に返つたレイドは苦笑を浮かべながら、自分の翼を広げてみせた。それは鱗で覆われた竜人特有の翼だが、レナに比べると明らかに小さいし虫食いのように穴が開いていて何処か未完成のように爛ただれてもいる。

それだけではない。左の翼は折れたような痕跡があり変な方向に曲がっている事にルーフェは気付く。

「…………」

ルーフェはレイドの左翼が折れている事に関しては敢えて何も言わなかつた。言えるはずが無かつた。

「ハハハ、僕つて魔人と竜人のハーフなんですよね。竜人に比べて翼が小さくて長くは飛べないんです。だから、余計に空を飛ぶ事に憧れるのかもしれません」

何せ本人は、大して気にしていないように苦笑ではあるものの笑みを浮かべているのだから。その笑みは無理をして作っているもの

でも自身の翼に対しても嘲笑している訳でも無いようにルーフェには見えた。

「ふむ、帝国には優秀な666（ロクロクロク）工房がある。おそらく来年にでも飛行船の普及が開始されるだろうね」

「本当ですか！」

「一般人の手に届くのはまだまだ先になると思つけど

「それでも待ちます」

再度、上の空で恍惚とした表情を見せるレイドにルーフェは心中で呟く。

（魔人と竜人のハーフ……か。）ここまで長生きしているハーフを見るのは初めてかもしないね）

ルーフェはレイドが奇妙な姿である原因に薄々気付いてはいたが、その理由がハーフである事を信じ切れていた。

亞種族同士のハーフは非常に珍しい。

そもそも亞種族同士が愛し合つ事は滅多に無いし禁忌とされている。それに亞人戦争が勃発していた為、時期的にも亞種族が愛し合う可能性はゼロに等しい。そして何よりもハーフは産まれにくいし体が弱いとされている。大半は産まれることもなく事切れるか幼くして死亡する。

なのに何故、目の前のレイド・コールというハーフは、あそこま

で強い力を持ち生き延びているのか？

身体的な問題もさることながら、時期的にもルーフェンには信じきれなかつたのだ……。

（もし、本当にレイド君がハーフだとしたら相当な地獄を見てきたに違いない）

亜人戦争。種族間の差別によって荒んだ大地の中、彼はどうやって生きてきたのだろうか。

「ルーフェンスさ……じゃなくて、ルーフェンさん。どうかしましたか？」

深く考え込んでいたルーフェンを、レイドが心配そうな表情を浮かべながら見つめていた。

「いや何、帝国の話をしていたら少し望郷に浸つてしまつたようだ」

「ああ、長く話しこみじゃいましたね。すいません」

「構わないよ」

普段の笑みに戻つたルーフェンを見てレイドはお礼を言つた。

「あの、お話中に申し訳ないのですが帝国では魔力を利用した道具の開発も薦められているといふのは本当でしょうか？」

突然、ヴィロが話の間に割り込んできた。

「……？ いや、魔力を燃料に還元する実験は行われていたらしい
が666工房でも未だ魔力を利用した道具は作られていないらしい
よ。何せ、実験は失敗したらしいからね」

「やはり……魔力はこの世の理と外れた存在。この世で作られた歯
車と？ み合う筈も無い。666工房の知名度は自由国にも届いてい
ますが」

ヴィロが一人、納得したように眼鏡を光らせる。レイドは唐突に始
まった二人の会話に追いつけず、聞くだけでも精一杯だ。

一人が口々にした666工房とは帝国随一の工房で、グリー・ディ・
パシエン博士という有名な発明家を筆頭に構成されたクレアシオの
技術の集合体とも呼ばれる場所。

飛行船も、666工房が開発したようで他にも自然エネルギーを
活用した機械なども発明しているらしい。その名は聖王国にも届い
ており至る所に666工房の印が貼られた道具や機械があるのをレ
イドも見かけていた。

「しかし教授。魔力に関してはあなたが一番詳しいはず。わざわざ
聞くまでも無い結果だろう？」

「いえ、観点の違いは非常に重要です。私はこれでもギルドの人間
として周辺諸国から魔力に関する情報を仕入れ、管理する役目につ
ります。使い方一つ誤ればどうなるかさえも分からない代物ですか

ら――」

その後もルーフェとヴィロは会話を続けていたが専門用語の山で聞く事すらままならなくなり、オマケに暇そうにこちらを眺めていたイリアまでもが魔力に関する会話に加わった為、レイドは逃げるように牙竜国についてレナに聞く事にした。

「あん？ 牙竜国の話なんか聞いたってつまんねーぞ

相変わらずの威圧的な態度に、レイドは内心、「苦手なタイプ」などと心の中で呟いたが抑える。

「……にしても、聖王国って奴は噂通りのぬるま湯だな

「え？」

「ひつひつ国は汚点を大きな絨毯で覆い隠してただけって話だ。やり方がヌル過ぎる」

「何が言いたいんですか？」

「物分りがあっせーな。言うなれば山賊の対処だよ。ひつひつ国なら即刻、打ち首で全員始末する」

レイドは、さも当たり前のように物騒な言葉を口に出すレナに驚愕した。今、彼女が話しているのは紛れも無く牙竜国の話にも繋がっているのだから。

「だ、だからって無闇に人の命を絶つのは……」

「おじおじ。その結果がこういつ山賊の巣窟、平和な国の裏に潜む闇を作り上げたんじゃないのかよ？」

言い返せない。

「本国に利害を齎すもたらす弊害は排除する。勝手に人様の家にあがりこんで、くつひきやがる虫を叩き潰すのと大差ないだろ?」

「なつー!?

あまりにも冷酷な例えにレイドは背筋に悪寒が走るのを感じた。レナはレイドの反応を楽しむように、むしろ微笑を浮かべながら立ち上がる。

どうして田の前の女性は、いつも淡々と情けの無い言葉を紡ぎ出せるのか。

それがレイドには理解できない。まるで、別の生き物を見ているような……

「これが、牙竜国の考え方だ」

レイドは牙竜国について何も知らなければ見た事もない。だが、レナの言葉から察するに聖都とは生き方も違えば考え方も違うという事だけははっきりと分かった。

そして悔しいが、言い返せる言葉が見つかることも痛いほど身に染みる。

「……そろそろ霧地帯か。おい、運び屋。受け取つとけ」
//スト

無言になつたレイドに向處か満足げな表情を浮かべたレナは、未

だ魔力についての話題に華を咲かせているルーフェに硬貨を投げ渡し、

「おや、こんな中途半端な所で降りるつもりかい？」

「充分。後は単独で動いた方が都合良いんだよ」

馬車の背に配置された扉から飛び降りた。かなりの速度で今も走り続ける馬車からだ。

「せいぜい、足元拘われないよう気をつけやがれ」

嘲笑うかのように大きな翼を羽ばたかせながらレナは、そのまま山の何処かへ飛んでしまった。廃坑が立ち並ぶ鉱山の中、途中下車で去ってしまう等、正気の沙汰とは思えないが何故かレナなら無事に目的を果たして街まで帰還するだろうとレイドは思った。

そういえば何の為に、ここまで同行したのだろうかとレイドは今更ながらに疑問を抱ぐ。

「牙竜国は貧しい。自分達の国で食料を貰えない牙竜国の民は、よく傭兵稼業として民を他の国に派遣するそうだ。彼女も誰かに雇われて動いているんじゃないかな。僕も詳しい事情は知らないけどね」

レイドの疑問を悟ったのか、ルーフェが水の入ったボトルを口に当てながら喋る。

「しかし、空気が薄くなってきたせいかな。気分が悪い」

若干、疲れた表情を浮かべてルーフェが座り込んだ。

「多分、そろそろ目的地に到着すると思うけど……ちょっと待って。魔力の濃度が濃くなつてきてる」

イリアが目を大きく見開きながら、小規模な術式を腕で刻み始める。腕が線を引ぐごとに白銀の糸が宙に張り巡らされていく。

1分足らずで出来上がった白銀に光る魔方陣のようなものを、イリアは手で掬い取り握りつぶす。

すると、馬車の中に魔方陣の破片が散りばめられ、次第に白銀から紫色の破片に変色していく。明滅する紫色の破片を見るイリアの表情は徐々に険しくなり、同じくヴィロ教授も元から細い目を更に細めて見間違いかと眼鏡を何度も掛け直しては目の前の光景を見直していた。

「イリア、これは一体？」

「魔力を探知、視認できるようにする術式。その場に漂つてる魔力の濃度が一定値より高ければ高いほど色が濃い紫色に変色していく」

「つまり……」

レイドの確認を促す問いに、「クリ」とイリアが頷く。

つまり今、レイド達は濃い魔力が漂う真っ只中にある訳だ。何が起こつても不思議ではない、それを可能にする力が周囲一帯を囲っていると思うと背筋が凍る。

引火すれば大爆発を起こすガスが漂っているのと同義。いや、使

こよみどりはそれ以上の天災だって起こり得るのだから。

【蒼の巻】 魔鉱石 2 反則

「ちょっと待ちなさいっての。探査も慎重に行わないと地雷を踏みかねないのよ」

ロアが手綱を引く手を止め、イリアが探査に集中できるように環境を整えた。

静寂と、明滅する魔力だけが周囲一帯を包み込み緊張感が全身を強張らせる。

イリアは歩みを止めた馬車から降りた。周囲は魔力に毒されたか、面妖な植物が高地にも関わらず生い茂っている。

右方には薦が生い茂った崖があり、風に呻られて生き物のよつこ、ざわめく薦は不気味で仕方が無い
し、左方には断崖絶壁が奈落の底へ誘つかのように顔を見せている。

どうやら魔力の発生源も辿れるようでイリアは出来るだけ広い平地で立ち止まり、天に向けてロッドをかざす。

白銀の糸を何重にも束ねて作ったような極太の閃光が天へ向けて放たれ、途中で花火のように魔法陣が空高くに展開された。それは先程の手順と同じくして砕け散つていき、周囲一帯に雪のように降り注ぐ。

(何だらう。凄く嫌な予感がする)

レイドは、目の前の神秘的に映る光景を目の当たりにしながら

不安な気持ちが胸を搔き回し始めている事に気が付いた。

つい落ち着けずに剣帯へ手を伸ばす。

(イリアの探査が失敗に終わることを恐れているのか?)

——いや違‘う。

レイドは即座に頭を過ぎた推測を否定した。

では、どうしてこんなにも不安な気持ちが止まらないのだ？

(探査の結果、恐ろしい濃度の魔力が検知される事を恐れているのか?)

——これも違‘う。

今度は少し考えたが、やはり別の理由があるとレイドは確信した。何故かといえば、魔力の濃度が高いと検知された所で剣帯に手を伸ばしても何も出来ないに決まっているからだ。

(やうだ。どうして僕は剣帯に手を……ッ!)

答えに気付いた瞬間、レイドはサーベルを抜刀する。

——騎士道精神・亀の型・相塞さうさんご

亀の甲羅の如き鉄壁を作り上げる剣術をレイドは頭で考えるより先に体で動き解き放った。

抜刀した瞬間、真空波が右方の崖と馬車の間を突き抜けていき、崖から放たれた高速の投擲物が粉微塵に粉碎されていく。

スリングショットやボウガンの類ではない。もつと素早く正確に射止められる鋭利な弾丸のようなものが何発も何発も崖の方向から放たれていた。

(どうして、もつと早く気付けなかつたんだろう)

山賊の住処は、それこそ毛細血管のように崖の中に張り巡らされているに違いない。

狙撃には打つてつけの薦でビックシリと覆われた崖^{ポイント}、不自然に山道を走る馬車。そしてイリアが空に打ち上げた派手な魔法陣（目印）。

山賊が見逃すはずないではないか。

「イリアッ！」

一人、取り残されて中心に立つてているイリアにレイドが叫ぶと、イリアは大丈夫と言わんばかりにロッドを天に向けたまま叫び返す。

「目を塞いでなさい！」

突然、音も無く閃光が周囲一帯を包み込んだ。

目を塞いでいたが、それでも目頭が熱くなつてくる程の光線が差し込んでくる。イリアの言葉を信じずに目を塞がなかつた人達は酷い目に合っているだろう。

「魔力を視認できるようにする魔法って、応用すればこういつ事も出来るんだけど……あつちやー、ちょっとやり過ぎたかしら」

数秒後、眩しい閃光が止み、苦悶の声をあげ待機していた山賊達が転げまわる光景が映る。

おそらく、イリアは人が視認できる魔力の光量を調節したのだろう。本人も匙加減を忘れるぐらい大幅に引き上げて、さながら閃光手榴弾を数十倍にも強化した目くらましを作り上げたのだ。

「イ、イリア！？ ヴィロ教授達に何かあつたりビツするんだよ」

「げつ！？」

レイドの言葉は図星だったようで、イリアが冷や汗をかき始めた。幾ら警告を促したとはいえ、戦闘慣れしていない人間の反射神経では瞬間に目を塞ぐことなど難しい。

……と、レイドは心配していたのだが、

「私達なら大丈夫です」

「さあ、ナイト諸君。僕達を守ってくれたまえ」

等など馬車からは応援の声が届いており、皆無事のようだ。

(何だ。僕が心配性過ぎただけか)

安堵と溜め息を織り交ぜながら、レイドはすぐに表情を切り替えて薦の生えた塵。敵の居城を見据える。

「イリアは引き続き、探査を」

「ラジヤー。レイドも気をつけなさい。意外といつたら、連絡網は侮れないみたいだから」

イリアの忠告にレイドは頷いてから、崖へ駆け走る。

一人一人の実力は大した事は無いが、最初の襲撃といい今回といい狙われやすい行動はしていたものの広い鉱山の中、用意周到に待ち伏せるなんて並大抵の統率力では不可能。

それこそ切れ者なリーダーが裏で手を引いている可能性がある。今まで以上に神経を研ぎ澄ましながら、レイドは薦で覆い隠された崖へ突撃した。

壁にぶつかって痛がるのが闇の山に思えるが、それはフェイク（偽物）でレイドは薦を引き裂き崖を切り抜かれて作られた廃坑の中へと進入する。

狙撃用に開いた小さな穴から光が差し込み、薄ら暗い暗闇の中でも山賊達が目を塞いでイリアの放った光線に視界をやられていた。

（最新鋭の狙撃銃？　何でこんなものを山賊が！？）

レイドは訝しげな表情で、山賊達が持っていた狙撃銃を見る。

使い古された様子のない綺麗なフォルムをした狙撃銃には銃器を取り扱わないレイドでも見覚えがあった。

最近、帝国から自由国を経由して輸入された精密射撃と威力を両立させた最新鋭のライフルである。

明らかに鉱山奥深くに巣食う山賊達が手に入れられるような代物では無いはずだが……、

(謎が深まるばかりだな。でも今は考えていても仕方が無いか)

レイドはサーべルの柄で山賊達を次々と氣絶させながら、暫く身動きの取れないよう頑丈な薦を利用して縛つておいた。

——グルルルルルル

「え?」

意表をつくよに動物の鳴き声が聞こえた気がしてレイドは、その場から一步後退してサーべルを構えた。

聞こえてきた方向には、ただただ暗闇が広がっている。野生の獣が偶然、通り過ぎただけなのだろうが山賊達はいつも、こんな危ない道を使って移動しているのか。

(このまま放つておくのはまずいな)

放置しておいたら先程の鳴き声の主に喰われてしまうかもしれない。レイドは拘束していた山賊達を開放して、一人だけ表へ連れ出した。茶トラ柄をした猫獣人の男だ。

全員の世話を流石に見てていられないが、聞きたいことは山ほどある。

廃坑から出ると、イリアは探査を終え残っていた山賊を片付けている最中だった。

「『』めんなさい。私が不用意に探査の幅を広げたから」

「いや、イリアは悪くないよ。それより探査の方は？」

「魔力が一部から湧き出てて波みみたいに流れてきてる。ここからそう遠くないところに発生源があると思うわ。ただ、詳しい事はヴィロ教授に聞いてみないと分からない」

イリアもイリアで、何かしら疑問を抱いているのかレイドと同じような複雑な表情をしていた。

「でさ、その襟首掴んで背負つてる荷物はどなた？ あつ！ もしかして好みのタイプだからお持ち帰りとか？」

「そんな訳あるか！ ……聞きたいことが山ほどあるからね。それに仲間が一人囚われていれば山賊達も迂闊に手は出せないはずだ」

「冗談だつて。にしても、あんたつて意外と考えることが黒いわよね」

「……？」

イリアが一人で納得している様子を理解できずにレイドは首を傾げたが今はとにかく、この場をさっさと離れ落ち着ける場所を探し、山賊を問い合わせるのが先決。

それに既に夕刻を過ぎていた。鉱山の中、夜間になれば身動きが取れなくなってしまう。

「あつ、ちよつと待ちなさいつてば」

イリアを追い越して、レイドは、やせ急いで足振りで馬車の元へと向かう。

「ツ！？」

突然、頭上から狼のような遠吠えが木霊してきた。いや、正しくは右方に連なっている崖の上から。それも複数。

考える暇も無く、レイドは納めていたサーベルを再度、剣帯から引き抜くと同時にサーベルで目の前に現れた影を一閃した。

キャインと虚しい鳴き声をあげながら、崖から飛び降り襲撃してきた四足獣の一匹が真つ二つに引き裂かれ、勢いに任せて左方に広がる奈落の底へ落ちていく。

先程の遠吠えとレイドに引き裂かれた時の鳴き声からして、恐らくこの四足獣達は狼だらう。

血しぶきがレイドの全身に降りかかったが気にする暇も無く次から次へと狼が崖を飛び降りながら襲ってくる。

狼の鮮血を浴びて一步、レイドはたじろいだ。そして自分が今置かれた状況に改めて気付く。

後方に広がるのは、落ちたらまず生き残れるはずがない奈落の底。前方には奇襲を仕掛けってきた狼の群れ。

明らかに今、自分が置かれている状況は不利だ。

(野獸の狙いは氣絶した山賊達ではなく僕達だったのか)

防戦一方を強いられ、逃げ場も無い。

そして、今まさに狼が獰猛そうな牙をきりつかせながらレイド達へと……。

「　ｐｍ#\$%！　！」

その時だ。何か暗号のようなレイドには解読できない言葉が響き渡った。

すると、今にもレイドとイリアを襲おうと飛び掛ってきたはずの狼の群れが全員、クゥーンと情けない鳴き声をあげながら、お座りと命令されたように動かなくなる。

「 今の内だー 馬車に飛び込めー」

聞き間違いようの無い声がレイドの耳に入つてくる。機械音声にも関わらず感情が伝わってくる、この声は間違いなくロアだ。

レイドが全速力で駆け走り、今にも走り出そうとスピードを上げ始めた馬車の後部に跳躍すると同時に狼達が行動を再開し怒つたよくな、混乱してこるようにも思える鳴き声をあげながら馬車を追い

かけてくる。

「イリア―――！」

レイドよりも馬車から離れていたイリアは必然的に取り残される形になってしまった。後ちょっとで追いつく所まで迫ってきていたが、動き出した狼達によつて身動きが取れなくなつてしまつてゐる。

「―――〇〇#\$/%!!--」

再度、レイドには解読できない言葉が山道に響き渡り、狼達が”待て”と命令されたかのように立ち止まつた。その隙を逃さずイリアは何とかレイドの手に掴まるような形で取り残されずに済む。

さつきは焦つていたため、誰の声か考える暇も無かつたが今度は、はつきりと誰の声か分かつたレイドは半信半疑で、その声の主に問い合わせる。

「あなたが、狼達の動きを止めてくれたんですね？」

それは性別すらも判断できぬ機械音声の持ち主、ロアだつた。

「……話は後だ。後方の援護は任せたぞ」

手綱を引きながらロアは静かに告げる。

レイドとイリアは後方から未だに追いつこうと、巧みに駆け寄つてくる狼達を追い払い、気付いた頃には陽が落ちて、不気味に光る月明かりが夜を照らし始めていた。

「おい。侵入者共は始末できたのか？」

「ふつ、どうしてどうして意外と鍊度の高い連中を派遣したみたいだな。今のところ、けしかけた部隊は壊滅。しかも鉱山に侵入してきたグループは複数」

そこは金銀財宝の山で彩られた祭壇。いわば山賊達のロッジ（拠点）でヘッド（リーダー）の総本山でもあり、鉱山内の全ての情報網はロッジに集結していた。

聖王国の自警団や騎士団は山賊を馬鹿にしているようだが、彼らの連携と統率力は賊と呼ぶには相応しくないほどに磨かれている。それこそ一個の軍隊と同等な程に。

長年、鉱山を拠点に暗躍していた山賊達の土地勘は非常に優れており、人が住むには厳しい環境が日常的に彼らを鍛え上げる。

「畜生。もつとド派手に忍び込んだ鼠共を駆逐できる武器は無いのか？」

「ふつ、僕という”パイプ”二者の間をとりもつ存在”を手に入れて舞い上がるようだな」
「んだと？」

ヘッドである猪獣人イノシシが、全身を独特な紋様の入ったロープに包まれた細い男の胸ぐらを掴む。

周りで待機していた手下達が、ざわざわと騒ぎ始めた。あるものは煽り、あるものは怯え、あるものはヘッドである猪獣人を止めよ

うと促している。

「……僕に掴みかかる暇があつたら、お前達の土地勘とやらで邪魔な連中を始末したらどうだ？ 僕が君達に関与できるのは物資の補給と情報の供給だけと上から決められている」

フードに隠れて顔は見えないが、薄ら笑いを浮かべているのが声色から嫌でも猪獣人に伝わった。

そう、幾ら組織化された山賊であろうとも最新鋭の狙撃銃なんて仕入れられるはずが無いし、このだだっ広い鉱山の全てを把握するなんて所業は難しい。

それを可能にする存在が今、猪獣人が掴んでいる不気味な男なのである。

猪獣人にとって、目の前の存在は態度からして気に食わない。今すぐにも忌々しいベールを引き剥がしてハツ裂きにしてやりたい所だが、失うにはあまりにも惜しい存在。

半年前ほど前、ぼそぼそと聖王國の目につかないような悪行で生きながらえてきた山賊達の元ヘローブ姿の男は現れた。

目的は不明だが、条件付きで男は山賊達に様々な知恵を教え込まれ、一生使つても手に入れられないような代物を幾度と無く仕入れてくれた。

そして、この男自身の実力が山賊達にとって貴重な戦力でもあったのだ。

「フン」

不満そうに鼻を鳴らしながら、猪獣人はロープ姿の男を金銀財宝の山へ突き飛ばす。

「デリケートかつ硬質な素材で作られた宝石の山々に突き飛ばされれば大怪我の一つや二つ負いそうなものだが、ロープ姿の男はむしろ楽しむかのように空中で一回転しながら金銀財宝の山を蹴り飛ばし、何も置かれていない足場へ着地した。

金属類を蹴り飛ばしたにも関わらず音は無い。

まるで、クツショーンを蹴つて跳ねたかのようにロープ姿の男は着地してのけたのだ。

「やれやれ。折角、手に入れた財宝に傷をつけようとするなんて僕には考えられないな」

飄々と、自分の体ではなく金銀財宝の安全を心配しながらロープ姿の男は久しぶりに体を動かしたと言わんばかりに、その場でパフォーマンスのように跳ねたり空を裂くような掌打や蹴りをかまし始める。

けれど、あれでもロープ姿の男にとつては準備運動程度のものにしか値しないのだろう。細々とした体からは想像がつかないほどに、あれはパイプと呼ぶには恐ろしい力を備えている。

だから、だからこそ、得体の知れない存在であろうとも猪獣人はロープ姿の男を手離せない。

”特に今は絶対に手離せない戦力”なのだから。

「で、約束通りに”材料”は揃えてくれたのか？」

「ああ、ちゃんと逃げないよ！」地下牢に保管してある
意味深な例えを使いながらロープ姿の男は、音もなく自身のロー
ブから何かを取り出す。

それは小さな鉄製のロッド。

イリアのロッドが木製の棍棒（（こんぼう））なら、ロープ姿の
男が携えるロッドは儀式で取り扱われるような錫杖（（しゃくじょ
う））である。

錫杖には竜のよつた紋様が刻まれており、ロープ姿の男が放つ異
様な存在感を相乗効果で引き上げるかのように不気味な光沢を放つ
ていた。

「上出来。それと”魔鉱石（（マーナス））”の管理も厳重に扱つ
てくれよ。あれが無くなると僕がここにいる意味も無くなる」

軽く脅すように、猪獣人に用件を述べてから、まるで氣体のよう
にロープ姿の男は闇もやとなつて姿を消した。

その頃、夜の帳が降り不気味な静寂が舞い降りた鉱山道の途中で
丁度良い休憩地点を見つけたレイド達は焚き火を囲んで休息を取つ
ていた。

レイドは何とか狼を両断した時に浴びた血のりを拭つて、今も手

を忙しなく動かしながらある魔法の調節をしているイリアの様子を伺いにきていた。

舞い上がった煙で、イリアが放った探査用の魔法陣のように氣付かれてしまいそうだがイリアの張つた結界によつて周りからは『岩壁に囲まれた行き止まり地獄』にしか見えないようになつてゐる。

一見、物凄い魔法に見えるがイリアが言うには、魔力の濃い場所ほど魔法の威力も汎用性も数倍、数十倍と増すらしい。それをコントロールするのにも数倍、数十倍の努力と計算が必要になるらしいが……、

「魔法だつて万能じやないのよ」

はあ……と、イリアが心底疲れた様子で溜め息を吐きながら額に垂れ始めた汗を拭う。

イリアの苦労はレイドにも理解できる。曲がりなりに魔人の血を引いているレイドは竜人の血を引いているにも関わらず魔力を扱えるからだ。

「僕も何か手伝えれば良いんだけど」

「あんたには無理よ。レイドにはレイドの領分があるんだから見張りとして活躍なさい」

「え、厳しいお言葉」

勿論、”魔力を扱える”というだけであつてレイドには魔力とうここの世の理から外れた毒素に免疫が無ければ、扱う器量も殆ど無

いので使える魔法のバリエーションは非常に狭く狭い。

応用性も無ければ汎用性も無く、火力も無ければ安定性さえも欠けている。これがレイドの魔法に対する才能であり身体的な限界でもあった。

レイドにはイリアのように派手な炎柱を幾つも出したり、魔力を探査するような精密な魔法も使えない。せいぜい自己治癒能力を促進したり、元からそこで起こっている現象を活発化させたりするのがやっとだ。

ただ、魔人と竜人の絶対的な壁を崩したレイドは周りが出来ないような——それこそレナが反則と言い退けてしまふような独自の武術を扱える特異体质の持ち主でもある。

竜人には”龍脈（りゅうみやく）”と呼ばれる自然エネルギー。

気の流れを把握し操る風水師としての能力が備わっていて、レナが迅槍を振るつだけで頑強な岩をも穿つ風の弾丸を放つたのも龍脈を利用したものだ。

まず自然に吹く風を操作し、圧縮、収束、凝縮させ一個のボール（エネルギー弾）を作り、作ったボールをラケット（迅槍）で狙いたい場所に撃つといった寸法だ。

高地に位置する鉱山には強風が吹き荒れ、風を集めて操るには最高の立地条件だつただろう。

龍脈の元を辿ると風水という言葉が出てくる。

風水とは占いの一種でクレアシオでは単なる言い伝えとされただが、空、陸、海、他様々な環境に強い適応力を持つた竜人達は、風水を実現してしまう程に卓越した”土地利用術（とちりようじゅつ）”を心得するまでに至ったのだ。

だがしかし、何時から？ どうやって？ どんな因果が重なって竜人が龍脈を実現できるまでの力を得たのかは分からない。

何故、自分にこんな力が備わっているのかはレイドにも分からないし、きっとレナにだって分からぬだろう。

生まれたての子馬が必死に立ち上がり、いつか縦横無尽に平原を駆け回れるようになると同時に、本能として竜人は皆、生まれた時から力を身につけ、その力を操るために自分を磨き続けているのだから。

だがそれは義務付けられたわけでもなければ、必ず磨かなければいけないという訳でもない。

そもそも、竜人が龍脈を持つていても理由が必要だらうか？ ともレイドは考えたが哲学的な思考は自分には似合わないと思考を切り替えた。

「皆さん。お疲れしちゃうが、この辺りで一旦、状況整理をしたいと思います」

レイドは結界内にいる全員に焚き火の近くに集まるよう呼びかけた。

結界を完璧に張り終わったのか、くたくたに疲れ果てた様子でイリアが焚き火の近くに集まり、次に馬車の点検をしていたルーフェとロア、そしてヴィロがやつてきた。

ちなみに捕まえた山賊の一人は未だに気絶して眠っている。そろそろ起きてもいい頃合なのに、何故か起きてくれないのが少し不安だったがレイドは全員が集まつたのを確認して軽い会議（ミーティング）のようなものを開始する。

「ルーフェさん。この銃について何か分かりませんか？」

レイドは、こつそりと山賊からくすめ取っていた最新鋭の狙撃銃をルーフェ達の前に置く。

「おや？ どうして僕に銃器について聞くのかな？」

ルーフェが、面白そうなゲームに誘われた子供のときのような目をしながらレイドに聞き返した。

「いえ、護身用でしあがルーフェさんの服の膨らみが気になつて。それ、拳銃ですよね？」

レイドの言葉にイリアが驚いた様子でルーフェの服に何かしら違和感が無いか觀察し始める。

一方、ルーフェは恐れ入つたという表情をしながらホルスターに収められた拳銃を取り出した。

「いやはや、完璧に気付かれないよう隠していたつもりだったんだが、流石に戦闘のプロには見抜かれてしまったか」

「いや、戦闘のプロといつのは流石に買い被り過ぎかと。もつと僕が冷静な判断をしていれば都合よく事が進んでいたはずですし」

レイドは判断が何度も遅れてしまつたことに負い田を感じているのか若干、顔を俯かせる。

「ふふふ、君がいなければ山賊の集団に囲まれた時、僕達は無事じやなかつたかもしれない。それは誇つても良いと想つけどね」

「でも……」

もつと早く気付いていれば、山賊達に後遺症を残すかもしないような大技を繰り出せずに済んだかもしれない。

言いかけた言葉を呑み込んで、レイドは話の軌道を戻す。

「ゴホン。とりあえず、この狙撃銃について何か分かりませんか？ ルーフュさんを疑つてゐるわけではありませんが、帝国出身のようですし運び屋でもあるので仮に山賊が密輸ルートを使つているなら……」

「有り得ない

狙撃銃を手に取つて満遍（まんべん）なく観察していたルーフュが、キッパリと断言した。

「僕は帝国を離れた身だから現地の状況は詳しく把握していないが、これが666工房の造つた狙撃銃であることには間違いない」何処か切羽詰つた険しい表情をしながらルーフュは続ける。「666工

房の技術力はクレアシオでは最高峰と呼ばれているが、今現在の技術は他の3国と比べると10年から20年も先をいつているらしい。考えてもみたまえ。そんな大層な技術を他国に。しかも、正規のルートを辿らずに輸出させたらどうなるか？」

ルーフェはパワーバランスの均衡が崩れてしまうと答えを言い放つた。

例えばの話。売れば一生、贅沢暮らしが出来るよつた高価な宝石をスラム（貧民街）の子供が手に入れたとする。

それが、貿易商や物の売買に長けた人間ならともかく大金にありつく機会が全く無いスラムの子供には、どうやって宝石を売ればいいのかなんて分からぬし、宝石に秘められた価値 자체、理解できるかどうか怪しい。

そして、宝石の扱い方を理解できない少年が宝石を持ち続けたらどうなるか？

欲に目眩んだ集団がこそつて暴動を起こすに違いない。

「自分達の手元にしか置けない程に帝国の技術力は発達し過ぎたのだよ。だから不用意に他国に技術の提供はしない」

「待て、ルーフェ！　あまり帝国に関して喋り過ぎるのは

ロアが早口でまくし立てたが、ルーフェは首を振つて尚も続ける。

「ロア君。僕は帝国から離れた身だよ。それに僕が帝国から離れて早数年。その間に帝国がどれだけの進歩を遂げたことか……。僕が

語る内容も時代遅れに違いない

ルーフェは、狙撃銃を再三見てからレイドに投げ渡した。

「それなんだけどね。モテルやタイプ」そ自由国や聖王国に公式で出回っている品だけど、機能は一段階、上の代物かもしれないよ」

「ええつー?」

淡々と狙撃銃の観察を終えたルーフェにレイドとイリアが驚きの声をあげる。ヴィロも口には出さなかつたが、内心驚いている様子だ。

レイドは、すぐさま投げ渡された狙撃銃の隅から隅まで調べるが自警団や騎士団に使用を許可されているそれと何ら変わりない。

「いやー、單なるフュイクの為に一世代前の狙撃銃を真似たのかもしれないけどね。実際に撃つてみないと分からぬが、反動が元來のものより抑えられているし、”レーザーサイト”も——」

またも専門用語の山となつたせいで、訳が分からなくなるレイドであった。

【蒼の巻】 魔鉱石 3 魔力（（毒））

「——とにかく問題なのは山賊達がこんな代物を入手できてしまつてことだよ。場合によつては国家問題にも発展するかもしない」

「やうですか。有難ひございました」

（状況整理するど）いか謎が増すばかりだな……）

レイドは顔を曇らせながら、手元にある狙撃銃を眺める。

（最初に山賊達がけしかけてきたとき、奴らはスリングショットやボウガンを使つていた。あれは、単に僕達を舐めていただけなのか？　いや待てよ……）

「もしかして、山賊は何かを隠してる？」

突然、眩いたレイドにイリアが目を丸くして尋ねる。

「といつと？」

「いや、最初に山賊達が持つていた武器はまさに山賊らしい武装で構成されていた。にも関わらず今度は、どうやって入手したのか分からぬような狙撃銃で僕らを出迎えている」

歯車に潤滑油じゅんかゆを塗つたかのように、レイドの推測は滑らかに勢い

を増していく。

「僕らを徹底して始末するつもりなら、最初の時点での狙撃銃を携えておけば良かつたんじゃないか?」

「聖王國に狙撃銃の所持を悟られないよう、表立つて使用したくなかったんだろうね。だが、それだけだと不自然な点があがつてくる」

ルーフェの言葉にレイドは頷く。

「一度目の襲撃で急に抵抗が本格化してきた。」別に僕らの目的は山賊の殲滅ではない”のに誤解される何かがあつた……

単純に、仲間がやられたからレイド達を警戒視して本気を出したとも考えられるが、それではあまりにも情報の伝達が早すぎるとも考へられるが、

突然、歯車の動きが止まり、レイドは言葉に行き詰まる。後少しで何かの答えを導き出せるような気がして、もどかしくてしうがない。

「それについてなんだが、お前達は狼の群れが襲ってきたことも視野に入れているか?」

無言で静観していたロアが合間を見計らつたかのように口を開いた。(顔は完全に隠れている為、実際に口を開いて喋っているかどうかは見当つかないが)

「そういえば、ロアさんは狼の群れを操作してましたよね

「如何にも。旅の最中で手に入れた——、

「単なる小銭稼ぎの芸当に過ぎないんだが、ある程度なら動物に命令信号を送つて操ることが出来る」

一瞬、躊躇うかの如きにロアが口ごもつたが顔も見えず、機械音声で喋つているせいでレイドには何を思ったかは全く悟れない。

「ただ、命令信号というのは野生の動物には効き辛い傾向にあるんだ。しかも複数を相手にするとなると、な」

「じゃ、じゃあ、あれって一種の賭けだったの！？」

危うく、狼の群れに命を奪われかけたイリアが驚愕の声をあげる。

「あくまで”野生の動物”ならな。俺の使つた命令信号は、元から受けた命令を逆算して跳ね返すものだったんだ」

ロアの付け足しに、あつ、とレイドは声をあげる。

「そりいえば、あの狼の群れ。僕達を最初から狙つて動いていた：

「…」

「ふつ、気付いたか」

行き詰まつっていたレイドの頭に新しい潤滑油が注がれていく。

「野生の狼なら、無防備な弱い人間を狙う。僕やイリアじゃなく馬車を直接襲つても良かつたはずだし、氣絶している山賊を狙うのが最もベストな選択だ。でも……それじゃ、まさか」

「そのまさかだ。あれは”軍用犬”。いや正しくは”軍用狼”（べ

んよつおおかみ））”か？とにかく、山賊が狼を利用していたのは間違いない

ジョーク交じつの訂正をしながら、ロアが結論を述べる。

軍用狼達は本能に忠実な行動を取らず飢えを満たすことよりも優先して山賊達には目も暮れず、レイド達を襲ってきた。

「ますます、山賊達の正体が掴めなくなってきたわね」

イリアが内心、信じられない様子で呟く。

「でも、これで一層、山賊が何かを隠し通そうとしてる可能性は濃厚になつたかもしねない」

「一押し情報があれば……と、未だに眠睡しているかのように寝ている山賊を恨めしく想いながらレイドは歯噛みする。

「……あ、あの～」

今まで会話の輪に一切、入ってこなかつた声に全員がピクリと耳を傾ける。

そこには、おどおどしい素振りで会話に入れず困った表情を浮かべるヴィロが立っていた。

「これから、レイド達の会話に加わるうとしていたのだろうか？それを考へると非常に心が痛むので、レイドは考へるのを後回しにする。」

「ヴィロ教授？ 何か気になる点でも？」

「いえ、もしかしたら山賊達が隠そつとしてるものが何か分かつた気がします……」

いつもに増して小声になつてゐるヴィロを見ていると明らかに放置された拳句、傷ついているのが全員に伝わつてくる。だが、気にするべき部分がそこではないという事も全員に伝わつてゐる。

「貴さんは、”魔鉱石”^{マーナス}と呼ばれる鉱石があるのを存知ですか？」

ヴィロの言葉にイリアとロア以外の全員が首を傾げる。

「ちよ、ちよっと待ちなさいつてば。魔鉱石って、ただの噂話とかおじや話の類でしょ？」

イリアが眉をかしげながらヴィロに問い合わせ返す。その顔には明らかに信じていないと書かれていた。

「それが実在するのですよ。魔力を生成し放送出する鉱石がパワースポットと云々で各地に転がっているんです」

淡々と告げるヴィロに、イリアは目の前の学者の頭が壊れたのかと内心、疑つた。けれど、完璧に否定できない情報を自分が掴んでいるせいで半信半疑に陥る。

魔法というオカルトを更に逸したオカルトが存在する。それがイリアには信じられない。信じたら負けな気さえする。

「イリアさん。探査結果を復元できますか？」

無言で、イリアは探査用に散らした魔法陣と同じものを、小型の地図のように縮小化して展開する。

透明感のある円形の魔法陣には波のよう、ある一点から拡がる紫色の光が波のように浮かんでいた。イリアは、その魔法陣の最も色の濃い部分に指を指す。

「確かに、この一点^{ポイント}から魔力が流れ出しているように見えるけど、ただの気のせいじゃないの？ やっぱり魔鉱石^{マイン}が関与してるなんて信じられないわ」

イリアは魔鉱石^{マイン}という言葉に覚えがある。ただ文献を漁っていた見つけただけで実物を見た訳でもなければ、それが実在するなんて信じてはいけない。

魔鉱石——それは、この世の理も、法則も、仕組みさえも無視する魔力を生成しクレアシオ全体に漂っている魔力の奔流と謂われる鉱石。そして、魔力によって形作られた別世界へ繋がる門^{ゲート}とさえも呼ばれている。

だが、これは全て想像上の話で文献も曖昧。そもそも、別の世界があるなんてにわかには信じ難いし発見者の名前が、どの書物にも記載されていないのが論より証拠だった。

「これを見てください

断固として信じないイリアを見兼ねたヴィロが懐から二枚の写真を取り出した。

一枚目は生い茂ったジャングル。遠めに見ると分かるが、オアシ

スを巨大化したかのように砂漠に覆われてゐるのに中心部だけがジヤングル地帯になつてゐる。

一枚目は、そのジャングルの内部を撮つたのか不気味に変色した動植物達が顔を見せてゐる。並々と生い茂つてゐるにも関わらず、それら全てに何処か生氣が感じられない。この世のものとは思えないと解釈した方が正しいか。

そして三枚目。

「これが魔鉱石とでも？」

イリアが怪訝そうな表情で写真を眺める。

そこには、翠色に輝く大きな鉱石が映されていた。直径300cmはあり、外周は、まるで鉱石を守るように生えた紫色の薙によつて囲まれてゐる。

「ええ。これは自由国の領土で発見されたものなんですが、周囲10kmに相当する範囲で動植物が異常な成長を遂げ、今まで砂漠だった大地がジャングルに変貌しました。私は、その原因を確かめる為に、ある方達とジャングルに侵入。この魔鉱石を発見しまして……」

「やっぱり、信じられない。写真が捏造されてる可能性だつてある」

ピシャっとイリアはヴィロに写真を返して否定する。

「イリア？」

否定するイリアの表情に陰りを感じたレイドは、顔を覗き込もうとした。刺々しい性格の彼女だが、他人を乱暴にあしらう様な行動を取った姿は見た覚えが無い。

「……でも、そうね。依頼も依頼だし、実際に確かめてみないと分からぬもの」

途端、陰った一面が嘘のように、普段のマイペースな表情に戻ったイリアは長い髪の毛を搔きながら復元していた魔法陣を閉じる。

「確かに、魔鉱石なんて使い方さえ分かれば森羅万象を扱えるでしょうからね。世間から隠し通して自分達のものだけにしようとする理由にはなるけど。——ねえ、もし本当に魔鉱石があったとして、ここにいる山賊達はいつから、こんな濃度の高い魔力に浸かってる事になるのかしら?」

イリアの推測に全員が、まさかとこいつ顔を浮かべる。

「予想的中。レイドッ!」

「ああ!」

レイドはイリアと共に急いで、未だに眠り続いている猫獣人の山賊の元へ駆け寄った。

急場しのぎでこしらえたテントの中で捕縛していた山賊は青白い顔をしながら、やはりというべきか眠り続けている。

「死んではない」

イリアは慎重に、山賊の額と胸に手を当てる。幸い、息はあった
ようだが――

「助かる見込みもない」

冷ややかに、レイドに結論を言つてのけたイリアだが内心では歯を食いしばるような想いをしていた。

ずっと猫獣人が目を覚まさない原因は魔力の多量摂取による中毒症状であろう。

毒素を溜め込んで、溜め込んで、ボロボロになつたその体を魔法で癒すなんて出来ない。

傷を癒す魔法をかけても、結局は魔力を、その体に注ぎ込むことになる。

結果は同じ。

むしろ衰弱した体に止めを刺して死を急がせる手向けになるかもしれない。

かといってそれだけでは、

(助けられない理由にもならない)

イリアは、あらうことか術式を開き指を猫獣人に向けながら呪詛のようなものを唱え始めた。それが毒であると分かつていても、彼女には目の前の命を助けられる自信があった。

「何を？」

訝しげな表情で聞いてくるレイドに視線で「黙つて」と伝えたがらイリアは精密な魔法陣を描いていく。

「るべきものは　るべき場所へ　万物に干渉せしめる魔性の水

よ 元ある泉へ帰りたまえ」

まるで、超高速の雷を撃たれたかのように猫獣人の体が魚のよう
に飛び跳ねた。

そして、一筋の閃光が猫獣人の口元から飛び出し、イリアの口元
へ吸い寄せられていく。

その正体は魔力。イリアは魔力を水の流れに例えて猫獣人が溜め
込んでいた魔力を吸い取っているのだ。ハチの針に刺された体から
毒素を抜くように。

やがて、もう充分だとイリアが魔力の流れを作っていた閃
光を手刀のよう^{しゅとう}に断ち切る。

「まつ、後は獣人ならではの生命力に頼るしかないわね。私、医者
でも……何でも……ない……し」

はあ……とイリアが溜め息を吐き倒れ込み、咄嗟にレイドが抱き
抱える。

(そういえば、イリアだけ動きっぱなしだったな)

「少し塩梅を忘れかけてたわね。私の事は気にしないで」

と言いつつも、自分の力で立ち上がる気力も損なっているのか
腕の中でグッタリと頸垂れているイリアを心配しながらレイドは生
気を取り戻したかのように寝息を立て始める猫獣人を見やる。

「ふむふむ。お楽しみのところ、お邪魔してしまったかな?」

突然、テントの外から聞こえてきた声に、背筋の凍るような感覚を感じながらレイドは振り返った。悪意のこもった笑みを浮かべながら、ルーフェが立っていた。

「違いますから！」

「おーおー、必死に否定する辺りが、また微笑ましいね。いや本当、良い所でお邪魔をしてしまったようだ」全く反省していない様子でルーフェは「冗談はさておき、眠っていた皇子様が起床なさつたみたいだよ」

目を細めながらレイドの先にいる相手を見つめていた。

レイドが、ルーフェの視線を追うと重たそうに眠りから覚め、瞼をあげた猫獣人がこちらを眺めているではないか。

「俺を助けてくれたのは、そこの嬢ちゃんか？」

猫獣人がレイドとイリアを交互に見ながら、酷く疲弊した、しゃがれた声で問う。

「あら、もうお目覚めなのね。全く……、感謝しなさいよ」

照れ隠しを含めながらイリアは鼻を鳴らし、もう大丈夫だと言わんばかりにレイドから離れ一人で立ち上がった。

「その様子だと私達が、何であなたを助けたのか。もう分かつてゐみたいね？」

「…………頼みたいことがある」

「は？」

猫獣人が、項垂れた耳をあげながら唖然とするイリアの顔を見る。

「お前達の欲しい情報を今から語つてやる。だから耳の穴かっぽじつて、一文字も聞き漏らさずに聞けって言つてんだ」

焦つているようにレイドとルーフェにも視点を忙しく移動させながら猫獣人が一方的に語りだした。

イリアが、何か言おうとしたがルーフェが腕をイリアと猫獣人の間に挟んで静止する。

「ふふっ、そこの兄さんは分かつてるじゃんか。ここは霧ミスト地帯と呼ばれてる。魔力の溜まり場だ」

「ゴホッ」「ゴホッ」と辛そうに咳き込みながら、猫獣人が一息つく。

「何年前になるやら。亜人戦争が終わつて、ようやく安息の地を取り戻せたと信じて坑道を掘つてた連中が魔力の溢れ出す泉を掘り起こしちまったのは……」

「それってまさか……」

「魔力に汚染されて人が住めるような場所じゃなくなつた。結果、鉱山は閉鎖。聖王国の為に働いてた連中ごと追放するような形でな」

宙を見ながら、猫獣人は感傷に浸るように語り続ける。

「仕事も住処も失った鉱夫達は汚れ仕事に手を染めるしかなかつた。俺もその一人で……この周辺一帯を統率してゐるヘッドに拾われたんだが……ヘッドは良い人だつたあ。常に俺らを導いてくれて、いつか必ず元の生活を取り戻そと。責任を全て自分で抱え込んでまうような人で……だのにあいつらが来てから全部変わつちました」

「あいつら？」

レイドが猫獣人の言葉に目を細める。

「半年前ぐらいか。俺らのような底辺と違つて、本物のマフィアみたいな得体の知れない連中だつた。緩衝地帯にある俺らを狙つて交渉を持ちかけてきたあいつらは、ヘッドを取り込んで物資の補給を取引に鉱山の採掘を再開するよつ俺らに命令してきたんだ。誰にも悟られないよう、ひつそりとな

最後まで言わねば気がすまないと言わんばかりに猫獣人が続ける。

「それ以来、ヘッドの性格も変わって、どんな汚れ仕事でも厭わないようになつちまつた。採掘を続けていくうちに魔力の汚染も酷くなつて、そして遂に見つけちましたんだよ。あいつらが求めてる”魔鉱石”とやらを

「ツー？」

「頼む……ここにいる連中は全員、人質みたいなものなんだ。ヘッドの目を醒ましてやつてくれ。あの道化……クツ、ギアッ！ アアアアアアアアアアアアアア！」

突然、息が落ち着いてきていたはずの猫獣人が呻きだし捕縛していた繩を強引に引き裂いて苦しそうに自身の首に手を絡め始めた。

「な、何で！？　どうして！？　魔力は、ほとんど吸収したはずなのに…？」

イリアが猫獣人の手を抑えながら慌てふためいて叫ぶ。しかし、猫獣人は神経毒でも撃たれたかのようにヒクヒクと痙攣しながら、ゆっくりと息を引き取った。

「”人質”か」

レイドは混乱して真っ青になるイリアを、もう動かない人形のようになき垂れた猫獣人から引き離す。

猫獣人は最初から自分が死ぬのを分かつていてレイド達に何かを託したのだろう。だから、こちらの質問に一つ一つ答えず一方的に言葉を連ねていった。

「ふむ。せめてもの手向け。鎮魂歌でも送らうかと思つたが、まだ死んではないみたいだよ」

ルーフェだけが余裕のある表情を浮かべたまま、猫獣人に手を向ける。

レイドは、すぐにルーフェの言葉を理解し猫獣人の安否を確認し始めたが、イリアの方は疲労とショックが重なつたせいであんぐりと口を開けたまま、頭でもおかしくなったのかルーフェの言葉に耳を疑っている。

「おそらく、溜め込んでいた毒素（魔力）を一気に吸い出した反動で気を失つただけだらう。すぐに手当をしてやれば、命に別状はないと思うけどね」

イリアをテントの隅で休ませながら、レイドはルーフェと共に応急措置を施した。

流石は吟遊詩人と言うべきか。多方面から知識を取り入れ、幾つの国を転々としていただけあって騎士団として基礎的な手当での仕方を学んだレイドよりも、手際良く応急措置を進めていく。

「そういえば、ルーフェさんは大丈夫なんですか？」

ふと、ルーフェも獣人であることを思い出してレイドがルーフェの顔色を覗き込む。だが、その顔はいつもの余裕を醸し出しており、疲れた様子は微塵も見せず、猫獣人の体をゆっくりと横にして応急措置を締め括った。

「ああ、似たような場所を通つたことがあつてね。慣れない感覚だが後、数日はもつだらう。心配しないでくれたまえ」

一仕事やり終えて満足したようにマイペースに喋るルーフェを見ていると、自然と励まされているような気になつてくる。

「アハハ。頼りになります。ただ、無理はせず、気分が悪くなったらすぐに言つて下さいね」

「ふふっ、最悪の場合は、そこの眠つていた王子様と同じように僕もイリア君に目覚めのキスを……」

「ねえ、レイド……そいつ、私の代わりに一発殴つてくれないかしら？」

精神的に参つていたイリアも流石に聞き捨てなら無いと言わんばかりに、そこはかとなく殺意を込めた頬みをレイドにしてきた。

「おおっ、もしかしてイリア君が僕を罵りながら殴打で起こしていくのかい。それもまた良いかもしないね」

「一度と起きないぐらい強い殴打でなら喜んでしてあげてもいいわよ」

ああ、それも良いかもしないと変態じみた発言を連発するルーフュと黒い笑みを浮かべながら段々、「冗談と本音が入り混じり始めたイリアの仲裁に入るため、レイドは自分の身を犠牲にして間に入る。

「二人ともストップ。ルーフュさんも、あんまりイリアをからかうのはやめてくださいよ」

「な、何よそれ！ まるで、私が悪ふざけこまんまと釣られて弄ばれてる子供みたいじゃない」

「ええっ！？ いや、違つて。ち、違います。断じて違いますよ。イリアさん！ これは言葉の綾あやでして」

仲裁に入るどいか、状況を陥悪化させてしまつたレイドは、何故だか更に状況が悪化する爆弾が投下されそうな気がして、背後にある白兎獣人こと変態兔にも気を配る。

「おや？ 別に僕はからかってもいないし悪ふざけもしていないよ」

それはつまり、今までの言葉が本気である事を意味しているわけで、

「だが、イリア君の代わりにレイド君に叩き起^{ハシ}されたるところのも悪くない。呆れながらも、何だかんだ優しく起こしてくれて朝^ハはんの支度を」

瞬間、その場の空氣が絶対零度の如く凍りついた。

ルーフェだけが妄想を膨らましながら破廉恥な笑みを浮かべ、グーグーと再度、寝息をたてはじめた猫獣人のいびきが更に混沌とした空氣に拍車をかける。

「ストオオオオッP！ ていうか、これ以上話をやや^{ハシ}しないでくださいよ！」

悲痛の叫び、もとい悲痛の突つ込みを入れたレイドにてつて、その場は一段落を終えた。

「ところでレイド君。彼が言っていた言葉の中に気になる名称は無かつたかい？」

「え？」

ルーフェが真剣そうな眼差しで試すようにレイドを見据える。レイドは何ともスイッチの切り替えが早い人だと思ったが、猫獣人が伝えた言葉を思い出してみる。

「彼、この鉱山を何と呼んでいた？」

「確か、霧地帯……あつー」

レイドは自分の発した言葉に目を丸くした。

引っ掛けっていた何かが外れて、頭の巡りが高速化していく。出来れば自分の考えを否定したい。でも、それ以上に疑惑が沸いてくる。

『……そろそろ霧地帯か。おい、運び屋。受け取つとけ』

レナは最後に何と言つていた？

『……こりは霧地帯と呼ばれてる。魔力の溜まり場だ』

レナは去り際に、猫獣人と同じ名称で鉱山の名を呼んだ。これでは、まるで最初から危険な地帯であることを知つていたようではないか。そして、

『後は単独で動いた方が都合が良いんだよ』

途中下車で一同の前から立ち去つた。

「まだ、彼女が黒と判断するには情報が少な過ぎます。——でも、警戒しておいて損は無いでしょ?」

けれど、レイドはまだ決め付けるには早いと考えた。

ルーフェは首を縦に振りながら、静かに目を瞑つてフルートを奏で始める。その音色を聴いていると、今日一日の疲れが抜けていくようでも澄み切つていて心地よい。

レイドはルーフェの奏でる音色が木靈する中で、魔鉱石の危険性。山賊を影で操つている何者か。あらゆる可能性を試行錯誤しながら明日に向けて準備をする。

準備を終えたら、イリアの様子を見に行きたいとレイドはテントの外へ目を向けた。

まだ、先程の獣人が助からなかつたかもしぬないというショックが残つてゐるかもしねり。

「準備も程々にして、イリア君の様子を見に行つたらどうかな？ 女の子を待たせるのは、あまり感心しないよ」

サーベルの手入れや、防具の点検等を行つていたレイドにルーフェが声をかける。

「で、でも……」

「フフ。僕達も旅には慣れているのさ。ある程度なら君の装備の点検だって出来るよ。ほら早く」

まるで背中を押すようにルーフェが放つた言葉にレイドは頭を下げながらテントの外に出た。

「おやおや、あんなに駆け足で探しに行くなんて」

ルーフェは微かに見えたレイドの必死な表情に、ほくそ笑みなが
らわざわざ背中を押す必要も無かつたかと作業に戻った。

【蒼の巻】 魔鉱石 3 魔力（（毒））（後書き）

書いてる側も励まされるようなキャラを書きたいと思つて思いついたのが実はルーフェだつたりします。自己陶酔になつてしまふかもしませんが、今まで書いた作品の中ではルーフェのキャラ性が一番氣に入つてたり。

次回は別視点からもお話が展開され始めます。
もし、クローズファンタジーをお気に召したら次回も読んで下さると嬉しいです。

【蒼の巻】 魔鉱石 4 動き出す影（前書き）

レイド達は一行が動いている最中、他の場所でも動きだす者達がいた。

【蒼の巻】 魔鉱石 4 動き出す影

同日 20:00

強風吹き荒れる崖の上でロープを靡かせながら、竜の紋章が描かれたロッドを振りかざす男が立っていた。

空を飛んだり、魔法で空間移動でもしない限り登れないような崖の上にいるロープ姿の男には生憎、翼も無ければ空間移動などと言つた高尚な魔法も無い。

「来い。ヴォイン！」

ならば、どうしてロープ姿の男は崖の上に佇んでいるのか？ その答えは轟々しい音で羽ばたき雄叫びをあげながら崖の目の前、いわば足場のない空に現れた。

巨大な一本の翼、強靭な鱗に覆われたその体躯。一本足は鳥の鉤爪をより鋭利に研ぎ澄ましたかのような形をしている。

それは竜人ではなく、まさしく本物の竜。分類するなら飛竜^{ワイヤーバーン}と呼ばれる存在。

「良い子だ」

ロープ姿の男が手を差し伸べると、飛竜は翼で仰いだだけで強風が巻き起こる巨体を子犬のようにに摺り寄せた。

その首を撫でてやりながらロープ姿の男は満足げに微笑んだ。雲さえも突き抜けて天空を優雅に飛び回る飛竜の背に乗れば、断崖絶壁の頂上に居座るなど容易い。

「——フフ、じゃれているところ申し訳ないんだけど」

ともすれば、他者の声が聞こえるのは非常に不自然で、飛竜と戯れていたロープ姿の男にとつては耳障りな事この上ない存在が現れた。

それは竜人でも鳥人でもない。増してや、ロープ姿の男と同じようく飛竜の背に乗つて崖の上までやってきたわけでもない。移動という手順を省いて、この場にやってきた。

人一人が収まるぐらいの赤い煙が立ちこみ始め、一人の少年が煙から飛び出してきた。その姿を忌々しげにロープ姿の男は睨みつける。

その姿は、ロープ姿の男も充分なほどに不気味な雰囲気を漂わせていたが、それすらも凌駕するほどに異様だった。

ロープ姿の男が不気味と表現されるなら、煙から飛び出してきた少年は奇抜で、奇妙で、妖艶な雰囲気を漂わせている。

ピエロのような格好をしたその少年は赤色のスーツを纏い、服装とは対照的な青色の髪、顔には変てこな三日月のような模様を刻み込んでおり、不敵に笑いながらロープ姿の男と飛竜を眺めていた。

テレポート
空間移動。

どんな影響も受けずに、この世の法則を無視して別の場所に移動する能力。いや、厳密に言えば能力ではなくて、少年が使用している”魔法”である。

一步、間違えれば出口の無い壁の中に埋まつたり、体の半分だけが取り残されたままになる空間移動は魔法の中でも禁忌とされ、そもそも使おうと考える人間すらいないに等しいのだが田の前の少年は、その空間移動を何度も何度も使用しており、失敗した光景をロープ姿の男は一度も見ていない。

というよりも、この少年が今までに空間移動以外の手段で現れた瞬間を見たことが無かつた。

「……何の用だ？」

「いやー、計画に支障が出ると困るじゃない。」「せひって、わざわざ報告の為に出向いたって訳」

「話せ」

飛竜から手を離し、ロープ姿の男が不機嫌な様子で少年に面と向かって立つ。

「僕が折角敷いたオモチャが台無しにされちゃつたんだよね。一体のお人形さんは”糸を切る”ハメになっちゃつたし」

残念そうに少年は無邪気な表情を浮かべる。それはオモチャを壊された子供そのままであり、不自然な点はないよう見える。

「ああ、でも”糸を切った”のは僕だし。はあ、危うく猫のおじさんに君の名前をバラされるとこがだつたよ」

道化師プルチネイラ、実名であるかどうかはロープ姿の男にも分

からないが田の前の少年には、外見に相応しい通り名がついていた。

「無駄に情報を密告される前に記憶を消してあげたけど、バラされ
るぐらいだつたら口封じの為に体をバラしてあげたほうがよかつた
かな？」

無邪氣で純粹で、にも関わらず狂気に溢れたその言葉は道化師た
る所以か、ただの演技なのか、ローブ姿の男には検討もつかなかつ
たが、

「相変わらずの悪趣味だな」

おそれらしく、この少年の姿も仮初なのだろう。

プルチネイラの不愉快極まりない言動にローブ姿の男は聞かなければ良かつたとそっぽを向く。

「それと、もう一つ情報がある。まあ、そっちにも行き届いてるだ
ろうけど鼠が数匹、セッティング中の舞台に紛れ込んだみたいだね」

「牙龍国の人間聖都の騎士団か。チツ、”生贊”まで逃げ出した
ところの」

「飛び入り役者は僕としては大歓迎なんだけどね」

まるで演劇のような例えを使ってプルチネイラは心から愉しそう
に口元を歪める。

、プルチネイラことつてはまさに劇のようしか映っていないのだ
る。

鉱山内で行われている衝突もアトラクションとして愉しんでいるに違いない。

「ふふつ、早速、一匹田の鼠が勇猛果敢に飛び込んできたみたいだよ」

「やうか……ヴェイン」

ローブ姿の男は待機させていたヴェインといふ名の飛竜に声をかけると、その背中に跳躍する。

「ああ、魔鉱石の方向にも鼠が数匹紛れ込んでるみたいでね。そつちは僕に任せて」

豪！と手の平に炎を灯しながらブルチネイラは飛竜の背に向けて叫んだ。

「ふふつ、少女の脱走劇というのも興味深いけど」

ローブ姿の男が手を振るのを確認してからブルチネイラは表現し難い歪んだ笑みを全面に浮かべながら、

「まだ、舞台は開幕すらしていない。レイド、君が何処まで強くなつたか僕に見せてよ」

遠くでもあり、近い場所にもいる一人の青年の名を咳きながらブルチネイラは赤い煙に巻かれて蜃氣楼のように姿を消していった。

——「シン

——「シン

——「シン

「もう、何なのよ」

荒い息をあげながら、背中に弓と矢筒を。そして胸にたぐり寄せるように大事にお札を手に持った少女が、今にも蟻が溶け切つて消えてしまいそうな微かな松明を頬りに地下通路を走っていた。

ひたすらに、見えない敵から逃げて逃げて、何処に逃げれば良いのか。何処が安全なのか。そもそも今は何処にいるのか全く検討のつかない少女だったが、それでも走り続けていた。

「おい、どっちにいったか分かるか！？」

「ツ！」

「手分けして探せ。さもないとヘッドの頭が沸騰しちまうー。」

背後から聞こえてきた声に少女は頭を抱えて隅に縮みこむ。これなら、大人しく幽閉されてたほうが良かつたのでは？ そう思えるぐらいに長い逃走劇を繰り広げていた。

少女の名はコトネといつ。何処にでもいる、極平凡な、むしろ非

凡なぐらいに日常リアルを送っていた彼女にとって眼前で起る全ての出来事が非現実オカルトにしか見えなかつた。

ケンタウロスのような——獣人と呼ぶべきなのだろうか？

液晶画面の中で動き回るような存在が目の前にいる。

”この世”ではなく”あの世（一次元）”に飛んでしまったのではないかと頭が混乱する。

（と、とにかく現状打破しないと。落ち着きなさい私）

コトネは普通の学園生活を送っていた少女であり、外見容姿からスタンダードそのものであり、特にこれといった特技も見栄えもないベーシックな女の子である。

そんな極平凡で、むしろ非凡なぐらいの日常を送っていた彼女が、こんなSFファンタジーチックでアクションシーン満載の中、冷静に逃げ回れているだけ強運と呼ぶべきか。

いや、こんな不幸でハチャメチャで無茶苦茶な目に遭っているのは自分ぐらいだろうし、むしろ悪運なのかもしないとコトネは心中で溜め息を吐く。

……もしかしたら夢のように既に死ぬよつな目に遭えば元いた場所に戻れるのでは？とも考えたが現実味のある感覚には、それを躊躇わせる何かがあつた。

そもそも、死ぬような目に既に何度も遭っているので戻れるなら既に戻つているとコトネは首を振つて現状に目を向ける。

「ここちにいたぞ！」

ビクリと背後から響いてきた怒鳴り声に驚愕し、近くにあつた松明を咄嗟に倒す。

「つおつー。」

横倒しになつた松明は狭い、空調の効いていない通路を絶つように炎が舞い上がる。

幸運にも炎は絶えず燃え上がり、ストーカー追跡者の移動を妨げた。逃走者の行動に驚いたのか追跡者は一瞬、たじろいだがお次は逃走者が驚く番だった。

何と、パチパチと軽快な火花をあげる松明を強引にへし折つて距離を詰めてきたのだ。

その姿は、神話や伝承、ロールプレイングゲームRPGに出てきそうなワーワルフ（狼男）にしか見えない。

「コトネを、ぎらつく瞳で睨みつけながら鋭い爪をあげて捕まえようと走つてくる狼男を振り払うために幾つもに分岐する地下通路を小刻みに走る。

コトネは、ちょっと運動神經が高いぐらいで、特にこれといった特技は無いし走る速度も大したものではない。

大の大人、しかも見るからに速そうな狼男を振り払うなど、まず不可能な訳なのだが、それでも今まで逃げ切つてているという事実は

存在する。

「畜生。ちよこまかと逃げ回りやがって」

背後から響いてくる悪態には目も暮れず、コトネは更に右へ左へ迷路の如く枝分かれしている地下通路を走つていく。

狼男は、コトネの一倍は早い速度で追いかけているが、その早さが仇となり曲がり角に到着する度に方向転換の為に立ち止まらなければならぬ。

結果的に両者の速度は同列になる――訳が無かつた。

狼男は、壁を足場にして曲がり角で方向転換する手間を省き、むしろスピードをあげながら超人じみた勢いで追いかけてくる。

おそらく、コトネは手加減されていたのだろう。

人間のそれとはかけ離れた身体能力を持つてますよと言わんばかりに肉体美を見せ付ける狼男。

そもそも追跡者より逃走者のほうが地の利を理解しているなんて事もなく、コトネが疲れきつて転ぶまでグルグルと回るよう同じ場所を走らされていたに過ぎなかつたのだ。

付け加えて言つてしまえば、狼男ともう一人。別の男がコトネを見つけたと連絡しあつてたことから分かるように相手は一人。華奢な少女を捕まえるなど本気を出せば造作も無いというのに弄ばれていたに過ぎない。

ダンシ…と、地を踏み鳴らしながら背後に迫る狼男に驚いてコトネは転んだ。

標的を失った狼男は宙を掴みながらコトネを超えた遙か先で、ようやく地に足をついた。

偶然、コトネが転んで狼男が頭上を飛んでいったわけではない。かといってコトネが計算して取った行動でもない。

(そのまま、3メートル後方にある右の通路に迂回してください。
進むと階段があります)

ここに連れて来られてから度々、天からの助言のような声がコトネには聞こえていた。耳ではなく脳裏に直接伝わってくるような形で。

それこそ自分の頭が壊れたのではないかと疑つたが声の通りに動いた結果、今の自分がいる。

ずっとではなく不定期にしか聞こえないのだが、助言の通りに立ち回れば上手く事が進んだ。

脱走した時だって、この助言を頼りに動いたらすんなりと逃げられたのである。

(後、10、325秒で左通路から一人目がやつてきます。早くしてください)

細かい秒数まで導き出す助言の声に、すかさず「コトネは立ち上がり言われたとおりに右の通路に入った。

左の通路から別の影がコトネを捕えようと手を広げてきたが、すんでのところで腕の間を掻い潜り走り抜ける。

やがて、助言通りに階段が見えてきた。転げ落ちそうになりながらも、一段飛ばしで階段を駆け下り長い廊下へと躍り出る。

そこには、牢屋が幾つも幾つも立ち並んでおり、砂埃が立ち込めると不衛生空間の中には人がいる気配は無いに等しい。

コトネは一瞬、元の牢屋に戻つてしまつた？ とも考えたが自分が幽閉されていた場所には他に誰もおらず、今いる場所よりも遙かに狭い廊下だった。

「（どうして、あなただけ別の部屋に閉じ込められてたのか。不思議でならないんですけど、まあ、外部の人間がいたのは好都合です）」

一重で反響するように脳裏と耳越し両方に伝わってくる音がコトネを困惑させる。

「ああ、肉声でも聞こえる距離に来ましたか。どうか、その南京錠を施錠してはくれませんかね？」

意識していなかつただけなのか、脳裏に伝わってきた声にそもそも判別という要素が含まれていなかつたのか。

詳しいことは分からぬが、今までの声と同一であるう人物が”肉声”で独り言のようにコトネに語りかけてきた。その声は、薄暗

い牢屋の奥から聞こえてくる。

「あなたが、ここまで私を誘き寄せたの？」

「誘き寄せたといえば誘き寄せましたが……時間がありません。あの、キメてる山賊達に再度捕まるか僕を連れてここから逃げ出すか。後、0・5秒できめてくだ——」

「分かりました！ 分かりましたよ、はいはいはい！」

有無を言わせぬ0・5秒にコトネはノーなんて言える筈がない。

急いで近くの壁に立て掛けられている無駄に豪奢な見た目の鍵を南京錠に刺し込み、黒板を爪で引っ搔くよりも嫌な音が地下通路に響く。

一方通行だつたら山賊に階段を降りてこられて終わりだが、ここまで自分を連れて来た声の主である。

きっと活路を見出してくれるに間違いないと信じるしかコトネには精神的にも、物理的にも、現実的にも道が無い。

ガチャリ——

もう後戻りは出来ない。そもそもロターンなんて出来ない状況下だが何だか、この牢屋の鍵を開けたら人生における分岐点が全て一新されるような気がした。

「ありがとうございます」

ゾクリ、と疲弊したような声が薄暗く空氣の悪い牢屋の奥底から

聞こえてくる。

それはのそりのそりという効果音が似合いそうな動きをしながら、氷付けになつたかのように硬直するコトネへ近付いて——、

「やつと……出れ……た」

「えつ！？」

コトネはその異形を咄嗟に抱きしめた。何せ、最後の力を使い果たしたかのように”それ”はコトネの体へ倒れこんできたのだから流れで抱きしめるしかない。

(「じい…… も?」)

改めて、コトネは声の主であろう”それ”的姿を凝視する。

”それ”は幼い男の子の姿をしていて、山羊のような顔と獸毛を纏つた異様な……コトネには化物のようにしか見えない。見えないのだが、今まで見た異形の中では最も、か弱く優しく、目の前のヒト？を助けたいと思う気持ちがフツフツとコトネに芽生えてくる。

ブツリと途絶えた声。微かに伝わってくる吐息。意識は無いはずなのに、何処か安堵の表情を浮かべるその姿。

はつきり言つて拍子抜けだった。

もつといふ、恐怖の塊のような得体の知れない存在だけれども頼もしい強さで山賊達から自分を救い出してくれる。

そんなダークヒーロー的な存在を心の奥底でコトネは期待していた。

折角、ここまで来て助言の主を助けたといつて、最早、力を使い果たして手の中で動かなくなっているそれに助けを求められない絶望感がコトネの身を包み込む。

すぐにでも山賊が階段を駆け下りてきて、この男の子」と自分を捕まえに来るだろ？

もしかしたら、逃がそうとした罰で酷いことをされるかもしれない。絶望感と恐怖心が絶妙に絡み合い、唯一の希望を追つて決死の想いで脱走劇を繰り広げたコトネをどん底へと突き落とす。

——なのに、なになのに今手の中にいる男の子を放つて一人逃げるなんてことはコトネの正義感が決して許してはくれなかつた。

というか、罪悪感が自身を蝕んで殺す気がしてならない。

それが例え化物のような姿をしていて何を考えているのかさえ分からぬ得体の知れない存在であつたとしても、だ。

「あーもつ。どうでもなつかやえ！」

腕の中で動かぬ男の子。恐らくコトネより2、3歳下の少年を担いだまま逃げ道を探す。

(お、おもつ……)

5歳程度の少年少女を持ち上げるのとは訳が違つ。

痩せ細つた体型がせめてもの幸運か。重い荷物を担ぎ上げながらコトネは胸元にたぐり寄せていたお札を思い出す。

肌身離さず、コトネが捨てずに持ち続けていたそれは淡い輝きを放ちながら、こっちだと言わんばかりに矢印マークの閃光を地面に奔らせていた。いつから光っていたのだろうか？

「、フ……」

急かすように明滅する光の矢印を前にコトネは一瞬、躊躇つたが背後から狼男の怒声と階段を駆け下りる声が響いてきて選択肢を失つた。

逃げる。

それが今の自分に出来る最善の選択であり、一つしかないルートであると理屈ではなく直感で確信してコトネは足を走らせる。

【蒼の巻】 魔鉱石 6 待ち合せは噴水広場で

一方その頃――

蒼翼をたなびかせながら、半竜半魔人のハーフの青年。レイドは疲れて地べたに横たわりながら夜空を眺めているイリアを見つけた。

「不自然のパノラマ」と呼ぶべきかしら」

空を眺めながら、レイドの姿に気付いてイリアが呟く。

結界で大空を包み込んでいるせいだろう。まるで空は波立つ水面のように光景を歪ませ、水中の中にいるかのような錯覚に襲われたが、今はもう慣れてしまった。

「もひ、調整とか補強とかしなくても大丈夫なの?」

レイドは寝転がって静かに佇むイリアに訊ねる。夕方から夜にかけて、まばたきをする暇もなくイリアは結界に一片の穴さえも開かないよう細心の注意を図りながら魔法陣を構築していった。

それは構築し終えた後でも同じ事で、点検作業のように内側から結界を満遍なくチェックし、今も続いているはずなのだがら……。

「ああ、それならヴィロ教授が交代してくれたの。細かい魔法なら得意みたいよ」

攻撃的な魔法は使えないらしいけど、と付け足しながらイリアは奇妙な星空を眺め続ける。

そういえば、猫獣人の治療にあたっていた時もイリアは結界には目も暮れず魔力の吸収に全力を注いでいた。その間もヴィロが結界の管理を担っていたのだろう。

「魔法があれば、この満天の夜空に新しい”本当の星”を作るなんて事も可能かもしれないのに——」

「え？」

「覚えてる？ 私達が初めて会った時のこと」

小さく呟いた言葉を誤魔化すかのように、イリアは立て続けにレイドに顔を向けた。どうこいしょっとおじさんのような一言で立ち上がり、強張っていた筋肉を解すように盛大に伸びをするイリアを前にレイドは過去を振り返る。

「ハハ、あの日は本当に色々あり過ぎて困ったね」

「あー確かに、ふてくされてるあんたを私がイジってたら港町の不良連中に絡まれて……」

暫く、イリアとの思い出話が続いた。

まるで、昔に戻ったかのような感覚に襲われる。

「そういうあの時のあれ。まだ大切に持つてるの？」

「えつ、勿論持つてるに決まってるじゃない。騎士団本部の私室に大切に保管してるわよ」

「ハハ、意外とイリアも女の子らしい趣味持つてるよね」

「何ですか？」

イリアと初めて出会った日、それは約9年前に遡る。燐々と夕陽が眩しく照りつける聖都。親子連れが遊びの場として利用し、恋人達は待ち合わせに用い、小動物達が水飲みにやってくる公共の噴水広場。眩し過ぎるほどに明るい空間。そこがレイドとイリアの初めて会つた場所だった。

「…………」

親子連れが遊びの場として利用し、恋人達は待ち合わせに利用し、小動物達が水飲みにやってくる公共の噴水広場において、そんな明るい雰囲気とはどう考えても合致しない陰鬱な表情をした少年が木陰のベンチで寝転がっていた。

その少年は蒼く歪な形をした翼に地面に垂れ下がった尻尾を有している。幼き日のレイドの姿だ。

噴水から微かに飛んでくる水滴が程よく体を冷やしてくれて心地よい。

しかし、それでもレイドは悶々としながら、”ある人を待ち続けている”。

時折、「そんなに暗い顔してどうしたの?」とか「もしかして迷子?」等といった、心配する声が聞こえてくるが耳障りだと言わんばかりにレイドは耳を背けて無視していた。

何せ、自警団にでも保護されるハメになつたら”ある人”と合流するのが難しくなる。

”ある人”といつのは、孤独に彷徨つていたレイドを迫害から守り、聖都シャルティ工に連れて来てくれた恩人のことだ。

その名はヴァッショ。騎士団の設立者であり、不動の名を冠する剣士でもあり、かの亜人戦争を引き止めた英雄でもあり、と、あり尽くしの一見凄そうな人間に見えるのだが実際の所は、騎士団の經理や物資の補給などは他の騎士に任せており、レイドはヴァッショが眞面目に何かに取り組んでいる姿を見たことが無かつた。

加えて言えば「少し野暮用が入つちまつてな。ここで待つていてくれ」と、レイドを噴水広場に残したまま何処かへフラリと消えて2時間以上待たせているような急け人である。

それでも、約束を破つて噴水広場から離れないのは一人で歩くと迷子になつてしまつからであつて、決して助けてもらつた相手を裏切りたくないからではないとレイドは自身に言い聞かせる。

「おっそいなア」

憎らしいほどに広がる青い空と雄大に佇む雲を眺めながら悪態をついた。

「何だよあのおっさん。少し野暮用が入つたとか抜かしといて、どんだけ待たせりや氣が済むんだ」

続けて呴かれる言動の数々は、今のレイドに比べて荒々しい。

「ねえねえ。そこの君」

また、誰かが話しかけてきた。

レイドは、今までと同じように寝返りを打つて聞き流し、

（どうして、こんなにお節介な連中が多いんだ……）

心の中で毒づく。

聖都の人々は非常に優しい。魔人、獣人、竜人という種族の隔たりを感じさせず、強引な程に周囲との交流に積極的な者達。余裕とゆとりと、広い心を持つた者達。

それは、悪名高い化物であるレイドにとって、受け入れ難く、理解しがたく、受け止められない優しさだ。

それは、冷たい世界でしか生きてこなかつたレイドにとって、甘いとしか解釈できない世界だ。

「だああああ、もう！ 起きるつづくんのよ。可愛くないー！」

それ故に、聖都の人間に寝返りを打つた背中を全力で蹴られようとはレイドには想像もつかなかつた。

「いつてえな。何すんだよ！」

突然の出来事にレイドは起き上がり、嫌な音を立てた背中をさす

りながら犬歯を剥き出しにして喚き散らす。

「人様が折角、心配して話しかけてやつてんのにガン無視するアンタが悪いんでしょうが！」

「コツン、と鈍器で叩かれたような音がレイドの頭の天辺てつべんから全身に渡つて響き渡る。

痛いに痛いを重ね掛けされたレイドは涙ぐみながら、自分の背中を蹴りつけ、更に頭まで殴りつけてきた相手に目を向けた。丁寧に結われたツインテールに、何処か不機嫌そうに映る顔。そして、自分の背丈を優に越しそうな木製のロッドを手に持った女の子だ。

「何だよお前。いきなり殴りつけやがつ……」

最後まで言わせずに、三度目の打撃がレイドの尻尾に降り注ぐ。

背中を蹴りつけられようと、頭を棍棒で殴られようと、そこまで堪えなかつたレイドだが流石に尻尾こた目がけて真上から棍棒を振り下ろされたら堪たまつたものではない。

「ふうん、体つきはそこそこ。型に嵌つてないけどキッチンと鍛えられてるみたいじゃない。でも、急所をあつけらかんにしてるのは減点対象かな」

上から目線で注がれる、人を見下す表情と辛辣な言葉にレイドは面食らつた。

「チクショッ……人の話ぐらい聞けよ……ふつ、あは、アハハハハ

涙が頬から垂れ落ちる。

ちなみにレイドは尻尾に棍棒が振り下ろされて痛い訳ではない。

尻尾は一種の器官のようなものであり、息苦しくなるべからず、すぐつたいのだ。

「ほれ。反撃の一いつもしてみたりうかね？」ウニウニ

ニヤリ、と黒い笑みを浮かべながら女子は棍棒でレイドの尻尾を突つつき回す。強く、弱く、真上から、斜め上から、レイドの反応を楽しむ様に力加減を変えていく女子に徐々に苛立ち始め、

「——やめりつてばー!?

息も絶え絶えにレイドは腕を振るい、女子は「おひと」と少し驚いた様子で後ずさる。

「えへへ。君つて紋章エンブレムから見る限り、騎士見習いでしょう？ 私はイリア・ホーネット。まあ、先輩から厳しいご指摘を受けたと思って精進なさい」

棍棒による拷問という名の撲りから開放されたレイドは、咳込みながら改めて相手の外見を改めて見た。

紋章エンブレムというのは、騎士団の証。強いて言えば、証明書のようなものであり、交差した矛と盾が刻まれたそれを、イリアは誇示するようにネックレスで繋ぎ止め首から架けている。

「でも、それって俺と同じ見習いカラーじゃないか」

レイドは一步、たじろぎながらイリアが着けている紋章を指し、その指で自身の服も指す。

セリにはイリアの紋章と同じ柄が刻まれている。

「わうね。わうよね？ わうなのよねー？」

何が、そんなに気になるのだろうか？ と怖くなるべからにてレイドに詰め寄つてくる。

「どうしてよ。今年に入つてから新規に騎士見習いに昇格したのつて私だけだったはずなのに……ええい。名を名乗りなさい。同じ騎士見習いとして決闘を申し込ませてもうわ」

「無茶苦茶じゃないか。それに俺は好きで騎士になつたわけじゃない

あまりにも我慢^{わがまま}な要求にレイドは頬を膨らませて怒る。

「はあ？ もう一体全体、何なのよ。イーシュ師匠は、どつか行つちやつしクロア師匠もろくに取り合つてくれないし……あの急けたおっちゃんに聞いてみるしかないか」

顔色が田まぐるしく一転三転するその姿にレイドは置いてきぼりにされたまま、困ったような様子で顎に手を乗せるイリアを睨む。

周りには何事かと少数の野次馬が集まつてきている、がイリアは気にする様子もなく暫くしてからレイドの顔を覗き込み、

「ちよっと。君の獲物って何?」

「獲物?」

「自分の使う武器のことよ。武器一.」

イリアは自身の棍棒を指差しながらまくし立てる。

「武器? そんなの無いぞ」

素で不思議そうな表情になる。

何せ、使えるものといえばサバイバル用のナイフぐらいで武器と言われると使い道が異なつてくるのだかい。

「有り得ない……ハツ! ? サイは自分の武器を隠して情報戦で有利に立つって魂胆ね。騎士なら正々堂々としなさいっての」

「そもそも隠すもんが無いっつってんだよ! ! !

腸煮えくり返ってきたレイドは剣幕張り立てて、一人で突っ走っているイリアに怒鳴りつけた。

瞬間、驚いたのかイリアの体が硬直し、

「おつと、『めん』

不意をついたかのように誰かがイリアにぶつかり、そのまま通り過ぎていく。

「うわ、じゅぢゅじゅすいませんでした」

ヒートアップしていた事によつやく気付いたのか、ぶつかつていつた人影、背丈からして同じ年ぐらいの子供に頭を下げるイリアがレイドに向き直つた。

「……？」

おかしい。

じゅぢらを睨みつけているはずのレイドの目線が、通り過ぎていった人影とイリアを交差して落ち着きを見せていない。

「お前、何か失くしてないか？」

怪訝そうな、何処か真面目な顔つきでレイドに言われた言葉にイリアはハツとして自身の服に探しを入れる。

「無い」

先程までの威勢の良さが嘘のようにイリアの顔がみるみるうちに青くなつていく。

そんな姿をレイドは呆れながら、爬虫類のような眼で見つめる。

「多分、さつきのにスられたんじゃない？」

そんな事は分かつてると青い顔をしていたイリアは紅潮し、人影の去つていった方向に視線を変えた。

何かがおかしかったのだ。

たかが子供の喧嘩のように見えたであらう現場にどうして、少数の野次馬が集つていたのか。

(流石に放つとくのは悪いかな)

レイドはヴァッシュとの約束と、少女の行方を天秤にかけ、後者を選んだ。

不意をつかれたのは明らかに自分が叫んだせいだろうし、このままヴァッシュを待ち続けるといつのも退屈だ。それに、そのまま無視というのは何だか気が引ける。

「ほり、ひとつと行かないと逃げられちやう」

未だ、混乱しているイリアの背中を叩いてレイドは人影を追う事にした。

【蒼の巻】 魔鉱石 7 不思議な少女

「ん……」

朝焼けが眩しい。

どうやら思い出語りをして居る間に、それは夢といつ形になり眠りこけてしまつたようだ。

しかし、イリアの姿は無く、レイドは一人だけ取り残される形となつていた。

寝起きのせいで頭の回りが鈍いが、視界だけは鮮明に見開かれており、一度田だが本当にクツキリと朝焼けが眩しい。

つまり、それは夜空を歪めていた結界が解除されてることを意味していた。

反射的に起き上がり、周りを見渡すレイドだが馬車や荷物はそのままで誰かが襲ってきた痕跡は無い。

しかし、イリア達の姿も無い。

「う、わわわわわわ。お願ひします。食べないで。この通り私なんて美味しいないですし、地味ですし、淡白以下だと思いますので！」

何やら、聞いたことの無い女の声がレイドの元へと響いてきた。

それは、一度レイドのいる場所から死角になつていて少し離れた草が生い茂った岩壁の裏から聞こえてくる。

「うーん。もしかして私たち。化物か何かと間違われちゃつてる?..

「.....俺は離れていた方が無難か」

「フフ、可愛い仔猫ちゃん。僕達は無害だから安心したま.....」

「その口調と笑顔が怖がられる要因だつてんのよ。この馬鹿兎!」

近付いてみると、イリアやルーフH、ロアの聞き慣れた声も聞こえてきた。

何やら一悶着起きているみたいだが、何処か緊張感に欠けるものを感じてレイドは安心する。

「ルーフHさん! 何かあつたんですか?」

岩壁の裏に回つて、レイドはイリア達の姿を確認した。

ルーフHの頭を叩くイリアに、その場から一步離れて静かに佇んでいるロア。更に一步離れた場所ではヴィロ教授が現場を静観していた。何故だかその表情がレイドの登場を目の当たりにした途端、歪んだ気がする。

そして、レイドが見たことの無い黒髪にボーテールの少女が立っていた。その表情はレイドの姿を見ると凍り出し、

少女のかん高い悲鳴兼奇声が拳がる。

イリアが、あーあーと言った表情で顔に手を当てている辺り、どうやら泥沼に更に泥を加えてしまったようだ。しかも、とびきり大きな泥を……。

少女は、どうやってかは知らないが結界を掻い潜つて来たらしい。その外見は衛生的とは言えない程にやつれて見えた。そして、一際目を惹くのが背中に担いでいたらしい山羊獣人の少年だ。

その少年は寝てゐるが、何處か苦しみで息を立ててゐる。

「それで、ここまで男の子坦いで逃げてきたって訳？ 何ていうか、

流石に岩陰で話すといつても難だ。

一同は、猫獣人を休ませていてるテント付近へ移動して、名前をコトネといつらしき謎の少女からあれやこれやと事情を聞いていた。

「だから、私は何も分からんのです」
方だつたりする。既に數十回と質問を質問で返されてくる。

「本当に？」 そうだ。聖王国出身とか帝国出身とかが分かるだけで

も充分なんだけど」

比較的、穏やかな口調でイリアがコト・ネに質問をしている。理由は分からぬいが、獣人のルーフェや竜人の血が混ざったレイドの姿を終止、混乱した様子の少女は怖がるからだ。ロアの外見は言わずもがなで、ヴィロ教授と共に容態が芳しくない少年の手当てにあつていてる。

「セニョウ・リ・テイコク? ……やつぱり夢なのかな」

「あなた。もしかして、国の名前とかも分からないの?」

返ってきた問いに目を丸くするイリアに対しコクリと頷くコトネ。

その後も、質問は続く。『どつしてこんな所にいるの?』とか、『誰か知り合いは?』とか数えていくとキリが無いほどだ。

けれど、返ってくる答えの大半は『分からぬい』なのだ。イリアも流石に降参といった表情で、一度レイドやルーフェを集めることにした。

「何だか、三種族についても分からぬいといつよりかは全然”理解が追いついてない”みたい」

「なるほど。もしや記憶喪失の類……」

ルーフェの推測にレイドは有り得ないと断言する。

「僕と違つて、彼女は以前の記憶をちゃんと持つてるように見えた

よ。何だか、その記憶が僕達のそれとは違つみたいだけ」「

「私もレイドと同意かしら。何だかあの子。今自分が置かれている状況を夢か何かと誤認しているみたい。それに私が知らない言葉も色々と覚えているみたいだし」

「つむ、と一同は首を傾げる。

「コトネという少女は記憶喪失といつてはあまりにも所持している情報が多いのと同時に飲み込みが遅いのだ。”忘れた”のではなく元から”知らなかつた”という印象の方が強い。

「まあ、ともかくにも今考えるべきは現状よね」

イリアの言葉にしてレイドは苦い表情をする。

レイド達が今から向かう場所にコトネ達も同行させるとこのまま無理がある。かといって、今から聖都まで送るといつのも時間的問題と当初の予定を考えると殊勝な判断とは思えない。

馬車の中で待機させる、とこう選択肢もレイドは考えたが先日の急襲から考えると安全とは言い切れないし、

「……つて事は山賊達と接觸していくもおかしくないよね」

ふと気付いた事をレイドは呟いてみる。

「確か」

レイド達の動きにいち早く気付いた山賊達。そんな彼らの視野か

「コトネが外れていたとは思えない。」

数時間前――

「はあ……はあ……ケホッ、ケホッ」

疲労を訴え、漏れ出す声が咳へと変わる。

高低の激しい足場に砂埃。そしてコトネを搔き立てる焦燥感と恐怖が整つた息継ぎをさせてくれなかつた。背中に一人の少年?を担いでいるのだから尚更だ。

しかし歩みを止めてはいけない。背後にコトネを恐怖のどん底へ突き落とそうと迫つてくる者達がいるのだから。

(次はどちらに行けばいいの)

念じるようにお札が指示する方向を探す。

ここまでコトネが逃げ続けられたのは、今は氣を失つてゐる少年と手元にある謎のお札が逃げ道を教えてくれていたからだ。

お札は地面を這つて、まるでリードを引くかのように白い線を描いていく。この線を辿つていけば、ひとまず捕まらないとコトネは信じてゐる。とかか信じないとやつていられなかつた。

少しでも足元を狂わせたら死んでしまいそうな強風吹き荒れる崖の上を歩かされたり、前も見えぬ生い茂った森林の中を歩かされたりしたが、やはりお札の記すルートを辿つていけば背後からの追っ手との距離は離れこそしないものの縮みもしない。

聞こえは悪いが、大した取り得も無ければ地味な運動能力と知能しか持ち合わせていない凡人な少女が少年を担いで、大の大人。しかも人のそれとは一線を画す外見と身体能力を持つた輩二人と五分五分の逃走劇を繰り広げているのだ。

自然と足腰に溜まつた疲労が蓄積され始めているが、

(こ)のまま進めば逃げ切れる

コトネは根拠の無い自信を頼りに走り続ける。

それは疲労によつて冷静な判断を見失つてゐるせいか。

あるいは現実逃避に思考が傾いてしまつたのか。そんな事は分からぬ。

「あつ——」

だが、しかし現実はそんなに甘くはない。

まるで、コトネの甘つたれた考えに手を差し伸べるのを辞めたか

のまゝにお札が描いてくれていた白い線がプリッと途絶えた。

その先には崖しか無い。

飛び降りて死ねとでも言つのだらうか？

散々ここまで引つ張つておいて、あまりにも酷い仕打ちではないか。

「やつと追いついた。たゞ、手間取らせやがって」

背後からぬ、あの狼男が王手と言わんばかりに迫り寄つてくる。

結局、誰も助けてはくれなかつたのだ。結局、誰も私の事なんて……とい、わなわなと震える体をコトネは断崖絶壁の傍まで移動させた。

「お、おこおこ。まさか飛び降りるとかいわねーだらうな、おこッ！…！」

狼男が焦つた表情を浮かべる。

その姿と崖下の光景を交互に見てから、コトネはほんの少しの笑みを浮かべて、

——落ちた。

真っ逆さまに、背中に抱いでの少年を抱き抱えるように手繩り寄せながらコトネは崖から落ちた。

バギン、と擬音ですら表現し難い音が夜の山奥に鳴り響く。

木々はざわめき、何事かと鳥達が朝の日差しが登り始めた空へ飛んでいく。

「……この高さから落ちたんだ。流石に死んだよな」

狼男は苦い顔をしながら崖の真下を覗き込んだが、すぐに立ち眩みを感じて離れた。

「あいたたたたたた」

コトネは生きていた。

怪我一つなく着地して、今は頭に降つてきた枯れ葉や枯れ木を振り払っている。

崖から落ちる寸前、確かにコトネは狼男の反応に笑いを見せた。

それは自身に降りかかってきた災難に絶望し、自暴自棄になつたからではない。

活路を見出したからだ。

矢印はプリリと途絶えた訳でも、コトネを見放した訳でも無かつた。

崖を真っ逆さまに矢印は下っていたのだ。^{くだ}

これは落ちれば助かるという道しるべだとコトネは信じて飛び降り自殺を演じて見せた。

(こしても、さつきの何だつたんだろう)

確かにコトネは助かった。少年も無事である。

ただ、バギン、と音を立てて落ちたのもまた事実なのだが、その理由が本人にも分からぬ。

地面に降り立つ寸前、まるで空気が軽くなつたかのように体が浮いた。

バギン、と音が鳴つたのはその時だ。何かを通り抜けたような、碎いてしまつたような感覚をコトネは感じたが命綱無しでの飛び降りが記憶を曖昧にさせた。

考えても無駄とコトネは開き直る。

自分は助かったのだ。

追つ手の気配も無むけだし死んだと思われたに違ひない。

それだけで今は充分だとコトネは、よつやく手に入れた一時の安全感を得る。

「結界が破られて……、何者だ！」

だから、突然かけられた刺々しい声にコトネは頭が真っ白になってしまったのであった。

まるで、よつやかく完成までありつけた絵画に真っ白なペンキをぶちまけられたようだ。

かくして、コトネは良く分からぬ質問責めに遭つて困っている最中だ。

幸いにもコトネ及び、あの少年に危害を加えるところの様子には見えない。

かといって、何だか得体の知れない物騒な凶器を持った変な人達の集団には変わりないので終止怯えながらコトネは縮こまってしまう。

あの少年も誘拐……ではなくて手当の為にコトネとは離されてしまった。

「ねえ、コトネちゃん……だったかしら。もしも話せたらいいんだけど今までの経緯を教えてくれないかしら？」

別にそこまで前からでなくて良いの。いつからこの辺にいるのかとか

か

反射的に体が跳ねる。

コトネは恐る恐る声の方に向て手を向けてた。

確か名前はイリアだつたと思ひ。

動き辛いからなのか、お洒落の為なのか。

ツインテールに結いであるものの解けば足元まで届きそうなほどに、その女性の髪は長かつた。

そして背中には自身の身長を超えそつな程に長い、棒高跳にでも使えそうな棒^{ロッド}を携えている。

「は、はあ。経緯ですか……」

イリアに対しては比較的、怖がらず接せられる。

他の面子がコスプレとは思えないような生えているという表現に相応しい翼を有していたり、何処かの御伽噺に出てきそうな兎の獣人がいたり、全身をフードか何かで覆い隠して男か女かも分からぬい不審者だったりと怖過ぎるというのが大体の理由ではあるのだが。

いや、それでもやはり、イリアの接し方は優しく感じられる。

女性としては高身長にあたるであつて体を曲げて、コトネと同じ位置に田線を合わせてくれている。

心地よい安心感があった。

「自分でも良く分かってないんですけど——」

コトネは話す。

今までの経緯をかいつまんで話すことにした。

さうかの前の話をしてても誰も信じてはくれないだらうから……。

「目が覚めたときには山奥にいて、厳つい人達に捕まつて。えーとそれから——」

落ち着いた素振りで話の道筋が逸れたとしても、大して咎めもせずに聞いてくれるイリアに対してもコトネは、まるでお隣さんに愚痴を聞いてもらつているような感覚に陥つてきいていた。

今まで、まともに話を聞いてくれる相手がいなかつたから、尚更なのかもしれない。

「——それでお札に連れられてここまで逃げてきたなんです^{ふだ}」「自分でも言つて意味が分からない。

お札に連れられてここまで逃げてきたなんて、誰が信じるものかとコトネは自身が紡いだ言葉を否定する。が、目の前にいる比較的優しい女性は至極真剣そうな表情で何処か思い悩むように顎に手を乗せていた。

「お札……東方に伝わる呪術の類かしら？　いや、守護神か何かを紙に封じ込めてる？」

何やらブツブツとコトネには理解不能な言葉を連ねている。

その姿に怪訝そうな表情をするコトネだったが、一方イリアは頭の中に入っている魔法からコトネの言つていたお札について一致するものがあるかどうか熟考していた。そして熟考した末に辿り付いた答えにイリアは溜め息を漏らす。

(お札自体が何らかの意志を持つて働いていたとしたら”魔導獣”、^{まどひうじゅう}”妖術”の類かしら。でも、あつちは私の専門外だし)

イリアは陣術と呼ばれる、自身の構成した陣の中で超常現象を引き起こす魔法に長けている。

魔法と言つても様々な種類、適性、法則が存在し、それら全てが

『この世の法則を無視した別の法則で働いてる』事から魔法と一緒に繰くたに呼ばれるようになつたらしい。

らしいと言うからにはイリアにも魔法の原点など分からぬ。ただ一つ言えることがあるとすればイリアにはコトネの持つていたお札の構造は解読出来ないという事だ。

”この魔術師は炎を操る事に長けているが水を操ることは出来ない”といった具合に、魔法を扱う人間によつて専門とする分野や属性は違う。そうでなければ世界のバランスは崩壊し、本当に何でも出来る世の中になつてしまふから。魔法は誰でも使えないようになる為に、個々に法を定め、わざとややこしくしたとも言い伝えられているぐらいだ。

それ故、イリアは陣術に関しては他に類を見ない知識と実力を誇るが他は専門外。お札が安全なものか危険なものかを判断するには聖都に戻つてから詳しい人間に調べてもらうしかない。それまでは、「コトネちゃん。何が起こるか分からぬから少しの間だけ、そのお札預けてくれないかな？」

魔法に知識のある人間が持つていた方がまだ安全だうと考えたイリアはコトネが今も大事そうに肌身離さず持つているお札を手に取ろうとした。

「あつ、駄目です！」

イリアがあ札に触れた途端、まるで静電気を数十倍にも跳ね上げたような電気がイリアの手とお札の間に迸つた。コトネの叫び声で反射的に手を離していなければ火傷を負つていたかもしれない。

「これって……？」

「私にも良く分からないんですけど、私以外の人人が触れると拒絶反応を起こすみたいです」

イリアは顔をしかめる。

これでは、お札が呪具の類になつてしまふし一見、コトネは護ら
れている様で呪われている事になつてしまふ。

「馬車の準備が終わつたよ。いつでも出発できる。」

ヒヒン、トルーフンとロアが乗りこなしている愛馬が鳴き声をあげる。

さてどうしたものが。イリアはコトネといつ一人の少女を田に留めながら考えた。

現状、彼女の持つお札がどんな力を秘めているのかは不明。特にそれが周囲に危害を及ぼすものか否か。これを解明するには一度、聖都へ戻らなければ行けない訳だが、容易に戻れない事情がこちらにはあり、選択肢は彼女を連れて行くか。見捨てるかの一択になつてしまふ。

危険な場所に放置するか、危険な場所に連れ込むかの一択。

(……私は何の為に騎士団に入ったのよ？ 危険な場所に連れ込んで守れば良いじゃない）

連れて行こう。

イリアは自分の冷徹な思考を叱咤し、コトネを受け入れる事にした。それが周囲に危害を加える可能性があつたとしても、単なる足手まとい以下になつたとしても、だ。

「私達はこれから……恐らく、あなたを監禁していた連中のアジトに向かう」

この上なく分かりやすいストレートなイリアの言葉に、この上なく分かりやすい挙動でコトネが驚きを表す。

「どうする？ 私達は目的を達成次第、安全な場所に帰るつもり。そこまで行けばあなたのこれからについても少なからず分かってく

るかもしれない。でも、あなたが私達と同行するのを嫌だと叫うながら私達はあなたを置いて出発する」

その言葉はコトネにとつて、あまりにも冷たくて、鋭い刃で胸を突き刺されるような感覚がコトネを襲った。

決して、イリアはコトネの心を上げて落としてどん底に突き落とすような、冷酷な目的で問い合わせた訳ではないのだろう。しかし、今のコトネの精神は、裏切られたという被害妄想に思考が傾いてしまうほどに弱っていた。

「わ、私は……」

今まで何度も裏切られ続けた。今まで何度も何度も、何度も待って、期待して信頼して信用して、他人を信じ切って裏切られた。

そんな人生を送ってきたコトネには耐えられない。
目の前が見えない。

「ツ！」

気付いた時には走り出していた。理性が働く前に、コトネの感情が爆発し、全てを吹き飛ばしてしまった。

「あっ、待ちなさい！」

イリアの静止を訴える声も虚しく、コトネは自分でもここまで出るとは思つていなかつたであろう速度で走つていってしまう。

その、あまりにも唐突で予想外なアクションにイリアは騎士の一人であるにも関わらず、すぐには動けなかつた。

何処だか、昔の自分を見ているようで動けなかつた——。

「飛んで火にいる夏の少女、かな～」

コトネは呆氣なく捕まつた。イリアではなく、馬車の近くに屯していた人達でもなく、山賊達でもない相手に。

捕まつた場所は木々が生い茂り、その中央に位置するように大きく開いた平地だ。

「は、離してっ！」

首に掛けられた小さな腕を振り解こうと、コトネは暴れる。だが、その小さな腕は見かけによらず非常に力強い拘束力でコトネを離してはくれない。自身の身にリアルタイムで襲い掛かってきた危機感が、逆にコトネから失っていた理性を取り戻してくれる。

「まあまあ、落ち着きなつて。ボクはそんなに怖い人に見えるかな？」
陽気な声で敵意は無いと伝えながらも、行動が矛盾している相手をコトネは睨みつけた。

そこにいたのは少年だ。本当に、いたいけな笑みを浮かべながら佇む少年。こんな所にいるのが不自然な程に。

「もしかしてお姉さん。その年齢でピエロが怖いクチ？」

少年に何か特徴があるとすれば、道化師のような赤色調のスティッカを纏い、服装とは対照的な青色の長髪、そして目と鼻の間を駆け抜けていくように奇妙な三日月のマークが顔に描かれている。あるいは刺青のように刻み込まれていた。

「まあ、折角だし良い情報を提供してあげる。”ハヤト”だつたつけ？ 彼、獄童島つて場所に向かつてる筈だよ。行けば会えるんじやないかな」

少年の言葉に胸を刃で突き刺されるような感覚を味わいながらコトネは唾を呑み込む。なぜ、この少年から”ハヤト”的な名前が出てくる。

朗らかに笑う少年は、コトネの抵抗力に合わせながらまるで機械のように腕に入れている力を程よく調節しながら前方を見据えていた。

「大人一人がかりで”子供一人”を相手にするつもり？ 大人気ないな～」

え？ と、コトネが小さな声を漏らした。

”今この少年は何と言つた？”

「その子から離れなさい！」

少年が見据える先、前方にはイリアが立っていた。彼女は少年を睨みつけながらも困惑した様子で時折、コトネにも田線を向けている。

そしてイリアより一步突き進んだ形で、背中に蒼い翼を生やした青年がサーベルを構えている。

「離してあげても良いけどわあ。ねえねえお一人さん。結界を壊したのは何処の誰でしょうか？」

まさか、この少年は……！？ そこまで考えてコトネは自身の口が開かないことに気付いた。

誰かに細工をされた訳ではなく、彼女の精神状態が発声することを許してはくれない。「あ……あ」といつた言葉にもならない声がか細く発せられるだけだ。

「正解は、今僕が動かないよう抑えているこの子です 本当にありがとうございました。君のおかげで鼠の居場所が突き止められた」
ゾツ……。

背筋だけでなく全身が凍りつくような感覚をコトネは感じた。少年は今までとは違う、まるでワニが口を開けたように口元を裂かせて笑い始めたのだから。

「何が言いたい？」

冷たい氷柱のような言葉が少年へ向かつて放たれた。

「視認不可能な結界を打ち破れちゃうような子なんだよ？ 僕がこうやって抑制してないと君達をハツ裂きにしちゃうかもしねないね。こんなお人形さんみたいに可愛い顔してゐるのにわあ」

それに対しても、少年は黒い微笑みを顔に刻み込みながらコトネから手を離した。まるでイリア達に向けて差し向けるかのように。

「この子が言つてはいることは嘘だ。私を信じて」とコトネは叫びたいのにグチャグチャに崩された脳は酸素を喉まで通してくれない。

交差する悪意と敵意がコトネを両方から貫いた。

蒼い翼を羽ばたかせて青年がサーベルを構えながら冷め切った形相で突撃してくる。突風が吹き荒び、剣の切っ先がコトネの体を、「なつ！」

突き抜けずに、まるで戦場から離れろと言つようこ蒼い翼を羽ばたかせる青年がコトネを蹴り飛ばす。

そのまま、青年は少年へサーべルの柄で腹部を殴るように腰を低くする。が、少年は驚きの声をあげつつも飛び退いて直撃すれば気絶させられたであろう青年の峰打ちを回避する。

蹴り飛ばされた痛みが麻痺するほどに驚愕しているコトネをイリアが優しく受け止められた。

「めんなさい。彼、不器用だからレティに対しても容赦無かつたりするのよ」

静かに呟くイリアはコトネを疑つてなどいなかつた。たつた一日すら経つていらない関係だというのに、一切の迷いを見せずに、「コトネ。あなたを正式に我らハイデルヴェルグ騎士団の保護対象とする」

宣言した。

そつと、「トネを地面に降ろしてくれたイリアの田は先程、コトネを利用した少年へ向けられていく。

「おつかしいな。その子が君達に危害を加えなって保障は無いはずなのに」

少年はボリボリと頭を搔き鳴りながら、イリア達を面白く見世物でも鑑賞している幼い子供のよつたな笑みを零しながら疑問を口にした。

「……騎士として、まずは名乗らせてもりおか。我が名はレイド・ゴー^{ドラグーン}ル。竜騎士の階位を所有する身だ」

殺氣とも違う、霸氣のよつたなものがレイドと名乗った青年を中心に周囲を包み込み始める。

それだけで守られてくるであろう側のコトネでさえ怖氣づいてしまつところに、あのピロロのような少年は全く動じずに、むしろこれぐらいじゃないと諭しめないと言わんばかりの表情でレイドと向かい合つた。

イリアはその場に加勢する事なく、コトネを戦場から出来るだけ遠ざけるように距離を離してゆく。

「わざわざ、自己紹介とは強者の怠慢かい？」

確かにレイドの行動は戦いにおいて怠慢と取られてもおかしくはない。実際そうだ。だが、騎士である彼にとつて身分を明かすことは流儀であり何よりも、

「勘違いしているみたいだから一つ言つておくよ。死にたくないければ立ち去れ。ここは、お前のよつたな子供がいてもいい場所じゃない」敵でさえも守りうとこつ志の表れでもある。初段の奇襲を避けら

れた時点でレイド（奇襲）の本領は發揮できないといつのだ。

「素敵で綺麗なご忠告ありがとう。でも子供だからって甘く見ちゃうのは駄目だ、よ」

変化が起きた。

少年から笑みが消える。周囲の空気が圧迫され、心なしか息苦しくなる。それは、気迫だとか雰囲気だとか精神的な概念からくるものではない。もっと危険なもの。

”火”だ。

「自由に舞いし炎の踊り子よ我が名において此処に顯現し燃え滾る饗宴を形作り——」

少年の右手から二百度は超えるであろう炎の弾が、咄嗟に飛び退いたレイドの足元へ被弾する。

「——その力を以つて目前に座す観客を持て成し熱狂の渦に巻き込め！」

一拍も置かずに早口で少年が”詠唱”を口ずさむ。
別に詠唱が無くても魔法は発動する。が、魔法の正確さと水準火力は術者の精神に大きく左右される。高度な計算が必要になる魔法ほど、計算を狂わせない為にも、意思を高揚させる為にも、大半の魔人に必要不可欠なのが詠唱だ。つまり、少年が発動しようとしている魔法は”高度な計算が必要になる強力な魔法”という事になる。

「炎の鞭？」

レイドは戸惑いを声にして漏らした。少年の魔法は完成した。それは周囲に散漫している酸素と魔力を吸い上げながら更に濃度を増していくと同時に不安定に蠢いていた形を整えてゆく。

「まあ、このまま僕だけ自己紹介しないっていうのも無礼に値するだろうし、君は僕の事をすっかり忘れてるみたいだから名乗つてあげるよ」

右手に携えた凶器。少年の手から垂れ下がるように炎で形成された鞭のようなもので地面を打ち据えながら、

「僕の名前はフルチネイラ」

名乗つた。炎の鞭によつて打ち据えられた地面は抉り取られ、急速に加熱された土砂が所構わず撒き散らされる。少年の形成した炎は最早、燃焼によつて引き起こされる現象ではなく、一つの固体として働いているようだ。

「なつ！？」

少年の名前にレイドは覚えがあつた。いや、忘れられるようなものではない。何故、今まで思い出せなかつたのだろうか。鮮明に過ぎが脳裏を過ぎ、じつ目の前の視界を遮るように映し出された。そのせいで反応が遅れる。

「子供相手だからって手加減されるのもシャクだし……、君達に僕と戦う理由をあげよう。君達もろとも、そこにいる女の子をドロップロの蠍人形に変えられたくなかったら、僕と遊んで勝利してみなよ！」

宣戦布告の合図と共に、少しでもずれれば自身の体に大火傷を負わせるであろう炎の鞭を、プルチネイラと名乗つた少年は振り上げて、振り下ろす。

単純な一段動作がレイドを襲つた。

レイドとプルチネイラの距離はおよそ5m。突き詰めれば簡単に間合いに入る距離だといふのにレイドはその距離を詰められない。むしろ炎の鞭から大げさに距離を取るように斜め後ろへ飛びする。端から見れば臆病者と捉えられたかもしけない、その行動は結果的に冷静な判断として結果を生む。

「ツ！」

確かに”全ての攻撃を避けた”筈なのに額を掠めた熱に、レイドは顔をしかめた。

炎の鞭は見た目通りの威力を持つている。無論、あれを警戒しないことには話にならないのだが、レイドが多く距離を取つたのは視認出来ない攻撃を避ける為だ。

轟々と今も尚、酸素と魔力を食い荒らしながら拡大していく炎の鞭は、同時に炎熱を放出し続けている。それに触れれば大火傷を負つて即アウト。衣服に触れようものなら自然発火を引き起こし自滅を促進し、空氣を吸い込めば肺から体を焼き尽くす。

熱を最大限に利用した波状攻撃。

見えない炎熱がレイドとプルチネイラの距離を縮める事を許さない。

「ほーらつと」

容赦の無い一段動作が足場すら整えていないレイドに繰り返し襲い掛かる。

(今度は斜め!?)

レイドが回避する方向を読んだのか。斜め左に炎の鞭が振り上げられる。

固形物として襲い掛かる鞭は反射的に防御の構えを取りさせようと錯覚させるが回避に徹しなければ、サーベルごとレイドの体を焼き尽くすに違いない。

咄嗟に斜め右へ跳躍。これを回避する。

が、振り上げられた炎の鞭は一段動作の中間部分を通り過ぎ、今度は斜め右に向かつて振り下ろされた。

すんでのところでレイドは覚束おぼつかない翼を羽ばたかせ旋回。一段目もかわして退け、朝日の反射を受けながら銀色に閃く剣先をプルチネイラに向ける。

標的を見失つた炎の鞭は、バチンッと鈍くも鋭い音を立てながら地面の土を抉り取り粉塵すらも灰に変えてバチバチと火の粉をあげた。

レイドは着地と同時に足元に膝をつく。

「ゴホッ……ケホッカハッ……ケホ」

喉が詰まる。息が途絶える。呼吸が乱れる。咳と共に鉄の味が滲み出す。背中から嫌な汗が溢れ出し、体は熱を帯びているというのに心は凍えるように冷え込みはじめる。

やられた。

火と熱の波状攻撃は酸素さえも汲み取つて、こちらの取り分（酸素）を奪い取る。有害な黒煙は、レイドの器官を内側から汚していく。そして何よりも、

「もう息あがつちやつたの？ まだまだこれからなのにさあ」

魔力による毒素がレイドの体の中に流れる竜人の血を汚染していた。

プルチネイラの挑発的な言動にレイドは答えない。代わりに口元から赤黒い血を流しているにも関わらず、悠然と立ち上がる。

自身の尻尾目掛けて血を吐き捨てながらレイドはプルチネイラを睨みつけた。ここからが本番だと言わんばかりの眼光をぎらつかせながら。

どうして？

コトネは戦場を目の当たりにしながら疑問をぶつけていた。

何故、彼らは自分を信じてくれたのか。それが全く理解できない。

「別にあなたの事を信用している訳じゃないわよ。これは、あの道化師があれこれ言つ前から思つてた」

容赦なく浴びせられる言葉。

「ただね。保証人がいるのよ」

目前で起きている戦いを見守りながら、イリアはコトネを静かに降ろす。

「そこから先は僕がご説明しましょう」

何処か、聞き慣れた声がコトネの耳を掠めてゆく。この丁寧な口調と若々しい声質は確か……。

「またお会いしましたね。」では彼の戦いを妨害してしまってどう。どうかこちらへ」

最初に会った時よりも、疲労が少し薄れたように見える山羊と人間を足して割つたようなあの少年が立っていた。
おざなり程度に調整された木の杖をつきながらの姿は少々、痛々しくも映るが杖を持っていない方の手でコトネに手招きをしている。その手つきもまた、弱々しい。

「その子が、あなたの保証人」

静かに告げたイリアに促され、「コトネは……獣人だつたか？ そんな呼び名で呼ばれているらしい種族の少年へ視線を向ける。

が、戦場から送られてきた爆音と熱気に彼女はつい足を止めた。

振り返つた先に映る光景は砂埃と黒煙と蜃気楼が入り混じり、非常に視界が悪い。

そんな中、辛うじて見えたのは自分を守る為に戦ってくれているであろうあの青年が片足をついて真上に掲げられた炎の鞭を前に苦戦している姿だった。

何回目だろうか？ 酸欠状態によつて意識が朦朧とする中、レイドは炎の鞭を横に転がりながら避ける。抉り取られた土砂と舞い散る落ち葉が凶器へと変貌し、転がつたレイドの背面を強打した。

骨が折れなかつたのが幸いか。それでも嫌な音を軋ませながら悲鳴をあげる身体を無理やりに動かしてレイドは次の攻撃に身構える。一段動作、と言つても炎の鞭の変則的な動きは文字通り変幻自在でありレイドを着実に甚振つていた。

ブルチネイラが発狂した笑いを発しながら、一回二回と体ごと炎の鞭を横に回転させる。

今まで縦向きに振るわれていた炎の鞭のリズムが崩れ、不意をつ

かれたレイドは頬を掠める炎熱に冷や汗をかく。

それでも、レイドは身を屈ませたり、地面ストレスレを屈いでいく死の縄跳びを跳躍して潜り抜けながら眼前の敵に焦点を合わせ続ける。

しかし、その視界は時折、背後向いてはイリア達の方向と距離に気を配っていた。

炎熱と突風が織り交ざった炎の波がレイドのすぐ後方の樹木に傷をつけ、発火する。

「その余裕。気に食わない！」

レイドの態度が癪に障つたのだろうか。ブルチネイラが激情を露にしながら炎の鞭を振り上げた。

ブウンと限界まで酸素を吸い上げた炎の鞭が強引に振り下ろされる。

「ゴホッ！？」

不意に喉から込み上げてきた違和感にレイドの動きが止まった。消耗戦において遂に限界を来した体が悲鳴をあげ、炎の鞭が容赦なく襲い掛かる。

が、それはレイドを直撃せず少し横に逸れた地面へ衝突した。熱風がレイドの体を吹き飛ばす。

(こいつ?)

全身の痛みにうろたえつつも確実な手応えをレイドは感じた。再度、7mにまで伸びた炎の鞭がレイドへと襲い掛かるがそれらは全て、照準を見定めずに空を切り地面を無作為に抉り取る。

(もしかして、操作が効かなくなってきたる?)

あまりにも大きな炎の鞭は、言わずもがな魔法で形成されたものだろう。周囲の空気と魔力を喰い散らかしながら排出して、その規模をデカくしていく。巨大化した鞭は質量を増やし強化される。

だが、だからこそ重過ぎる鞭が少年を振り回していくようにレイドには見えた。今までの動きと違い、付け入る隙すら見えてくる。

炎熱の壁を前に距離を置くことしか出来なかつたレイドに新たな

希望が見え始める。

(わざわざ“これ”を使わなくても大丈夫そつかな?)

自分で自分に問いかける。

レイドは長期戦を見越して、ある魔法を発動させる為の術式を形成。起動の準備に入つていた。わざわざ手間隙をかけて作り上げた魔法を使わないというのも勿体無い気がするが魔力の無駄遣いは避けたい。

いける。このままいけば劣勢が優勢に移り変わる。

そう信じて、レイドは剣を構え、間合いを詰めた。

「らあっ!」

炎の鞭を撓らせながらブルチネイラが叫ぶ。

レイドもそれに応えて接近戦に持ち込もうと地面を蹴つて駆け出す。

「なっ!?

だが、炎の鞭の軌道は予想を外れてイリア達の元へと向かつていった。

相手も長期戦での消耗試合はこれ以上、通用しないと察したのだろう。今まで使わなかつたのが不思議なぐらいの奥の手に走る。

怒りで頭が真っ白になりかけたレイドだったがイリア達を守るよう、自身を壁にするかのように炎の鞭へと自ら当たつていく。駆けて行く時に尻尾が地面を擦れて血痕を残していく。

コトネは確かに見た。レイドがサーベルを構えることすら止めて自分達を庇つてくれた姿を。

あまりにも速過ぎて目で追つた光景が脳で処理されるまでに、かなりの時間有したが——、素人以下の知識しか持つていらないコトネでさえも分かる。

300は超えるであろう不可思議な形状を保つたあの炎が、自分達を庇つてくれたレイドを燃えるという表現が不適切な程に、溶かしているであろう光景が簡単に想像出来た。

けれども、現実は違つた。

レイドは人間の体なんて簡単に裂いてしまえる炎の鞭を片手で抑えながら持ち上げていた。

ミシミシパシッ、と炎の鞭が異音を立てながら石へと姿を変えていく。

「彼の属性は……、見た感じ氷でしょうか」

静かに山羊の少年が呟いた。

コトネはその言葉に眉をしかめる。“氷”？

かなり率直な印象だが、氷は炎に弱いというのが典型例ではなかろうか？　コトネには氷での炎に太刀打ちできるとは思えない。溶かされてしまうのが闇の山のはず。

「要は物量よ物量」

まるで間に入つたらレイドの邪魔になるとわんばかりに、コトネ達の傍で待機しているイリアが口を開く。

物量と言われてもコトネには分からぬ。

分かることがあるとすれば今まで攻め手に回っていた少年、ブルチネイラが余裕の無くなつた表情で炎の鞭に対し手を掲げ続けるレイドを見据えていることぐらいだろうか。

「と、そういうえば自己紹介がまだでした」

不健康そうな顔を上げながら山羊の少年がコトネに視点を変えた。一つのどんぐり眼がこちらを覗いている。

「僕の名前はハロルド・ヴァリスト」

動かすだけでも辛そうな体を律儀に折り曲げながら、ハロルドはお辞儀をした。

「バーロス最大のギルド。『ボンド』に属する身、と言つてもあなたには分かりませんよね。適当にハロルドとでもお呼びください」

ハロルドと言う名の少年は、そこの名の知れたギルドと呼ばれる組織の一員だつたらしい。と言つても、そんなことをコトネが知る由も無く、彼の人徳のおかげで自分が救われた事を知ったのは暫くしてからである。

「有り得ない……」

「プルチネイラから絶句した一言が零れ落ちる。

「ど、どんな小細工を。魔法を発動させる余裕なんて無かった筈だ」
300度を凌駕し、400度にさえも到達しようとしていた炎の
鞭を掴み取られ、ただの石に変えられた。ものの数秒で周囲の炎が
姿を消してゆく。

どう考へても人間業で成せる領域ではない。ともすれば魔法で何
かしら手を打つたというのが妥当だが、どんな魔法にせよ準備が必
要。そんな余裕はレイドに無かつた筈なのに一体どうやって……。

滑稽にも敵に向かつて説明を求めるプルチネイラ。無論、それに
レイドは答えるつもりも余裕も無い。

情けも容赦も加減も知らない一撃が瞬時に間合いを詰めたレイド
のサーベルから放たれ、プルチネイラの胴体を両断する。

「借りは返したぞ」

「ハ、……ハハ。やつぱ、り、あ、——時よりも強くなつて……凄
……いやあ」

上半分になつた身体を宙に漂わせながらプルチネイラが途切れ途
切れに賞賛と皮肉に塗まみれた言葉をレイドに送り、散つてゆく。

その体は、宙を舞いながら赤い霧状へと変化し地面に衝突するや
否や衣類と共に土へと変わつた。

「泥人形ゴーレム……属性は土。特性は再生。何度でも蘇る、か」

恐らく、プルチネイラの本体は別の何処かにあり途中ですり替わ
つていたのであろう。あるいは最初から偽者だつたか。複数の個体
を有しているのか。土属性の魔法を利用して造られた泥人形ゴーレムである
事ぐらいしかレイドには推測できない。

忌々しい、とレイドは思つ。同時に相手が得体の知れない存在で
あらうとも殺めるまでに至らなかつた安心感がレイドの心を右往左

往している。

体を両断されたにも関わらず血痕一つさえ流さなかつたプルチネイラの残骸へ冷ややかな視線を送りながらレイドはサーベルを専用の布で拭う。斬つた感触だけが生々しく残つていた。

「魔法陣を形成したのは僕の血だよ」

聞こえていないのを承知の上でレイドはプルチネイラが先程、問い合わせてきた質問に答えてやる。尻尾で地面を箒のように払いながら、剣筒にサーベルを収めた。

「ただ逃げ回つていた訳じゃない」

たつたの一言で終わらせてレイドは視界を広げる。幸いにも山火事へ発展はしていない。イリアが後方支援で消化にでも回つてくれていたのだろうか。

地面上にはレイドの吐き捨てた血反吐が尻尾という筆を以つて何かしらの印を描いていた。これが、レイドが魔法を発動させる歯車の役目を果たしてくれたのだ。後は宣言を回してプルチネイラの攻撃に合わせて反撃を行えば良かつたのである。

これでも極力、吸わない様にしていた毒素を吐き出しながら、ようやく濁りを薄くし始めた空気を盛大に吸い上げながらレイドはイリア達の元へと歩き出す。

全く、山賊達の拠点にすら辿り付いていないといつて、とんだイレギュラーと出くわした。プルチネイラがどんな理由で山賊達に介入していくのかは検討がつかないが相手の戦力が掘めなくなつてしまつた。

道化師プルチネイラ。目的も動機も一切不明の犯罪者で奇妙な魔法を巧みに操り、消息を掴ませないことで有名な少年。

外見こそ少年そのものだが、実年齢は誤魔化しているのだろう。レイドは9年前にプルチネイラと会つたことがある。

(次から次へと……本当に何なんだ)

心の中で毒づきながらも、レイドは雑念を振り払つた。障害はひ

とまざつたのだか、

「で、お仲間がまだ捕らえられていると？」

緊迫した空気が過ぎ去り、安心出来るとは言い難いものの落ち着ける場所を取り戻したことでの溜め込んでいた疲労を回復させながらレイドは名門ギルド『ボンド』に属する少年。ハロルド・ヴァリスターへと目を向けた。

「はい。僕らだけではなく民間人も何人か捕らえられているようです。出身地問わずで」

聖都の負い目だ、とレイドは責めるような言い含めをしたハロルドを見て思つた。まさか、他の国の人間にまで被害が出ていたなんて……。

パカロツパカロツと馬が軽快な蹄の音を立てながら景色が目まぐるしく変わる。

やつとこを出発した馬車の中で、レイドは壁際に身を預けるようにして座つていた。

「まあ、そういう行方不明者の情報を手に入れて僕らが動いていた訳ですが……、やられました」

馬車の音で搔き消えそつなほどにハロルドの声は小さい。

「聖都には元々、別の用件で赴いていました。二人で行動していたのですが、その仲間とは引き離されてしまいました。舐めてかかり

過ぎた

本音が見え隠れするハロルドの言葉が、レイドやイリアの胸に深く突き刺さった。

自國の問題を他國が解消しようと。しかもこちらが気付く前に行動していたと考えると重い責任が压し掛かる。

「お仲間さんの外見は？」

イリアが尋ねる。

「名はラティール・フィード。蜥蜴獸人じかげじゆじんです。鱗は赤色で年齢は30歳半ばの男性。喋り方が独特なので見つかればすぐ分かると思います」

これまた随分と異色な面子だ。

衣類に触れなかつたのは、それだけ捕らえられていた時間が長かつたことを意味する。今のハロルドの服装は汚れた布切れを縫つて合わせたような、かなり、がさつなものだ。衛生的にも見栄えも悪い。

登山時にこのような衣服を着る筈がないし、捕られた人間が保険として、逃走された際に下山が困難となる衣服へ着替えさせられたというのが正しいだろ？

そう考えれば蜥蜴獸人のお仲間、ラティール・フィードが今現在纏っている衣服を別々の場所に監禁されたハロルドは知らない事になる。

それにしても、

「君つてまだ十一歳ぐらいだよね？　こんな危ない仕事を請け負わなくとも良かつたんじゃあ」

ギルドといつのば、要は簡単に言ひてしまえば何でも屋だ。金や、それ相応に見合つた代物を渡せば一部例外を除いてどんな仕事を請け負うといったもの。

自由国バー口スの治安維持やその他、経営管理等は全てギルドが担つており、聖都の騎士団や帝国の軍人とは違い、面倒なしがらみに捉われず動けるという利点がある。それ故、今回も他国の問題に何の躊躇いも無く介入出来たのだらう。だが、そうなると依頼主は誰なのか？　レイドはハロルドの年齢も踏まえながら問い合わせす。

「別に若いからギルドの人間になつてはいけないなんてルールは無いでしょ。それと僕は十四です」

ハロルドの淡々とした言葉にレイドは具体的な否定が思い浮かばない。きっと、バー口スでは認められている事なのだらう。

「まあ、ともかくにもラティールさんと会流しないとそっちも話にならないんでしょ？」

遠慮の無いイリアの言葉にハロルドは眉をつりあげたが、余計な体力を微塵も使いたくないのか溜め息を吐きながら俯く。

「どうわけで、面倒な事は後回にして田の前の問題に取り掛かりましょう」

強引かつ綺麗にイリアが話の流れをもつていく。

「……あの」

その時だ。突然、馬車に乗るのは初めてなのか軽く酔い気味のコトネがレイド達の会話に入ってきた。

「どうかした？」

声をかけてきた相手の外見のせいで少し動搖したコトネだったが、戦っていた時とは全然違う穏やかな笑みを浮かべるレイドの姿を見てホッと胸を撫で下ろす。

「あの、さっきの……フルチネイラつて子について詳しく教えて欲しいんです」

予想外の質問にレイドもイリアも目を丸くした。

「どうして君が奴に興味を抱くんかい？」

丸くしていた目を細めて、レイドがコトネの顔に視線を向けた。その気迫に負けてコトネは目を逸らしてしまう。

「あの子は、私の友人の名前を知っていました。名前はハヤトって言つんですけど、ゴクリュウトウに向かっているって……」

コトネの言葉に耳を疑つた。

獄竜島は言葉通り、地獄のような島である。

「その、ハヤト君つていうのは何歳ぐらいなのかな？ 外見とかも分かれば教えて欲しいんだけど」

田の色が変わったレイド達にコトネはハヤトといつ少年について話します。

年齢は十六でコトネと同じ年らしい。

大人なら行つてもいいという場所ではないが、子供が行くなら尚更危ない場所に間違いは無い。

外見は”セイフク”を着た学生らしいが、レイド達にはセイフクと呼ばれるような衣服は聞いたことが無かつた。

やはり、彼女は自分達とは異なる知識を持っているのだろうか？

とりあえず、黒い髪のショートで背丈は170を越えた辺り。横幅は痩せてもなく太つてもいないという大まかな外見だけは理解出来た。

外見は理解出来たのだが……、

「どうして、そのハヤトって子が獄竈島に向かう必要があるの？ あそこは一般人の立ち入りが禁じられた危険区域よ」

イリアの訝しげな表情にコトネは顔を真っ青にしたが、自身を鼓舞する為か横に頭を数回振つてから、分からないと答えた。

そんなコトネの姿を見たレイドは、

「獄竜島には行かない方が良い」

プルチネイラがコトネに嘘を吐いていると推測した。

目的も動機も分からぬ相手の言ひ事を鵜呑みにするのは良くない。疑つてかかるべきだ。

「で、でもハヤトの名前が出でてくる事自体おかしいんですよー。もしかしてハヤトもいっちゃん……」

何やら切羽詰つた表情のコトネにレイドは首を傾げ、困った様子でイリアへ視線を変えた。

彼女も彼女で何やら考え込んでいるようだが、これ以上は混乱させてしまつとレイドに念を押してからコトネの傍に寄り添つ。

「とりあえず、手掛かりも無いんだし、こんな所で話しても埒が明かないわよ」

イリアの言葉にコトネは俯いた。

よっぽど、ハヤトといつ少年の事が心配なのだろうか。

「ふむ。僕は獄竜島がどんな場所か知らないが、そんなに危険な場所なのかね?」

耳元で、珍しく黙りながら流れを観察していたルーフェが囁くようにレイドに問いかけてきた。

「冒険者や旅人、要人でさえも専門家を引き連れなければ立ち入りが禁じられているような場所です」

といつよりも、そもそも獄竜島に向かうメリットが無いのだ。

聖王国の最東端には『シャコガイ』といつ港町がある。

その港町を中心とした湾岸地帯は二字に広がっており、西の山岳地帯から流れてくる川水と海水が溶け込みあつた特殊な地形が相まって珍しい淡水魚や海の生物が多い事で有名である。

そして何よりも、二字に広がった湾岸地帯の中心にある孤島が曲者で――、

「あの場所は潮の満ち引きが激しい上に満潮時には特殊な海流が生まれます。これに呑まれて生きて帰ってきたものはいないと云われる程ですよ」

言ひまでも無く今、レイドが語りしている孤島の名前こそが獄竜島。

この島は特殊な地形を更に引き立たせ、二字に広がった湾岸へ魚を閉じ込める役割を持つている。おかげで港町の漁業は年がら年中、大漁の成果をあげられる事から獄竜島といつ名前とは裏腹に恵みの象徴として奉られているらしい。

が、それと同時に獄竜島には『海のヌシ』がいるとかね、特殊な海流を引き起こしているのも、この海のヌシの仕業と噂されている。人々に恩恵を与えると同時に踏み入った者達を例外なく海の底へと引きずり込む”獄竜島”と”海のヌシ”。

「ふむ。では、どうしてハヤト君とやつせこに行こうとしているのかな」

「僕もそれが分からんです。プルチネイラに唆されて誘導されてるのかも」

獄竜島という島全体にはこれといって利益になるようなものは挙がっていない。

行くとすれば相当な物好きか、運悪く海流に流されて島に流れ着いてしまった漁師。あるいは港町シャコガイの漁業に支障がないよう、年に一度、調査と点検へ向かう専門家ぐらいである。

少年が行くような場所では決して無いと思つ。

「……道化師だったか。君はプルチネイラと何やら険悪な関係にいるようだが、視野を固定し過ぎていなかい？」

まるで、もつと遠く彼方を眺めているような眼差しでルーフェは大人びた声を発した。

しかし、その視線はレイドを直線的に見つめて離さない。

「どういった事ですか？」

「何があつたかは僕の知るところでは無いが、君はプルチネイラが怖いのかい？ 慎重に足を運ぶのは大切だ。彼が何かしら罠を仕掛けている可能性もゼロでは無いだろ。」

だが、プルチネイラという存在に捉われ過ぎて他の可能性に見向

きをしないところのは感心できない」

ルーフェの鋭い指摘にレイドは口をつぐむ。

自分でも気付かないほどに、プルチネイラに対して警戒心といふ名の視点を置きすぎていたのだろう。それこそ盲点を生み出してしまつぐらうに。

それは何故か？——怖いからだ。

ルーフェの言つ通り、レイドはプルチネイラといつ存在が怖い。

「……恐らく、あの猫獣人が言つていた”人質”とは奴の力によるものでしょう。奴は空間を操ることに長けている」

九年前、レイドはプルチネイラと戦つた事があった。

戦闘の最中、プルチネイラが名乗つた時に狼狽したのは、これが原因だ。

「無数の糸を張り巡らせ、人形に取り付ける。後は魔力さえあれば何だって奴の手の平の上で踊ります」

魔力さえ無ければレイドだってプルチネイラに勝てると思つ。魔力さえ無ければ外見通りの子供なのだから。

しかし、ここまで魔力で満ち足りた場でプルチネイラに勝てるとはレイドには到底思えない。

だから怖い。

こんな場所で奴と出くわすという展開自体が既にレイドの神経を磨り減らし、心を蝕んでいる。

「でも、何となく奴がここにいる理由も分かつてきました」

ルーフェから視線を逸らし、俯いていた顔をあげながらレイドは言葉を紡ぐ。

「奴の力の大本は魔力から来ています。だつたら魔鉱石に何かしらの興味や執着を抱いても可笑しくはない」

この世の理も、法則も、仕組みさえも無視する魔力を生成し、クレアシオ全体に流す魔力の奔流と謂われる鉱石。

プルチネイラにとつては喉から手が出るほどに欲す対象になるのではないか。

「確かに、君の言つことにも一理ある。だが、強さや戦力を求めるのはあくまでも何かを成し遂げる為の手段。下準備ではないかね？」

流石は各国を渡り歩いている吟遊詩人というだけある。

年季の入った冷静なルーフェの言葉にレイドも同意の意を込めて頷いた。

「そうですね。だから、ここにいる理由は何となく掘めても目的までは分からない。良からぬことを企んでいるのは間違いないですが」

山賊を利用し、違法な流通ルートまで使って武装を充実させ、誘拐まで行わせる。果てには、その山賊達までも人質として扱つていいのだから底知れぬ目的、野望のようなものがあるに違いない。

「僕は奴に勝とうとは思いません。でも、だからと言つて田の前で起つている事を見過ごす訳にもいかない」

恐怖に勝つた正義感がレイドに再び活力を与える。恐怖からくる勇気とも言えようか。

ふつふつと湧き上がる思念は一つの形としてレイドの脳裏に焼きついた。

(騎士の誇りにかけて、捕まっている人達も、山賊達も救い出して今ここで起きている問題も突き止める)

それは強い信念。ただ、ひたすらに田の前の問題を解決したいと一見すれば偽善にも似た意思。

いや、言葉通り偽善なのだろう。

騎士の誇りというのは単なる建前で、レイドはただ自分の歪んだ心を満たしたいだけなのかもしれない。

しかし、偽善も貫き通せば建前や欺瞞を覆い尽くして強大な力に変わる。

レイドが決意を新たにしていると、ガタン、と何かに引っ掛かる音を立てて馬車が動きを止めた。

「ここから先は徒步でしか進めないみたいだ」

むしろ、こんな山奥まで進めたのを誇るべきか。ロアの操縦テクニックもさることながら優秀な馬である。

「探索と待機に人員を分けた方が良いかな」

いち早く降りたレイドは前方の細い上り坂を見据えながら呟いた。周囲に敵の気配が無いことを確認してから、ルーフェ達にも降りるよう伝える。

「俺は魔力に耐性がある。ルーフェは馬車で待っていてくれ」

ロアが馬を一撫でしながらルーフェに声をかける。

「ふむ。魔鉱石マインスが実際にあるなら一目拝んでみたかったが……ロア君の頼みなら仕方が無い」

待機するメンバーは馬車の運転と点検が可能なルーフェ。体調が芳しくないハロルド。そしてコトネ。最後に彼ら三人を守る為にイリアが残る事になった。

探索にあたるのは残る三人となる。

「でも、本当に大丈夫？ サっきの戦闘でも大分、消耗してるみたいだし」

竜人の血が半分を占めているレイドの体は魔人ほど魔力に対しての耐性が無い。先程もプルチネイラの魔法が放出していた魔力によって血を吐いていた。探索にあたるのなら。レイドに残つてもらつた方が良いに決まつている。だが、

「僕の戦い方はどちらかと言えば攻めに向いているんだ。これから向かう先に山賊達の残党がいるのは間違いない。プルチネイラの本体がまだいるかもしれないし、イリアには守りに徹して欲しい」無理をしている。それはレイド自身、自分の体だから分かつてゐるし、騎士団での付き合いが長いイリアにも見抜かれている事だろ

う。

「……はあ～、しょうがないわね。ここは私が絶対に死守するからさつさと帰ってきてなさい」

しかし、イリアはレイドを止めない。どうせ止めようとしても無駄だと思つし、レイドの言つ通り、イリアはどうやらかと言えば守りを専門とした根っからの騎士だ。

イリアが得意とする陣術は戦場が一転三転する戦場では展開しづらい。逆に言えば一箇所に留まつていれば十一分にその真価を發揮できる。

逆にレイドは騎士であるにも関わらず攻撃に特化した戦法と剣術に秀でている。防戦一方を強いられたプルチネイラとの戦いでは苦戦していたが、攻めに転じられれば圧倒的な強さを誇るのだ。

それに、何よりもイリアはレイドを信頼している。戦闘力から情報分析力まで、少し悔しいがイリアはレイドに勝てる気がしない。だからこそ、その強さを知っているからこそ頼もしい背中を素直に見送ることが出来る。

「うん。必ず帰つてくる。捕まつてゐる人達も全員連れ戻します」

イリアに笑みを送つてからハロルドにも聞こえるようにレイドは宣言した。

山風がレイド達の肌を掠めていく。
かす

「行くとするか」

機械音声越しに放たれたロアの言葉にレイドは頷き、押し黙つていたヴィロ教授も足を動かし始めた。

「……熱と土の人口生命体」
ホムンクルス

プルチネイラの人形と呼ぶべきか。あの人工形を形成していたモノ

は魔法で人型に練り上げた土とそれに魂を吹き込む為の炎。厳密に言えば繊細に熱を加えていき造られた導力器だ。

これ等が備わり、人間とほぼ同じ外見をした一体の人形を創り上げていた。

ここは、空気がこれでもかといつぐらいに濁った洞窟の中。埃を払った石造りの椅子に腰掛けながら、全身に独特的の紋様が入ったローブを着込んでいる男は溜め息を吐いた。崖の上でプルチネイラと会話をしていた男だ。

人形は本体ではない。

遠隔操作で制御されている人形には細かい調整が効かない。空間魔法なんて頭の痛くなるような演算が必要になる魔法は人形如きに扱えないし、炎の鞭を強化し過ぎるあまり、自分の手に余る程に重くなってしまうという誤算も人形であるが故に生じたもの。

恐らく、敗因はそこにあると密かに戦いを監視していたローブ姿の男は考えたが、レイド・コールと自ら名乗った騎士が取った作戦と魔法の前には幾ら戦術のミスを改善しても人形であるプルチネイラでは、どのみち勝てなかつたのかもしれない。

「やれやれ。結果を急ぐ必要がありそうだ」

ローブ姿の男はフードを捲りあげながら立ち上がる。

ショートの銀髪が見え隠れし、肌白の顔面を僅かに覗かせた。

ローブ姿の男が見つめる先には紫色に発光する全長4mは越すであろう巨大なクリスタルが聳え立っていた。その周囲には工具が転がっており、幾つもの木の板を嵌めて作つた足場がクリスタルを中心にならべて置かれている。

魔鉱石。

元は鉱夫であつた山賊達を貧困へと追い込み、この周辺を人目の

つかない辺境へと変貌させ、拳句の果てには自分達のような山賊達とは大きく異なる心根から悪に染まつた者達に利用されるような代物。

あらゆるものに大きな歪みを発生させている原因が堂々かつ異様な存在感を醸し出していた。

「オイ！　ここまで立ち入るのは許してないはずだぞ」

背後からかけられた猪獣人の大声が大空洞に反響し、ロープ姿の男は耳障りだと顔をしかめた。

「これは失礼」

「……それよりもお前に折り入つて話したいことがある」

突然、態度がデカかつた猪獣人が何処か弱つた様子でロープ姿の男に近付く。

物資を山賊達に補給する為の細かい伝達を任せされていたパイプ役であるロープ姿の男でさえ立ち入り禁止と念を押されていた場所に勝手に入り込んだというのに、猪獣人は”それよりも”の一言で片付けてしまった。

ロープ姿の男にとって、それは予想外の反応であり、同時に事が上手く運び過ぎていて苦笑が込み上げるのを抑えるようなものだった。

「何だ？」

「俺達の繩張りに侵入してきた騎士団の連中と、変な少年の戦いを見たが、ありや人間同士の戦いとは思えねえ。あんなのがここまで迫ってきたら、もう俺達には後がねえんだよ」

どうやら、山賊達もレイドとブルチネイラの一戦を見ていたらしい。

確かに彼らにとつては、人間同士の戦いと表現するには些か次元が違い過ぎるものなのだろう。人間ではない別の存在に捉えてしまつたのだろう。

それがここまで迫つてくるともなれば恐怖するのも理解できる。

「……秘策がある。侵入者共を纏めて叩ける秘策がな」

「それは何だ!? 僕はヘッドとして仲間をこれからも養っていく
なくちゃならねエ。教えてくれ!」

「それはな」

竜の紋様が刻まれた錫杖を取り出してローブ姿の男は、
「こうするんだよ」

突然、錫杖を猪獣人に向けて刺した。

錫杖の先端部分からは眩い光を発する三叉槍が顔を出していった。
ズブリ、と音ではなくどちらかと言えば猪獣人の肉を貫く感触が
ローブ姿の男に伝わってくる。

「ガハッ、グエヒア……」

何をされたのか理解が追いついていないのか、猪獣人は焦点の合
わない眼球をうごめかせながら喘ぎ声をあげる。

「生贊を逃がしたお前が悪い。代替以下の質しか持ち合わせていな
いだろうが、その体で代償はしつかり支払つてもうつ」

ローブ姿の男は猪獣人の安否など気にせずに、その体を突き刺し
たままの三叉槍を上へ上へと持ち上げた。

「グッ、ルシイ……ア……ギャ」

苦しそうにもがく猪獣人の体から血が垂れ落ちる。

そんな猪獣人の様子には目も暮れずにローブ姿の男は三叉槍を持
ち上げたまま魔鉱石の元へと歩いていった。

一步、歩く度に三叉槍を伝う衝撃が猪獣人の肉を引き上げ、引き
下げる度に魔鉱石に猪獣人の傷口を擦りつけた。
魔鉱石のすぐ傍まで移動して、ようやく三叉槍を猪獣人の体から引き抜
いてやる。

引き抜かれた瞬間、傷口から大量の血が噴出し、ショックで猪獣
人は気を失った。

ここまで良くなかった方だとローブ姿の男は地面に突つ伏した猪獣
人を腕で持ち上げ、魔鉱石に猪獣人の傷口を擦りつけた。
ここまで恥辱に震わされれば、魔鉱石の”主”も顔を出してくれ

る筈なんだがな」

ロープ姿の男は溜め息を吐きながらも瀕死の猪獣人に治療を始めた。その腕から緑色のオーラのようなものが発せられる。

獣人にとって魔力は毒だ。

既に瀕死に陥っている猪獣人にこれ以上、魔力を注ぎ込むのは拷問に近い所業だが、延命の魔法をロープ姿の男は猪獣人に無理やり施す。

「他の連中は約束通り、助けてやるよ。死ななければ、立ち直れる可能性ぐらいは保障されるだろ」

嘲笑しながら、ロープ姿の男は三叉槍へと変貌した錫杖を頭上へ掲げて叫ぶ。

「泥の底に潜む異形よ。私は”魔導師”。我的言葉に命じ、その力を存分に發揮しろ」

ロープ姿の男が叫び終えた数秒後、地鳴りのような轟音が鳴り響き、この大地一帯に眠っていた化物の片鱗が呼び覚まされる。

眠りを妨げられた化物達は地中で暴れ回りながら、睡眠の代わりとなる欲望を満たしたいが為に地上へ昇つてくる。

飢えに飢えた食欲を満たす為に。怒気に満ちた感情をぶつける為に。その全力を以つて地上へ顔を出した。

【蒼の巻】 魔鉱石 1-3 不良瘴氣

瘴氣に満ち溢れた空氣は吸うだけで氣分が悪くなる。

異臭はしない。魔力は無臭だ。

だが、無臭だからこそ気付いた時にはもう遅いという危険性が纏わりついてくる。危険の一文字が全身を撫でるように這いつけてくる不快感を覚えながら、レイド達は慎重に歩みを進める。

「何処もかしこも六だらけ。これでは全て探す前に日が暮れてしまふ」

男とも女とも判別できない機械音声でロアが周囲を見渡した。

「魔力の源を探すといつても、ここまで充満していると根源を見つけるのは骨が折れそうですね」

眼鏡に纏わりついた砂塵を布で拭き取りながらヴィロが弱音を吐く。

今、レイド達がいるのは恐らく山頂付近だろう。一帯にはどうやら建造したのか穴倉のような構造の家が幾つも建て並んでいた。

山賊達の休憩所といったところか。

元はここを拠点にして、鉱夫達が家族を養いながら鉱石を掘る仕事を就いていたのだろう。

だが、そんな面影は今はもう無い。一粒たりとも残つていないうに見える。

静まり返つた休憩所には風だけが虚しく吹き荒れていた。

「……氣配が無い？」

静けさが漂う休憩所には人の氣配が一切無い。

こんな環境だ。人がいなくて至極当然のようにも思えるが胸につかえるものをレイドは感じた。

試しにレイドは近くに転がっていた石ころを一つ摘み上げ、遠くへと投げ飛ばしてみる。

石ころは風化した建物にぶつかり、一回二回と地面を跳ねながら何事も無かつたかのように静かな大地へと溶け込んでゆく。

「反応も無しか」

本当に誰もいないのだろうか。

——それとも罠か？

レイドは先頭に立ちながら慎重に安全な道を確保していく。

「待て。一寸止まれ」

ロアが後ろからレイドの腕を掴んで引き寄せた。

「何がが近付いてきてる」

早口にまくし立てたロアは自身の剣帯に吊るしてあるHスチックを抜き出しながら構えた。

それに呼応してレイドも常に構えていたサーベルに力を加えて、ヴィロを守るよつに立ち位置を調整していく。

数秒後、異変は地鳴りと共に真下から襲ってきた。

嫌な音を立てながら足場が崩れていき、人工的に作られたと思しき空洞がその姿を現す。

「まづつーー？」

気付いた時にはもう遅く、レイド達は足場を失い空洞へと落ちていった。

咄嗟にレイドはヴィロの体に手を伸ばし、滑り落ちる流れに身を任せた。無理に落ちるのを拒否すれば、突出した岩に体を引き裂かれてしまう。

「ロアーー！」

「ひちらは大丈夫だ」

異変にいち早く気付いたロアだけは空洞へ落りずに頭上からひちらを覗くように見下ろしていた。

滑り落ちるとこまで落ちて、ようやく動けるよつになつたレイド

は砂埃を払いながら周りに目を向ける。

横幅が大して無い廊下のような場所だ。

ヴィロが突然の出来事に困惑しながら落とした眼鏡を探しているところだった。

指の間に引っ掛かるようにして落ちていた黒縁の眼鏡をヴィロに手渡す。

「ありがとうございます。にしても、二二二は一体？」

「落とし穴だと思いますよ」

レイドは光の差し込む頭上を見上げながら崩落した部分に手を当てて答えた。

サラサラした砂と、適当に積み上げましたと言わんばかりに不安定な耐久性を施された土。蟻地獄を応用したような仕掛けが為されている。

偶然、老朽化していた足場が事故で崩れたとは考え難い。

「どうする？」

自分に自分で問いかける。

しかし、レイドの問いかけにレイド自身の答えは返つてこない。

「二二二の場所。元は連絡道だったのでは？」

ヴィロが渡された眼鏡のピントを合わせながら田の前に広がる暗がりを指差した。

「もしかしたら他に道があるかもしません」

確かに、ヴィロの言つ通りかもしけないと、レイドは思った。

地中に作り上げられた連絡道。毛細血管のよつこ広がった通路は迷路のように入り組んでいるかもしれないが、上へあがれる道もあるに違いない。

「灯火よ」

ヴィロが手元から取り出した小枝の杖で落書きのよつこ地面上に魔法陣を描いた。

ボウッと杖の先端部分に光が灯り、今まで暗闇に身を潜めていた道が姿を現す。

細長い道は、ヴィロが魔法で灯した光でも照らし出せないほどに細かつたが、それは同時に道が続いていることを意味していた。

行き止まり宣言をされるよりは幾分かマシだ。

「何をしている馬鹿者共が！ 早くそこから離れろー！」

そんな事を考えていたら真上から響いてきた怒号にレイドは我に

返つた。

瞬時、ヴィロの手を引いてその場から駆け出す。

爆音と共に左右の壁が掘り崩され、衝撃がレイドの背中を襲つた。

ロアは何と言つていた？

レイドとヴィロが空洞に落ちる少し前、何かが近付いていると警告していくではないか。

「クツ……」

粉塵のマントを翻してサーベルを突き立てながらレイドは歯軋りした。突き立てた先には大きく長細い影がある。

最初は爆薬か何かが仕込まれており、段階的に地面を崩落させてからレイド達を木つ端微塵にする仕掛けだと予測していた。

だが、爆薬なんて一個も仕込まれた形跡は無く、その変わりに生命の溢れる姿が顔を見せる。

そこにいたのは茶色い体躯に目も鼻もない顔を突き出しながら真っ赤な口を開ける化物だった。

嫌な叫び声と体液を撒き散らしながら飛び出してきた化物の体を、レイドは真つ一つに引き裂き、更に剣を振るい続ける。

敵は一匹だけではない。

「走つて！」

地鳴りが地割れへ変貌し、レイド達を生き埋めこしよつと右壁が崩落の兆しを見せる。

後方からは大口を開けただけで人一人は飲み込めそうな化物が牙を剥き出しにして襲い掛かってきていた。

逃げ道は前方のみ。

とにかく走るよつヴィロに立えながら、レイドは化物達をあしらいつつ、バックステップの要領で後ずさる。

「ええい」

次から次へと縦横無尽に壁を掘り起こしていく化物達に苛立ちを声にしながら、レイドは眼前まで迫ってきていた岩の一いつを両断した。

「レイドさん。道が……」

ヴィロの悲鳴にレイドは背後を振り返る。

そこには行き止まりを示す茶色の壁が立ち塞がっていた。

右も左も無く、ただただ壁だけが迫つてきている。

「伏せて」

振り返つてしま、レイドは回転斬りで迫り来る化物を切り裂きなが

ら跳躍。

田の前に立ち塞がる壁を一刀両断する。

(予想通り)

推測が外れていたらどうしようかと迷つたが躊躇わずに衝撃を加えて正解だった。

田の前に立ち塞がっていた壁は偽者。^{フサイク} 建前で作られただけの柔らかい土だ。周囲とは似ても似つかない土色のおかげで判別がついた。

そのまま勢いに任せて、ヴィロを担ぎ上げ、レイドは一直線に崩れしていく壁を突き抜けていく。

今までの廊下状とは打って変わって、大広間のような大空洞がレイド達の眼前に広がった。

「なー?」

その大広間のような大空洞の中央に生えるようにして立っている存在にレイドは絶句した。隣でヴィロが息を呑む音が聞こえる。

紫色に発光する四メートルは越すであろう高さのクリスタルがそこにはあった。

体表から靄のように放出されている魔力が妖艶さを引き立たせている。その強大な魔力に化物達は近付けないのか大空洞の外側で唸りをあげて怯えている。

「まさか、これが魔鉱石^{マーナス}」

ヴィロが存在を肯定し、イリアが存在を否定していた鉱石の名前

が、レイドの脳裏を過つた。

「まさか、これが魔鉱石」

クリスタルの外周を周るよつて移動しながらレイドは咳いた。

そして気付いてしまつ。

岩壁は全て風化しているといつのに傷一つ無い魔鉱石に粘着質の赤黒い何かがこびり付いている事に。見るだけで嗚咽感を加速させるものがあることに。

「流石に、あの程度の魔導獸じや切り抜けられてしまつか」

背後から聞こえてきた声にレイドは振り返る。

フードとローブで全身を包み隠した、あからさまに痩じて青年が立っていた。

「あなたが、やつたんですね？」

レイドは、ローブ姿の青年にサーベルを向けながら、魔鉱石へ体をもたれかけながら意識を失っている猪獣人を目線で示した。粘着質の赤黒い何かの正体は、この猪獣人の血液だらつ。

「そいつの血だけじゃ足りないらしい」

「その言葉。面白という事で良いんですね？」

「ああ、そう解釈してくれて構わない」

臨戦態勢に入ったのか、ローブ姿の男が右手に携えていた錫杖を頭上に掲げた。

先端部分から三叉に分かれた刃が出現し、錫杖が三叉槍へと変形する。

何の為に、ローブ姿の男がここにいるのかは分からない。だが、敵である事は間違いないだろ？

「ヴィロ教授。僕があいつを引きつけますから、魔鉱石の裏に周つて隠れていてください」

ローブ姿の男に気付かれぬよう、小さな声で早口にまくし立てながらレイドは剣を振り上げて突撃した。

火花が散る。

金属と金属がぶつかり合う振動が、腕から全身を伝つて響いていく。

「プルチネイラが世話になつたな」

「貴様ツ！ プルチネイラの仲間か」

フードに隠された顔が、一人の間に吹き荒れた衝撃によつて露わになつた。

銀髪のショートに整つた顔立ち。予想よりも若い顔つきはレイドと同じ年ぐらいいに思える。

「魔人と竜人のハーフ。噂には聞いていたが、本当にこんな混ざりものが実在したのか」

サーベルに加える力をあげると、力勝負では勝てないと悟ったのか、ロープ姿の男が三叉槍を盾に三歩ほど距離を取つた。

しかし、レイドは距離を取ろうとするロープ姿の男に暇をとえず畳み掛ける。

余裕の顔つきをしていたロープ姿の男はレイドの猛攻に対し、舌打ち交じりに罵言を放つた。

「中々どうして強いな。お前のような化物、プルチネイラが気に入るのも納得だ」

氣にも留めずに、レイドは防御の緩んだ脇腹へと蹴りを入れる。

「なつー!？」

レイドの蹴りを、ロープ姿の男は空いた左手で受け止めながら三叉槍を突き出した。虚をつかれたレイドの顔面に刃が迫る。

それを、サーベルで受け止めるが、今度は左足が突き上げられた。レイドの猛攻によつて、二人の間合いは極限まで詰められている。死角から襲い掛かってきた膝蹴りにレイドは自分の体が浮くのを感じた。

視界が暗転し、背後に聳えたつ魔鉱石に背中を打ちながらレイドは悶えた。

「おいおい。この程度か？」

嘲笑しながらロープ姿の男が走つてくるのが見える。

レイドは身の危険を感じて咄嗟に頭を伏せた。

三叉槍が頭上を掠めて魔鉱石へ衝突する。魔鉱石には傷一つつかず、そのあまりの硬さに、ロープ姿の男の方がよろめいた。

チャンスを逃さず、レイドはその体に掴みかかりながら頭突きを加える。

勢いに任せて押し倒しながら、レイドはサーベルをロープ姿の男の首に突き付けた。

「お前達の目的は何だ？ 魔鉱石を使って何をしようとしている？」

「答えると愚うか？」

「答えると死ぬだけだ」

ロープ姿の男の首は細かつた。この程度なら、いつでも首をへし折れる。

しかし未だ、余裕の表情を浮かべるロープ姿の男に面喰いながら、レイドは何かが込み上げてくるのを感じて口を塞いだ。

(まづい)

魔力中毒。

咄嗟に過ぎる四文字。

有害な毒素に満ち溢れた空間で、レイドの体は知らぬ間に漫食され悲鳴をあげていた。

視界が揺らぐ。ロープ姿の男を拘束していた力が入らなくなり、

「尋問するなら場所を選べ。素人が」

腹部に強烈な掌打を加えられ、レイドは地面を転がる。

喉元から鉄の味が溢れ出し、体が思うように動かない。魔力を体に浴び過ぎたせいではなく、ロープ姿の男が放つた掌打の力によつてだ。神経が麻痺したかのように脳の命令を体が無視する。

唯一、動かせた眼球を真上に向けると、三叉槍を振り下ろそうとするロープ姿の男がいた。

(動け)

心の中で願つても体は動いてはくれない。

「見つけたぞ。この竜泥棒があああああ！」

レイドが死を覚悟したその時だ。

女性的な雰囲気を感じさせない、男勝りな声が大空洞に木霊した。この声にレイドは聞き覚えがあった。

ビュウ、と突風が吹き荒れ、ロープ姿の男が横殴りに吹つ飛ばされしていく。

「そんな所で寝てんじゃねえぞ」

紫の鱗じんそうが特徴的な女竜人。レナが迅槍じんそうを背中に担ぎながら立っていた。

強引に道を切り開いてきたのか、突風が吹き荒れた方向には大穴が空いており、その中心でレナは不機嫌そうな表情を浮かべている。

「レナ。どうして君がここに」

麻痺していた体の神経が時間の経過と共に戻つてくる。

レイドは、ふらふらと立ち上がりながらレナの姿に目を凝つた。荒療治の後のような包帯が左手に巻かれており、火傷を負つたような跡が、あちこちに残つている。

「そこ」の竜泥棒にやられた

「竜泥棒？」

いまいち、状況が把握できない。レナはロープ姿の男を指差して、何やら怒りに似た感情を投げつけているように見える。

「ローラ・ペアッシュ。牙竜国の魔導師だった男だ。そして、魔導獸であるワイバーンを奪つて逃走した犯罪者だ！俺は、こいつの足取りを追つて聖都までやつてきた」

レナの怒号が響き渡る。戦局は変わった。

その頃、馬車で待機していたはずのイリアは山賊達の拠点の中を疾走していた。

「待ちなさい！」

「黙れ。呼ばれてる」

理由は、今イリアの手の前を走っている少女にある。

華奢な体躯に東洋の出で立ちをした少女。コトネだ。

イリアの静止を、上の空といった様子で無視したコトネは、一度目だが様子がおかしい。まるで、何かに憑りつかれているかのように何処かへ向かっている。その手には、お札が握られており、紫色の電流のようなものを奔らせながら光っていた。

その背を追いながらイリアは、

「ああもう。邪魔しないで！」

良く撓るロッドで山賊の腹を横殴りにして、コトネの背中を追いかける。

「コトネの足は、そこまで速くない。一方、イリアはそれなりに鍛えられた脚力を活かして走っているが、一向に追いつける気配がない。矛盾している。

「の矛盾には明確な訳がある、とイリアは推測していた。

恐らく、あの禍々しく映る発光を引き起こしているお札に原因があるのだろう。

「その御札を捨てて、ここちに来なさい！」

「駄目」

頑なにイリアを拒むコトネはお札を離さない。山道だというのに片手を塞いでまで持っているのだ。

あれが大切なものであることは誰が見ても明白だった。

（困ったわね。幸いにも怪我していないから良いんだけど……あれ？）

イリアは違和感に気付く。

誰一人としてコトネに危害を加えていない。山賊達は彼女の姿を見ても一拍置いてから、はっと我に返ったように、コトネの背中を追っているイリアへと攻撃を仕掛けてくるのだ。

（なるほど。不幸中の幸いか）

結果的に御札はコトネを守っているのだろう。

目的は不明だが、少なくとも山賊達からコトネを遠ざけているのかもしない。だがそうなると、イリアにもコトネから遠ざかれよう的な細工を施されているのか。もしも、予想が当たつているとすると何かと面倒だ。

もう一つしてこの内に、開けた遺跡のような場所までコトネは走つて行つてしまつ。

ヤード、ようやく止まつてくれた。もう、進める道が無くなつたとも言える。今、コトネが立つてゐる場所は高台のようになつて、眼前には横幅で人間一人は納まるであろう大きさの碑石ひせきが佇んでいた。

「見つけた……」

碑石は黒曜石で造られてゐるようで表面を削つて描いたのか、黒い鳥の羽ばたく姿が描かれている。

更にその表面には、コトネの持つ御札と同じ紫色の発光が起きてゐる。紫色の発光は削つて描かれた黒い鳥のラインに沿つて流れるように発生しており、まるで、この碑石に描かれた黒い鳥が生きているように見えた。

しかし、それよりも目を引くのは碑石と連結するように造られた足場である。足場には液体を流すことを目的にしたのか幾つかに枝分かれした溝が線を引いており、地中に向かつて伸びている。

この碑石が足場とワンセットであるなら、「」字型の造形物と例えて良いだろう。

(でも、これじゃまるで……)

何かの祭壇のようだ。碑石が象徴的なものであるとするならば、場は何かを捧げる場所に思える。直観的に嫌な予感を感じたイリアはコトネを引き寄せるべく走った。

だが、やはりコトネには近付けない。絶対的な力場が、同じ極を含ませた磁石のようにイリアを少女の元から引き離す。

見えない風のよつなものに弾かれながら、イリアは碑石に靄が掛かっているのを見た。

妖氣、靈氣、邪氣、瘴氣。

ネガティブな二文字ばかりが頭に浮かび、咄嗟に叫んだ。

「その子から離れなさい！」

手を伸ばす。手が届かない。手を伸ばしたら伸ばしただけ跳ね除けられる。

「離れなさいって言つてんのよーー！」

イリアの発した怒氣と焦燥が魔力に変換される。宙に舞った自身の取り分（魔力）で魔法陣を描きながらイリアは強引に一步、更に一步とコトネに詰め寄つていぐ。

後、少しだ。後、少しで、あの禍々しい妖氣から少女を助けることが出来る。

「……彼は怒つてゐる。自分の地を荒らされた事に。力場の流れを変えられた事に。私達がいる事にも」

冷静とも取れる淡々とした声でコトネが言った。

「息苦しいの？ 今、そこから出してあげる」

あううとか、コトネは得体の知れない碑石の黒い鳥に手を触れて優しい声色で、子供を慰めるように囁いた。

瞬間、イリアの視界は遮られる。黒い羽根が万遍なく眼前に映る光景を塗り潰したからだ。何十何百何千と敷き詰めるかのように舞っている、黒い羽根の大群を払い除けながら腕を前に出す。

「駄目！」

イリアは全力で叫んだが、ぶわさ！ と、鳥が羽ばたくような音によつて虚しくかき消される。黒い羽根の横断幕が羽ばたく音と同時に四方八方へ飛散した。遮られていた視界の先にいたものを見てイリアは絶句し、ある一言を口にする。

「魔導獸……？」

【蒼の巻】 魔鉱石 15 混身の意思をぶつけよ

魔導師、魔導獣。

知らない言葉が次々と飛び交い、レイドの顔は困惑の色に染まる。イリアなら何か知っているかもしだれないが、肝心のイリアが今はいない。

とりあえず、牙竜国にとってローブ姿の男、ロード・ピアッヂュは国外逃亡した犯罪者であるといつ事は理解できた。

「全く、しぶとい女だな」

いつの間にか、突風に吹き飛ばされた箸のロードが立ち上がり、先程とは似ても似つかぬ感情的な目つきでレナを睨んでいた。

レナも負けず劣らず、睨み返しながら迅槍を肩の上で数回、揺らした。

「リベンジマッチを行ひにじゃねーか。竜泥棒」

迅槍を振り上げて、是非を問つ暇も『えずに、レナが突風の塊を飛ばす。

ロードは、それを難なくかわして、レナの元へと駆け走っていく。

加勢するべきか？

レイドは暫し悩んでから、ヴィロの元へ向かう事にした。猪獣人

の安否も気になる。

「ヴィロ教授。何か分かりましたか？」

魔鉱石を手袋越しに触りながら難しい顔をしているヴィロにレイドは声をかける。しかし、相当、熱中しているのかレイドの声はヴィロの耳に届かなかつた。

仕方がないと、レイドは猪獣人の安否を確認する。

死んではない。だが、植物状態のように意識を失つたまま目覚める気配もない。

「……」

思わず、レイドは息を呑む。猪獣人の体には生々しい切り傷が刻まれているが、それらは応急措置で塞がれており血も止まっている。けれど、このままでは、いつ死んでもおかしくない。

なのに、レイドには目の前の人間を救う手立てが思いつかない。無力さを痛感しながら歯噛みすることしか出来ない。

「に…る」

氣を失っていたはずの猪獣人が口を開いた。

微かに零れた、その声のニュアンスにレイドは本能的に武器を構える。

猪獣人が腰のベルトに垂れ下げていた苗刀を手に取つて、レイド

へと襲い掛かってきた。幾度となく使い続けたサーベルが苗刀の重量に圧されて軋み出す。

「クツ！」

先程まで死にかけていたとは思えない力にレイドは立ち向かう。「なるほど。人形というのは汎用性が高いな。瀕死の人間を無理やりに突き動かすことが出来るのは……」

ロードの言葉に、レイドはサーべル越しに映る猪獣人を睨む。これも、ブルチネイラの仕業だと言うのか。

「てめえの相手はこの俺だ。よそ見してんじゃねえ」

豪快に振り回される迅槍を、やつ過ごしながらロードは尚も続ける。

「しかし、魔鉱石の力は死人を蘇らせる事さえ容易に実現してしまうのか」

「よそ見してんじゃねえって言つてんだろ？が！」

豪！ と暴風が吹き荒れ、ロードは田の前の相手に集中し出す。

（死人を蘇らせる？ つまり、この人は既に……）

死んでいる。

では、この力の源は一体どこから来ているというのか。猪獣人と

鍔迫り合い（つばせりあい）を繰り広げながらレイドは思索する。

「これも、魔力の為せる業だと言つのか。」

「あなたは自分が何をしているか分かっているのですか？」

レイドは、ある一つの可能性に気付き猪獣人へ問いかけた。

「俺は……俺は……ここに……いる……奴ら……助ける……」

一語一句に間を置いた喋り方。だが、しかし猪獣人には理性が残つてゐるようだ。いや、残つてゐるのではなく蘇つたと言つた方が正しいか。レイドは自分の予想が当たったことに内心、驚きながら会話を紡ぐ。

「僕が、僕達が、ここにいる人達を救い出してみせます。だから、お願ひだから剣を引いて」

徐々に後ろへと後退させられる、レイドの苦し紛れの要求に一瞬だけ猪獣人の苗刀に加える力が弱まつた。すかさずレイドは押し返すが、鍔迫り合いは拮抗を続ける。

「嘘だ。お前達は……俺達を……追い詰めて」

レイドは目を疑つた。

猪獣人の理性が更に戻つてきてゐる。口調と口数がそれを証明するかのように人間味を帯びていく。

「お前達……聖都の連中は……俺達を何処まで……追い詰めりや氣

が済むんだ！」

人間味を増すと同時に、苗刀に加わる力も増していく。

「お前達のせいで、俺達が……どんなに理不尽な労働を強いられて、きたと思ってやがる！」

ぎらつく眼光に生気が宿り、憎しみの色に染まつていく。

「お前達をえいなけりや、聖都の腐った正義感が無ければ俺達はまだ……」

「いい加減にしてください」

重みを載せた言葉をレイドは叫んだ。

「その言葉を、同じ言葉を！　あなた達が攫つた人達にも言えますか？」

圧力の増した苗刀に呼応して、サーベルに加える力を高めながらレイドは猪獣人の顔を真つ直ぐに見据えた。

目を逸らす訳にはいかない。悠々と当たり前のようになると、されどいた聖都の平和が、彼ら山賊達の人生を食い潰していくことに対する事実を受け止めながら、猪獣人の憤りに応える。

「どうして、どうして、こんな非道なことを仕出かしてまで、あなた達は聖都に助けを求めようと見えなかつた！」

聖都が、彼らをぶん底に突き落としたのは今ではなく過去の事で

はないか。

「ふやけんな！ 求めたところで救われない。どうせ待受けているのは牢屋の中だ」

猪獣人達は後戻りが出来ない所まで來ていたのだろう。

社会に助けを求めたところで、正義という名の非条理な鉄槌を下される。犯罪者という印を捺されるぐらいなら墮ちる所まで墮ちた方がマジ。そして、そんな荒んだ感情をブルチネイラやローデに利用された。

「ふやけているのは、どうちだ

胸に込み上げてくる想いをレイドは吐き出す。

「罪は結局、どこまで行つても罪なんだ。償つ氣を失つたあなた達に罰の先にある解放なんて、いつまで経つてもやつてこない！」

自分で言つていて何て非情な言葉だろ？と思つ。結局の所、彼らを不幸の淵に貶めたのが聖都であることに変わりはない。

聖王国の政治の殆どを握つてるのは聖都だ。だからこそ、聖都是平和でなければならない。平和というイメージを植え付けなければならぬ。

つまり、聖都が平和の象徴的存在とされているだけで、別に聖王国全体が平和な訳では無いのだ。あくまでも治安が良い国とされているだけで、聖王国にも亜人戦争の残した傷跡が至る所に蔓延つてゐる。

その結果、欲に目が眩み、ろくに地質調査もせずに鉱石を掘らせ続けた政府のせいだ、元鉱夫だった山賊達は運悪く、魔鉱石を掘り当ててしまつたのだろう。

充分、彼らは罰を受けたでは無いか？ 罪も無いといふのに充分すぎるほどの罰を強いられていたではないか。これ以上、彼らの心と体を痛めつける必要なんて無いじゃないか。

——だが、だからこそ、レイドは疑念を抱かない。これ以上、彼らが罪を重ね続ける結末だけは絶対に食い止めてみせる。

「ふ……ぞけるなああああああ！」

当然の怒りが全力となつてレイドに襲い掛かつた。

それでも、レイドはたじろがず、じつと猪獣人の顔面を見据える。

「ハハツ、ハツ。全身に力が漲つてくるぜ。こんなすげえ力があるなら聖都だって潰せる。聖王国をもつと良い国に変えられる。手始めにお前を血祭りにあげてやるぜ」

「……」

最早、言葉はいらなかつた。

ただ握つてゐる剣に全てを込めて、ぶつければ良い。

「どうした？ さつきまでの軽口は何處いきやがつた？ 悔しかつ

たら返してみるよオ！」

レイドのサーベルと、猪獣人の苗刀がこれまでに無いほどの力を発して衝突した。

許容量を超えた金属が砕け散る。サーベルが鈍い音を立てて折れたのだ。しかし、それはレイドの持つ武器に限った話ではない。

猪獣人の持っていた苗刀がサーベルと共に粉碎し、重心を失った二人の体が詰め寄せられる。

一度、全部壊すべきなのだ。こうして力と力が重なり合い壊れてしまつた剣のように、聖王国の闇によつて犠牲になつた山賊と、その山賊達を見過ごし続けた聖都との関係を。

「確かに聖王国は、あなた達に不幸な道を歩ませ、それを糧に造られた聖都の豊かさは皮肉に映つたしれない。でも——」

後戻りの出来ない道筋なんて壊してリセットすればいい。何度だつてやり直せばいい。その為の手助けなら、それが聖王国の為にも繋がるというのなら、レイドは喜んで協力する。

「まだ、お前達には、やり直せるチャンスがある。そのチャンスが潰えないように。これ以上、聖都が愚を犯さない為にも、」

双方の武器が壊されることを見越して、体重を載せていた左拳を猪獣人の顔面へと突き出す。

「僕達が腐った正義を変えてみせる」

レイドは全力を込めた拳を猪獣人に浴びせながら宣言する。どれだけ無責任な宣言でも、誰かが立ち上がらなければ始まらない。

今ここに、騎士団長であるヴァッシュがいれば同じ台詞を吐いていたかもしれない、レイドは心中で想像した。

「亞人戦争の名残を受けて設立されたのがハイデルヴェルグ騎士団だ。僕達が行っているのは治安維持だけじゃない。維持すべき治安に穴があれば、それを修正する為に動く」

全体重を載せた拳によつて、背に聳えたつ魔鉱石の元まで突き飛ばされた猪獣人は、カハッコホッと血反吐を吐きながら言葉を発する。

「どいつもこいつもおせえんだよ。お前みたいな奴が、もつと前からいたら……もっと早くに来てくれていたら」

今まで自分を支えていた歪んだ柱を壊された猪獣人は涙を流し、

「あんな奴らに手を貸しちまう事も無かつたつてのに……自分のツケを払う事すら出来ねえなんて……俺だつて分かつてたよ。昔の出来事を今の聖都のせいにしちまつなんて……結局、ハツヽヽたりでしか無い事ぐらい……、」

「畜生。その減らず口が嘘にならないように、せいぜい頑張りやがれ」

一度目の死を迎えた。

元々、限界を超えていたであろう体が活動を止めたのだ。

「言わねなくとも、そのつまつです」

猪獣人が、レイドの答えに満足したかのように首を下げた。それが意識的に行われたものなのかはレイドには分からぬ。

ただ、最期に猪獸人は笑つたような表情を浮かべた気がする。

その最期を見届けながら、レイドは軽く黙祷を捧げ、

翼を全開まで広げながら、声がしゃがれるまで頭上高くへと怒鳴を放つた。

死者を蘇らせられるほどの力を拳一つで沈められれば苦労しない。
猪獣人の戦意喪失と共に裏で糸を引いていた人間が止めを刺したのだ。

『フフフ。柄にもなく熱く語つちゃつて随分と立腹みたいだね?』
やはりいた。山賊達にことん墮ちる道標みちしるべを示し、操っていた悪魔が何処からともなくレイドの叫びに反応する。

プルチネイラだ。

「隠れていないで出て来い」

『あのおさる。ここで僕に勝ち目が無いって分かっているでしょ？ どうして、わざわざ挑発するのか分からぬ』

プルチネイラの呆れた声と共に一筋の閃光が降り注ぎ、レイドの周囲を覆つように無数の穴が空いた。

戦力差は歴然。

だが、レイドは鬼の形相を崩さず見えない敵に向けて敵意を注ぎ続ける。

『良い目になつたねえ』

霸氣とは違う、禍々しい狂氣のようなものが眼圧となつてレイドに襲い掛かった。

威嚇にも似たそれは、獲物の気が緩む隙を伺う蛇のように食らいついてくる。ただ、プルチネイラが意識を注いでいるだけなのに、金縛りに合つたかのようにレイドは全身が痺れるのを感じながら尚も標的から目を逸らせない。逸らせない。逸らして堪るものか。

「何やつてんだ、反則野郎！　てめえが攻めずにどうするー？」

レナの責める声が聞こえる。いや、悲鳴に近い。

三叉槍によつて絡め取られた迅槍が、弧を描いてロードの足元に落ちたからだ。虚しい反響音が勝敗の審判を決するかのように大空洞に波紋を呼ぶ。

膝について片手を瞑つたレナの首元に三叉槍が差し向けられる。

高台に旋風が吹き荒れる。

「バサリ、とこつ音も無く、羽根とは違つものが肩にかかるてイリアは眉をひそめた。

（髪の毛？）

それは、あまりにも重量が無さ過ぎて落ちてきたという実感をイリアに与えない。肩にかかつた黒髪を見て一瞬、自分のものかと目を疑つたが違う。

「これは別の二ングンの髪の毛だ。」

「凄いよなあ。そんだけで俺つちとの契約を終えちまうんだからよ」
軽快に放たれた声にイリアは背中に携えていたロッドを両手に持つて構える。

「その子を離しなさい。」

「別に離しても構わないけど、怪我させまいがっ。」

返ってきた言葉にイリアは歯軋りする。

声の主は地面から頭三個分ほど浮いていた。上と下にゆっくつと浮上と降下を繰り返すその姿は、ふわりと浮いているといった表現が

相応しい。

「御札に封印されていた妖怪って所かしら。何が目的?」

强行突破で殴りに行きたい衝動を抑えながら、イリアは相手の目的を窺う。

「ん~、まあ色々な盟約に縛られるのが嫌になつたつか、そんな感じ?」

「ふざけんのも大概にしなさい」

緊張感すら感じさせない飄々とした態度と曖昧な理由にイリアは顔を歪ませた。

「誤解されてるのは面倒だな。ただ、誤解を解くのはその数倍めんどい」

声の主は心底、面倒くさそうにイリアへ目を向ける。

その姿は、一見すれば獣人のそれと変わらない外見だった。

鳥のような細い脚をもちながら人間の骨格も有した五本足。無数の羽根に覆われた一枚の翼羽クチバシと嘴が特徴的な頭頂部。全身にはビッシリと黒い羽毛が纏わりついている。

衣服は東方の出で立ちで修道着のようなものの上に何重にも羽織られた着物を着込んでいる。更に、首元には髑髏の頭を紐で通した悪趣味というよりかは不気味な装飾品を呑していた。

他にも細かな装飾品をじゅらつかせていたが、それよりも特徴的なのは、今は鞘に納められているが肩にぶら下げた刀と、広げれば人一人は隠し切れるであろう大きな扇子を着物の帯の部分に引っ掛けている事だろう。

「あなた。魔導獸なの？」

慎重な声色で問いかける。

この世には魔人以外にも魔力を扱える存在がいる。

魔力に耐性を持ち、体内に溜め込んだ魔力を利用できる動物達、『魔導獸』だ。その数は非常に少なく、動物が魔導獸となる経過は不明とされているが、大半は魔力に強い影響を受けて突然変異で生まれるものらしい。

「そういう風に呼ばれてるなあ。正確にはこここの地主なんだけどよ

力加減を間違えたら羽毛」と引き千切つてしまいそうな鋭い鉤爪で顔を掻きながら、鴉天狗は返す。

敵意は無いのだろうか？ 野太い声だが非常にのんびりとした口調だ。

「守護獸とでも呼べば良いのかしら？」

「まあ、そんな感じ」

適当に言つてのけた鴉天狗にイリアは、

「嘘偽り。こここの地主である守護獣なら、今の現状に呑気に構えるなんて有り得ない」

はつきりと矛盾を突きつけて言い返す。

守護獣とは言葉通り、何かを守護する獣である。そして今、こここの地主と名乗った鴉天狗は所有者として、この山岳地帯を守護すべき存在ではなかろうか。

「うんにゃ。何を言つてんのかサッパリなんだけど、俺っちは眠つてる間に何があつたってんだ？」

「は？」

初めて、怪訝な表情を浮かべた鴉天狗にイリアも釣られて怪訝な顔をする。

鴉天狗は、今ここで起きている事態を知らないのだろうか？ 魔力の異常発生。山賊とその裏に潜む何か。その他諸々、あらゆる問題も騒ぎも知らないといつのか？

「俺っちが起きたのはついたつき。無意識下の内に契約者を助けてたみたいだが……意識を取り戻したのはついたつきなんだよな」

田を細めて鴉天狗は遠くを眺める。景色を眺めるには丁度良い高台だ。

「だから、何でここが荒れ果ててんのかそっぽり。村も無くなっちまってるしょ」

現状を把握したのか鴉天狗の表情が変わる。

「イリ亞で長話をしても仕方がないわね。簡単な確認だけさせて」

「何だよ？」

「あなたは敵？味方？その子^{コノコノ}に危害を加えるつもりは一切無いの？」

「俺っちは今の契約者は、この娘だよ。危害は加えないし、むしろ最優先に守護するべき対象。そして、土地を汚す奴等は俺っちは敵で土地を育む奴等は俺っちの味方」

鴉天狗の言葉に引っ掛かる部分が幾つかあったが、イリアはそれらを呑み込む。

「ねえ、この土地を守りたいなら私に協力して」

「つまり言い換えば、俺っ中に協力してくれる訳？」

「そうとも言える。時間が惜しいから、さつさと用件だけ話すわ」

得体の知れぬ相手を前にイリアは交渉を開始した。

【蒼の巻】 魔鉱石 17 秘策

膝をついて片手を瞑つたレナの首元に三叉槍が差し向けられる。

あのレナでさえ、半ば諦めたように、死を覚悟した田で冷たい顔をしたロードを見上げている。

「あつた！ これで魔力供給だけを行える！」

緊迫した場の状況を変えたのは意外な人物からの喜色に溢れた叫びだった。

黒々しい紫色に発光していた魔鉱石が突然、周囲の魔力を吸い上げ出し、一帯を覆い尽くしていた魔力の源が絶たれた。

ヴィロ教授は裏に隠れていた訳ではなく、魔鉱石についてあれこれ調べを入れていたのだろう。そして、どうやってかは分からないが魔鉱石の循環機能を停止する方法を見つけたようだ。

「隙あり！」

「チツ」

ロードの集中が魔鉱石の異変へ傾いたことにより、レナは速度の鈍った三叉槍を屈んでやり過ごし、力任せに片手で三叉槍を掴み取る。更に空いた片手で地面に落ちた迅槍を掬い取り、形成は逆転した。

「俺の勝ちだ」

勝ち誇った声をあげながら、レナがロードの首元に迅槍を突き付ける。

「……馬鹿か、お前達は」

ロードは表情に陰りを見せながら呟いた。

「ああ？ 良く聞こえねえなあ」

「ほり、やつて来るぞ」

嘲笑と共に吐き捨てられた言葉はレナには届かなかつた。

大空洞の外周。真っ暗闇の中でも唸りをあげていた化物達が襲ってきたのだ。レイドはヴィロを抱えて跳躍。急襲から逃れる。

『僕はあくまでも舞台裏。直接、相手をするのは僕じゃなくてこいつらさ』

跳躍するレイドに向けて、フルチネイラのテレパシーのような言葉が脳に響いてきた。

放出が止まつても残つた魔力が今も漂つている。それを利用しているのだろう。

『どうやって魔鉱石を止めたかは知らないけど、結果的に魔鉱石を嫌がつて近付いてこなかつた連中をわざわざ引き入れちゃつた訳だ』

プルチネイラの言葉にレイドは耳を貸さない。

騎士道精神・熊の型・爆胴掌

前方で大口を開けた化物に突っ込む形で、レイドは掌を化物に押し当てた。

龍脈によつて凝縮した風を、魔力で掌に収めながら放つたのだ。

頭頂部にクレーターのような穴が開き、化物は奇声をあげながら落下していく。その姿には目も暮れずにレイドは他の化物の相手に専念した。

「クッ、剣があれば」

サーべルは猪獣人との戦いで壊してしまった。ストックは持ち合わせていない。

落下する感覚を肌で感じながら、レイドは真下に待つている化物達に背筋が凍る。レイドの不完全な翼では、これ以上の飛行は困難。

万事休すだ。

「（食欲並びにそれに準ずる行動を廃棄）」

大空洞に男性とも女性とも判別のつかない機械音声が響いた。

「…………（優先順位AをBに変更。生命活動の維持の為、休眠に移行せよ）」

大口を開いていた化物達が突然、静まり出し、地中に体を潜らせて立ち去っていく。

レイドは出来るだけ凹凸の少ない足場に降り立ちながら、声の主を探した。

「ロアー。」

「やれやれ。ギリギリ間に合つたか」

全身をローブで包み隠した上で更にマスクで顔を隠している人物。ロアだ。

どうやら、彼は狼以外にも命令信号を送ることが出来るらしい。レイドには何を言つっていたのかサッパリなので詳しくは分からないが……、これで完全に形勢は覆された。

「魔導獸を操つただとー!?」

ロードが少し驚いたようにしかめつ面をした。三叉槍を振り回して、レナと距離を取りながら叫ぶ。

「お前は何者だ！」

声を荒げながら、ロードはロアに対しても叫ぶ。

「単なる用心棒さ」

機械越しでも分かる、何処か馬鹿にした口調でロアは返した。その姿に、ロードは今までの余裕が嘘のように全身を小刻みに震わせながら眉間に皺を寄せる。崩れた顔の上で銀髪が揺れる。

「Jの人数相手にまだ戦いますか？」

プルチネイラの存在にも気を配りながら、レイドは適当に地面に落ちていた武器を手に取つて構えた。

古ぼけた刀である。どうやら、地面には幾つもの刀剣類が隠されているらしい。偶然、土を被つて隠されていたのか意図的に隠されていたものなのかは不明だが、古ぼけて錆びた刃は年代物のような気がする。

レイドの言葉にロードは三叉槍を擡げもたて魔法を放つ。先端部分から放たれた雷撃がレナを後退させた。

「人数に差がある？ 笑わせてくれる」

またもや、地鳴りが響いてきた。しかし、今度は下からではなく上から。

「ヴュイン！」

ロードの叫びと同時、天井が崩壊し、強引に何かが降り立つてきた。コウモリのような翼に鋭利な爪を頂く一本足。研ぎ澄ました眼光に大きな尻尾と、その大きさに対応した大きな体躯。

飛竜だ。
ワイヤー

爪を立てて強引に天井へ衝撃を加えたのか。崩された土砂が降り注ぎ、粉塵が視界を遮る。

「クッ……」

これがレナの言つていた魔導獣なのだろうか。レイドは開けてきた視界に目を凝らした。

天井が崩れたものの不幸中の幸いか。ヴィロもロアも無事だ。レナもきっと無事だろう。暗闇の中にあつた大空洞に光が差し込んでくる。

「さっきまでの威勢の良さは何処へ行つた？」

ロードが、体を低くしたヴェインの背中に乗り上がる。

魔人でありながら物理的な正面対決でレナと張り合えていたのは、魔力によって肉体を強化していったからだろう。それが無くなつた今、ロードは不利な立場にいる筈だが、^{ワイヤー}飛竜の存在が遙かに大きい。

「てめえ、その飛竜をこいつに寄越しやがれ」

「断る。ヴェインは牙竜国の所有物ではない」

ヴェインといつのは飛竜の名前だろつか？

むんず、と長い首をあげながら飛竜が口を大きく開ける。口の中が明滅し、ガス状のブレスが吐き出される。

赤でも青でもなく、黒色をした炎がレイド達を襲った。どうこう原理か不明だが、物質そのものを焼いていく炎は足場を削るよう燃え上がっていく。

(魔力?)

レイドは、飛竜から放たれたブレスが引き起こした現象に対して違和感を覚えた。

「レナ、一旦離れろ!」

尚も攻めに徹しようとするとレナに離れるよい伝えてから、レイドは地面を蹴って背後へ移動する。

先程まで、レイドが居た場所に火の弾が直撃し、被弾した周囲を真っ黒に焦がして、燃やしていく。

後退したレイドだが、手に持っていた刀の柄の部分までが黒く変色していた。火の弾を避けた時、火花が燃え移ったのだろう。

「うわっ!?」

まるで毒が侵食するかのように溶解していく刃に、ギョッとしてレイドは遠くへ投げ飛ばした。

みると、刃は形状を失い、黒煙となつて宙に散漫する。

「これは魔力を直接、叩き込んでいるのでしょうか?」

ヴィロが脂汗を滲ませながら推測の言葉を唱える。

「んなこたあ、とつぐのとうに分かつてんだよ。ありや魔導獸だ」

忌々しそうに言い放つレナに、背後で静かに飛竜を見上げていたロアが頷いた。

「魔導獸。突然変異で魔力に適応した肉体を持つ事に成功した生き物達の事だが、あれは別格だな」

一本足で飛び上がった飛竜は邪魔者を薙ぎ払うようにブレスを吐く。

真っ黒な炎柱が数十本とあがり、高熱の壁を作り出す。プルチネイラの人形が使っていた炎の鞭と特性は似ているように思えるが、こちらの方が数段厄介な気がする。

炎熱だの、酸素を吸い上げるだの、そういうた概念を抜きにして純粹に魔力の柄が違う。触れただけで火傷と同時に魔力が全身を毒してしまいそうだ。

その上、折角、魔鉱石が吸い取つてくれた魔力が再度、周囲にばら撒かれてしまった。

「……あの炎。厄介たらありやしねえ」

忌々しそうに語るレナは包帯の巻かれた腕とは別の腕を動かして、迅槍を威嚇するよつに振り回す。

竜人は自然治癒力においては他種族に群を抜いている。

例えば、レイドは前日から戦い続けだらうと倒れていないし、次の戦いに疲労を残していない。

となれば、竜人一筋の血を引いているレナの治癒力はレイド以上のものであり、火傷程度なら一晩休めば治るものだが……。

炎に含まれた魔力が治癒を妨害しているのだろう。刺さった相手の体から鎌^{ヤリ}が簡単に引き抜けないようになつていてると同じようなもの。

いや、じわじわと追い詰めていく蛇の毒牙と言つてもいいだろう。

「だが、どうやって近付く？」

ロアが、手ぶらのレイドに自分の剣を渡しながら尋ねる。
護身用に使つているのか、自分よりも専門の人間に渡した方が良いと判断したのだろう。レイドは、ロアから手渡された剣の形状を眺める。どちらかと言えば切るより突く事を専門にしたエストックに似ているが、普段使つているサーベルと大差は無い。

「無理に近付こうとする危険です。逃げる手も——」

「ああ！？ 僕は逃げねーぞ。あいつ取り捕まえなきゃ 気が済まねえ」

最後まで言わせずに、レイドの言葉を遮ったレナは飛んできた火弾を避けながら続けて叫ぶ。

「畜生。これじゃ埒^坪が開かない。僕に提案があるから従いやがれ！」

喋つている間にも飛竜は勢いを止めない。

まるで、爆心地の跡のようになつていく穴ぼけだけの地面を駆け走り、レイドはレナに指示通りにヴィロを大空洞の端まで避難させてから、自分の持ち場へ移動する。

丁度、ロアが反対側に移動しているのが見えた。

そんな中、レナは大空洞の中央。飛竜がいる場所へと猪突猛進していく。

飛竜は背中に立つていてロードを守るかのように、近付いてくる相手を優先して狙ってきた。昂ぶっていた興奮を吐き出すかのように、口の中で轟々と燃え上がるブレスを放出する。

「それ待つてたんだよ！」

迅槍じんそうを地面に深々と突き刺しながら、レナが叫んだ。

叫ぶと同時に、彼女の顔面手前を中心にして空気の流れが操作される。無風の空間がレナによつて編み出され、空気が散漫しないように隔絶される。

そして、燃え上がつていた全ての炎と熱気がレナの口元へ吸い上げられ、竜巻状の気流が生み出される。

竜巻状の気流は熱に押されるように上昇し、飛竜に向けて放たれた。

更に、ロアが両手を前方に翳し、魔法らしきものを発動する。ロアの両手から突風が巻き起こり、砂埃を撒き散らしながら一つの形

となる。

それは龍だった。東方に伝わる大蛇のよ^{うな}長い体躯を持ち得た龍。それを模した風の奔流^{ほんりゅう}が飛竜とレナの間に割り込む。

交差するかのように三つの力がぶつかり合い、他のエネルギーを食い荒らす。

「魔法ってのは便利だよなア？ 好き勝手にやりたい放題、法則も変えたい放題だ。だがよ、魔法で引き起こした現象が”こっちの世界”の干渉を受けない訳じやないだろ？」

「こっちの世界、といつのは恐らく龍脈の事だらう。つまり、自然界の法則に足を突っ込んだ魔法が自然界の干渉を受けるのも当然という理論だ。

何となくだがレナが、これからやろうとしている。もしくは既に行動に移している作戦の大体が呑み込めた。

その光景をレイドは、じつと見つめる。今は一瞬の隙を見逃さず、自分の領分で自分の本領を際限なく發揮する機会を窺う時だ。

失敗は許されない。

【蒼の巻】 魔鉱石 第18話 火炎旋風

その光景をレイドは、じつと見つめる。今は一瞬の隙を見逃さず、自分の領分で自分の本領を際限なく發揮する機会を窺う時だ。

「ヴュイン、離れろ！」

ロードが叫ぶ。

変化が訪れた。

豪快な音をあげながら凝縮されて一点に集中した熱、気流、その他諸々が纏めて上昇する。三つの大きな力が衝突し、一つの奔流を作り出す。

「かえんせんぶう火炎旋風……」

大きさな名前だが、周囲の空気を吸うだけ吸つて局地的な上昇気流を発生させる、れつきとした自然現象である。

それをレナは龍脈の才を利用して再現してみせた。魔法で創られた風と炎さえも、龍脈の力で捻じ伏せ、「コントロールしたのだ。

お互いを食い合うように絡み合いながら、飛竜の黒い炎とロアの魔法の風。そしてレナの自然界の流れを集約した力が一体化し、上昇気流によって発生した大きな竜巻が轟々と唸りをあげる。

高みへと昇るかのように上昇していく力の動きは、既に一つの方

向へ標準を向けるように龍脈で調整されていた。

「真っ黒に焦げちまいな！」

最早、熱線に近い形となつた竜巻が頭上高くにいる飛竜の腹を突き抜けていく。

竜巻が周囲のもの全てを巻き込み焼却する音。飛竜が腹を貫かれた痛みに悲鳴をあげる音。そして、

「ヴュイン！－！」

今までのすまし顔が嘘のよつこ、顔を崩しながらロードが叫ぶ音が大空洞に木靈した。

竜巻に貫かれた飛竜の腹は、血の一滴すら流すことを許されない程に熱に溶かされ、焼け爛れていく。

その体に手を当てながら、ロードは必死に回復の魔法を唱える。

唱えることによって精神を安定させ、魔法を操作しようとしているのだろうが、その声は震えており余計に焦燥と不安を助長させていよいよ見えた。

今のロードの表情には悪人のそれを一切感じない。人間が誰しも抱くであろう純粋な悲劇の色で塗り固まっていた。

だが、そんな、ロードの姿を見ても尚、レイドの心は揺らがず、容赦も加減もしない。

「あなた達が何を企んでいるかなんて僕には理解が及ばない。だが、一つだけ言えることがある」

聖王國の陰を知り、今まで自分の信じてきた正義と、守ってきたものに対して疑問を覚えたレイドに、ある意味で道標を遺してくれた山賊達の為にも。これから聖王國の為にも――

「お前達の野望は絶対に阻止する」

野望といつのは少し脚色し過ぎかもしないと、レイドは心の中で思った。

だが、そこにどんな目的があれ、聖都に危害を加えるのならば、レイドはそれを全力で阻止する。その決意が構えた剣に並々と注がれていく。

騎士道精神・竜の型皆伝・大雪斬たいせつざん

独自で編み出してきた剣技の中でも優れた型をレイドは選んだ。シンプルかつ威力の高い一撃。

前へ一步踏み出し、剣を両手で構えながら更に勢いを込めて跳躍する。そして、無防備なロードに向けて剣を振り上げた。

「野望……か」

悲壮感を漂わせていたロードが突然、顔色を変えて嘲笑する。

渾身の力を振り絞るかのような勢いで、レイドに向けて三叉槍を突きつける。一切の保身を頭に入れていない、捨て身の構えだ。

レイドの剣とロードの三叉槍が衝突する。

「なつー？」

半ば倒れるよつこして三叉槍を押しこんでくる。全体重を乗せた予想外の攻撃にレイドは動搖した。このままだとロード自身も飛竜の背から落ちるのだから。

バチバチ、と鋭い音を立てながら三叉槍に加わる力が増す。

血眼でレイドを睨みつけロードは怒氣と信念の織り交ざった複雑な顔をしていた。

(ここつ……まさか)

「ヴュインー そのまま逃げろ！」

自分の事よりも、あの飛竜を逃がす事に全力をつくしている。ロードの叫びに、黒い飛竜が唸りをあげ、空高くへと翼をはためかせた。先ほどまで腹に穴が空いていたのが嘘のように、その体は治癒している。

予想外の出来事はそれだけでは終わらない。

「うわあつー？」

下から響いてきた複数の悲鳴をレイドは耳にした。ロードが放つたのだろう数千本にも枝分かれした雷撃が目にも止まらぬ早さで、レナ達を襲つたのだ。

だが、そちらに注意を向ける余裕は無い。

真上から降つてくる二叉槍の突きを躊し、ロードの懐を蹴り飛ばした。

鈍く大きな音が木靈し、ロードが壁に頭をぶつける。完全に意識を失ったロードに止めを刺そうと思つたが、このまま捕まえた方が色々と事情が聞けそうだ。

落ちていく感覚にレイドは神経を集中した。

咄嗟に着地の体勢に入る。出来るだけ衝撃を抑え、地面との衝突に備える。

大量の砂埃を巻き上げながら、レイドは地面に激突した。

手を盾にして頭を守る。幸運にも骨折はしなかつたが、言いようのない痛みが走る。

「チツ、逃がしたか」

いち早く立ち上がったレナが舌打ちを零した。気を失つて倒れているロードよりも、空を飛んで行つた飛竜の方が、彼女にとつて価値のあるものらしい。

しかし、飛竜が今からでは捕まえられないと判断すると、慎重にロードの体を背中に抱える。

「とにかく、今はここから離れるぞ」

ロアが、フラフラと立ち上がりながら言った。ロードが手当たり次第に上空から爆撃しているのか大きな爆発音と共に大空洞が崩壊してきている。

「のままでは全員、下敷きだ。

「ヴィロ教授。立てますか？」

腰を抜かしているヴィロを何とか立たせながら、レイドは痛みを堪えて走り出した。

崩壊していく大空洞に残された、猪獣人の亡骸を見捨てるという心の痛みを堪えながら――

その頃、山賊に取り押さえられた者達の多くが収容されている場所で一人の男が瞑想していた。薄暗い空間の中で、蠟燭の灯りだけを頼りに神経を集中させていた。

その男の名をラティール・フィールと言つ。

頭髪一つ無い代わりに全身を艶のある鱗に覆われた蜥蜴獣人だ。

自由国バーロスのギルドに所属する彼には一つの任務が課せられていた。ハロルド・ヴァリスターという少年の護衛である。が、護衛するどころか今こうして山賊達に捕えられてしまつてはいる。

だから、彼は瞑想に浸り、脱獄のチャンスを見計らつていた。まさか、助けが来るはずもないと考えていた彼は自力で脱出し、ハロルドを助けようとを考えていた。

「お勤め」苦労さん

まさか、と言つからには予想外の事態が発生したことを意味している。

看守の役目を果たしていた山賊が悲鳴一つあげずに倒れた。ガチヤリと錠前の音が聞こえ、ドアが開いた。

そこから差しのべられた手にラティールは僅かに眉をひそめる。警戒を解いてはいけない。常に最悪なケースを考えて行動せよ。

「お前、ば誰だ？」

久しぶりに発した声。しゃがれた声。何時振りかに放つた言葉は相手に伝わってくれたようだ。

「あなたがラティールさんかしら？ 私の名前はイリア・ホーネット。騎士団の人間よ」

視線をあげる。そこにはツインテールが特徴的な女性が立っていた。

「如何にも、俺がラティール・フィールだが……」

「まあ、積もる話は置いといて、ハロルド君は無事。さつさと逃げ出しましょう」

淡々と告げるイリアの背後には、鴉天狗と一人の少女がいた。

ラティールは、ハロルドの名前が出たことに内心ホッとしたしつつも警戒を更に強める。それほどに、ハロルドの存在は彼にとっていや、彼の所属するギルドにとつて大きい。

「何が目的だ？」

ラティールは疑いの目をイリアという女にかける。

「何も企んでなんかないわよ」

肩をすくめるイリアの脇で、鴉天狗が扇子を大きく広げた。廊下

に均等に並べられた牢屋が次々と解放されていく。どんな手を使つたのかはラティールには分からぬが、見渡せる限り全ての牢屋の扉が開かれる。

「さあ、別に残るつて言つなら放つておくけど、手伝つてくれるなら手伝つて」

囚人達……ただの一般人であろう者達が喜びを露にしながら外へ出る。これといって罪を背負つた人間はいそゞに無い。理不尽な理由を突き付けられ、ここに閉じ込められていたのだろう。

「俺は何をすればいい?」

その光景に感化されたラティールは準備運動程度に首を捻りながらイリアに言つた。

【蒼の巻】魔鉱石 第20話 戦争逃走

予想以上の堅物にイリアは内心、面食っていた。この手の人間は苦手なのだ。

しかし、説得できてしまえば、それ相応の信頼を置くことが出来る性格なのも確かである。

「この人数。流石に私だけじゃ動かせないのよね」

イリアは、如何にも義理堅そうな蜥蜴。赤色というよりかは赤土色の鱗に全身を覆われた巨漢。ハロルドが言った通りの外見と、ほぼ一致している蜥蜴獣人に言つ。

「だからその気があるなら、ちょっと手伝って」

座禅を組んで、何かを待ち侘びるかのように構えを取つて、ラティールがイリアの言葉に呼応して立ち上がった。

今まで座つていたといつのに巨漢と一目で分かるその身長は改めて見ても圧巻だ。

「了解しだ」

動搖すら滲み出ぬ、無駄のない一言。

並々溢れる存在感を振り翳しながら、ラティールは歓喜の渦に呑まれている囚人達を現実に引き戻した。

ラティールの存在感に場が静まり返る。

「人間つて奴ア、面白いな〜」

その姿を見ながら呑気に呴く鴉天狗を横目に、イリアも囚われた人達を先導する為に動き出した。

ちなみに、イリアが鴉天狗と交渉を開始し、囚人の大半が囚われている監獄まで辿り着くまでの時間はおおよそ一分であった。

「流石の俺つちでも、全員を一気に運ぶのは無理だぜ」

癖なのだろうか。鴉天狗が鋭い鉤爪で顔を搔きながら、廊下の先から先までを眺める。

たった二分で何処に囚人がいるのかを把握し、そこまで飛ぶといふのは到底、無理に思える。実際、イリアも半信半疑だった。

「さつきも思つたんだけど、あれって安全性は保障されてる訳?」

それを実現したのが、今イリアが目線ではなく、口と耳だけで会話している鴉天狗だ。

相も変わらず、地面から少し浮遊している鴉天狗は欠伸をしながら、

「安全の保障された人生なんてつまらん。時間より安全を求めるなら、その足で逃げればいいじゃん」

不真面目そうに見えて至極、真剣な眼差しをイリアに向かながら結論を述べた。

「じゃあ、いざつて時にはあなたの力を借りするわ。ここからは私が動く」

「はいはい」

氣怠そうに言葉を切った鴉天狗を他所に、イリアはラティールと共に囚人達を並ばせた。囚人達は老若男女問わず、健康状態が悪いように思える。これだけ魔力の濃い場所に閉じ込められていたら当然か。一気に駆け抜けて逃げるような手段は取れそうにない。

「俺が背後をカバーする。お前ば、前線に立つてくれ

しゃがれた声で、ラティールが指示した。

独特な口調を聞けば一瞬で分かると、ハロルドは言っていたが、確かに、ラティールの口調は一風変わっている。

もしかしたら、クレアシオという大陸とは更に違う。異国の人間なのかもしれない。南方や東方の海の先には小さな島が点在すると、イリアは聞いた事がある。

「それじゃ、行くとしますか」

準備運動にロッドをグルグルと回しながら、イリアは燭台が僅かに照らす廊下を先導して進み始めた。

程無くして異変を嗅ぎ付けた山賊達がやってくる。

背後からもやつてくる。

挟み撃ちにして叩く算段なのだ。中央に戦えない者達を並べて正解だった。

イリアは目の前からやつてきた山賊に予め組んでおいた魔法を唱える。印を刻んだ指の先から魔法の弾丸が放たれ、山賊を捕まえた。薦蔓を絡めて作った木製の弾丸だ。それは山賊の体に命中するや否や爆発し、山賊をネットのように拡散した植物が雁字搦めにする。

言葉通り、捕まえる為だけに特化した弾丸だ。

それを一発、三発と数瞬^{すうしゅん}で飛ばしながら、迫つてきていた山賊をあらかた片づけると、余裕の笑みを浮かべてイリアは手を弾丸に見立て、硝煙を消すように指に息を吹きかけた。

ラティールは顔色一つ変えずに山賊が近付いてくるのを待つていた。その数は三人。尻尾を振つて、すぐ後ろで怯えている民間人以下がつっているように伝えながら昂る感情を抑えて右手を前に出す。

僅かに自分の右手が震えるのをラティールは感じた。

この腕を伝う振動は武者震いからきているのか？

明らかな敵意が自分に向けられているが故の恐怖か？

すぐ傍で震えている者達を守らねばならぬという責任感からか？

どうでもいい考えが、ラティールの脳裏を駆け巡り、一秒が一〇秒のような長さに感じられた。それほどに今のラティールの精神は研ぎ澄まされ、周りの背景が遅れて見える。

「フンッ！」

気合を入れた右拳を突き出す。

確かな手応え。感触。拳を伝つてやってくる衝撃。

ナイフを振り上げていた山賊が、ラティールの拳に吹き飛ばされた。背後で待機していた山賊を巻き込んで、かなりの距離を飛んでいく。

右拳を突き出した勢いをそのままに地面を蹴つた。突き上げた膝を三人目の山賊の顎にお見舞いする。

痛い。

山賊の顎を突き上げた膝も、その衝撃と重量を受けて悲鳴をあげていた。どんなに強靭で艶やかな鱗に覆われていようと、金属ほど硬くはない。

むしろ、柔らかいものが割れにくくよう硬ければ硬いほど、受ける衝撃は増す。

鱗に浮かび上がる無数の筋から血が滲み出した。膝の皿が割れたのだ。

しかし、ラティールは怯まない。顔色一つ変えず、それすらも修行に置き換えて教訓とする。

突き上げられた山賊が、頭から天井に衝突し、情けない声をあげながら地べたに落ちる。

ひとまず、訪れた静寂にラティールは息をゆっくりと吸つて吐き出す。

両手を下ろし、姿勢は直立に。両目を閉じて、目の前の敵を倒した事による高揚を落ち着かせる。さながら、祈りを捧げ続ける僧侶と、戦陣を前に緊張を露にする武士を合わせたような、独特な存在感をラティールは醸し出していた。

安全が確認された後、前線に立っていたイリアが歩き始める。

それに従つて、ラティールも歩き出した。

「全く。よく作ったものよね」

イリアは石造りの階段を降りながら独り言を吐き出した。
階段は一段一段の高さが並のそれとは一味違う。山岳地帯である
せいか、落差の激しい道は体力をつけているイリアでさえ、キツい
と感じてしまう。

これを民間人。しかも衰弱状態の者達に歩かせるのは駄目だ。

どうしてもペースは落ちてしまうが、イリアは所々で休憩を挟む
ように全員の動きを纏めていた。

「やつぱり、俺の力が必要なんじゃないのか?」

これ見よがしに扇子を振るう鴉天狗をイリアは無視する。

「こんなで野垂死のたれじにするようなら、こいつだけ連れて飛んでくわ」

遠慮の無い指摘をしながら、鴉天狗は横を歩いている少女へと目
を向けて了。

先程までと何ら変わらないコトネの姿がそこにはある。違いがあるとすれば、大事そうに持っていたお札が今は光を失っている事だらうつか。

「私は……」

「まあ、俺っちは契約者の、」意思にお任せしますがね」

鴉天狗とコトネの関係は、例えるなら押しの弱い女性を無理矢理、誘う男性のようなものであり、見ていて気分の良いものではないが、イリアはぐつと堪えた。

この鴉天狗が、自分達をここまで導いてくれたのは確かなのだ。そして、コトネを曲がりなりにも守つていいという事も。

「契約って、両者の同意が無ければ成立しないものじゃないの？」

イリアは階段を降りる足を止めずに、鴉天狗に尋ねた。

気が遠くなりそうな段数を歩いていると、無駄話の一いつしたくなる。

「両者の同意っていうか、元より決まっていた決まりみたいなもんかねえ」

おもむろに鴉天狗は返す。

「俺っちは、俺っちを扱える魔導師に先祖代々仕えてきた。その代が今はコトネに変わった。ただ、それだけの事ですぜ」

ふざけた口調の鴉獣人に、確かに不快感を抱く。それでは、本人の同意も無しに彼らの関係は成立している事になるではないか。

浮かない顔をして、ただただ会話を流していくようにさえ思える

コトネは今、何を思い歩いているの

だろうか？ 鴉天狗の存在は、彼女の歳で背負うには重過ぎる。

「契約者と与えられた大地を守護するのが俺たちの使命。それ以外の制約は与えられていない。魔導獸を飼い馴らすなんて、人間の考えた浅知恵に俺たちは乗せられないのさ」

魔導獸。魔力に耐性を持つた獸。魔力を駆使することを知った獸。それは、魔人、獣人、竜人の三種族の対立において非常に重要な意味を持っている存在だ。魔人にしか魔法を扱う事は出来ないという前提をすっ飛ばした存在なのだ。

単純な話、ただ持っているだけで強い。手元に置いておくだけで充分過ぎるほどの力を發揮する。むしろ、その存在に万人が恐怖を成すようなもの。

ともすれば、人間がその力を手中に収めたくなるのは当たり前の話である。

力があるものは、いずれ狩られてしまうもの。それを恐れた魔導獸達は人間達と契約を交わし、力に制約をかけられた。その代わりに、魔導獸達はそれぞれに土地を与えられ、その所有権を得る。

こういった魔導獸は契約獸とも呼ぶ。

契約を交わす魔導獸は、他の魔導獸達よりも更に強い力と知恵を持ち合っている事が多い。

特に亜人戦争時には、契約獣の戦力が戦況を一変させ、一瞬で全てを焦土に変えた契約獣さえ存在したと云われている。

「じゃあ、あなたは守護の対象を守れれば後は何でもするっていつの？」

イリアは恐々しながら鴉天狗に聞く。

「この鴉天狗こそが契約獣なのだ。イリアも、実物を見るのは初めてだが恐怖が全身を蝕む。

「俺っちが、そんな気の狂つた奴に見える？」

やれやれと言った様子で、鴉天狗は言葉を紡いだ。

「お前らの、そういう臆病な態度が気に食わない。もう慣れちまつたからどうだつて良いけどな。契約者であるコトネに対して何らかの危害を加えない限り、むやみやたらに何かを仕出かすなんて面倒臭い。俺っちが求めるのは平凡さ」

鴉天狗の言葉にイリアは口をつぐむ。

返す言葉が見つかなかつた訳では無い。

会話を止める理由が田の前に見えてきたのだ。階段の終点が近付いていた。

【蒼の巻】魔鉱石 第22話 解放

イリアは、警戒を怠らずに最後の一段を降りて、周りを見渡す。

階段を降りた先にあつたのは、大きな広間だ。

石を磨いて作つたのか、中央には円形に削られた丸テーブルがあり、それを囲う様に石造りの椅子が並んでいる。粗雑ではあるが、申し訳ない程度に薄汚れた布が丸テーブルの上に敷かれていた。

「食堂かしら？」

イリアは丸テーブルの近くまで歩いて、その上に敷かれた食器類に目を通す。

埃を被つている場所と被つていない場所が、くつきりと分かれている。最近、誰かがここを利用したのは明白だつた。

「随分ど広いな」

最後尾にいたラティールが降りてくる。

全員が降りてきたのを確認し、各自は休憩を取ることにした。これだけ広い空間ならば気兼ねなく体を伸ばせる。

「ところで、そっちの女の子と変な格好の鴉獣人ば誰だ？」

ラティールは、輪から外れた場所で立っている一人組へと目を向けた。

少女というのは「トネの事である。鴉天狗は、今も呑氣に浮いているが常にコトネを守れるように定位位置を保っているよ見えなくもない。

ここまで歩かずには浮遊していたと思つと、鴉天狗の呑氣つぶりが
恨めしい。

「獣人じやねえやい」

間違えられたことがそんなに嫌だつたか。ふて腐れた様子で返した鴉天狗が魔導獸であることを、今のラティールが分かる筈もなく小首を傾げた。

「そつちの子はコトネ。山賊達から逃げているところを騎士団が保護しているわ」

実際には少し違うのだが、余計な誤解は招きたくない。

イリアは鴉天狗の片隅で縮こまつているコトネを足早に紹介した。今のコトネは、訳あって、ポニー・テールからショートヘアに変わつていて、だが、それ以外に変化は無い。

ラティールは、どうやって逃げ出したのか関心の眼差しをコトネに向けたが、すぐに止める。少し過剰にも思えるが、少女が自分に見られるや否や怖がつたからだ。

「それで、こつちの鴉が……あれ？　名前なんだったかしら？」

「んあ？　俺つちの名前は黒乃守手鳥風神」

「……もう一度、お願ひします」

「黒乃守手鳥風神」
くろのもりてとりかぜがみ

鴉天狗の名前を聞いて、最初にイリアが抱いた感想は”長つたらしい”だ。ラティールは何かの悪戯かと片目を吊り上げている。

「あ、あの。長いので私はクロつて呼んでます」

ぼそぼそと口を開いたコトネに、鴉天狗が不満げな表情をした。
「その呼び方はやめろって言つてんだろ！ 僕つちには、黒乃守手鳥風神って、ちゃんとした名前がだなあ——」

「ううん。その名前は明らかに長いと思つ。それにダサい」

珍しく、碎けた口調でコトネが喋つた。それは鴉天狗に向けられたものであり、二人の関係性を主張しているようにも見える。

「見た目も黒いし、クロで良いの。主の命令」

確定事項と言わんばかりに、コトネは真っ直ぐと鴉天狗よろしくクロを見上げた。

その姿に、少々困った様子で鴉天狗は頸垂れる。

「そんなんで一々、命令された日」「やあグレるぞ」

諦めたように顔を上げた鴉天狗は、クロと呼ばれる」とを渋々認

めたようであった。にっこりと笑みを浮かべるコトネに、イリアは安心する。「コトネとクロの間にあるものは険悪な関係ではなかつたらしい。

「良いのか？俺たちを解放しちまつてもよ」

黒。一面に鏤められた黒^{ぼじつけられた}が、コトネの視界を覆つている。

これは浮遊していると形容して良いのだろうか？「コトネは空を飛んでいる感覚を得ていた。

確かに重量は感じているので、無重力とは違つ。

「あなただよね？私を助けてくれてたのは

黒に鏤められた視界の中央に、それは堂々と立つていた。

正確に言えば、足場の無い場所で立つてはいるような姿勢をしながら浮いている。

「如何にも。俺っちが、お前を導いて危険から守つてはいる

それはコトネが知る限り、メジャーな妖怪である鴉天狗に酷似した姿をしていた。

田の前で浮いている鴉天狗は修験者のような服装だが、更に細かく説明すると山伏装束と呼ばれる装束を身に纏つていた。

「トネの知る鴉天狗と違う部分を挙げるとすれば、人間よりも鴉に寄つた外見だろうか。

本来、顔は鳥のような嘴を有しているだけで羽毛でびっしり包まれていたり、ここまで骨格が獣寄りであることは無い。

しかし、鴉天狗の実物を見るのはこれが初めてだし、コトネは自分の知識が間違っていたのかもと頭の回転を巡らせた。

どうしてここまで、コトネが鴉天狗に対して冷静にいられるのかというと、彼女が神社の娘であるからである。

妖怪と対面するのは、これが初めてだが、この訳の分からぬ世界においては身近に感じられる存在だ。

「どうして、私を守るの？」

鴉天狗の鋭い眼光に訴えかける。

「お前は適合者。先祖代々の適合者の行く末を見守るのが俺たちの役目」

鋭く鋭利な爪を立てながら、鴉天狗がコトネを指で差す。

コトネは、そこでようやく困惑の色を露にした。

自分を守る？ 何の為に？ 自分に何の価値があると言つのか？

「お前には現状を打破する力がある。それを具現化するのが俺たち」

「じつらの考えている事を察したのか、鴉天狗は続けて言った。

現状を打破する力？ コトネは暫し、肩に手を置いて考える。浮いているといふのに、肩に手を置く重さは確かにあった。

現状とは、つまり何を指している？ この訳の分からぬ非現実から現実へ戻る為の力か？ そんな都合の良い力が自分に備わっているといふのか？

疑問形がコトネの頭を埋め尽くす。

「……先祖代々。あなたはさつき、先祖代々って言つたよね？」

「ああ、確かにそう言つたが」

「その人達は誰？ 私と何か関係があるの？」

分からなければ尋ねねば良い。

先祖であれ何であれ、それがコトネと鴉天狗を繋げる接点と成り得るのなら、今まで見えてこなかつたものが見えてくる筈だ。

「誰かは教えられない。少なくとも言えることがあるとすれば、どいつもこいつもお前みたいな性格だったって事かね」

あつさつと、曖昧なままに返されてしまった。

「コトネは再度、一考する。

現状を打破するとは、もつと手前にあるものを指しているのだろう

うか？

手前にある現状。訳の分からぬものばかりが並べられた現状。

田の前を見ていても答えは無い。ならば後ろを振り向けば良い。コトネは過去を遡り、そして気付いた。

ここまで助けてくれた者は誰だ？ 鴉天狗だけだったか？ いいや違う。

「……私にも何か出来ることがあるのなら、力を貸して。その代わりにあなたを解放する」

どんな意図があつて、どんな目的があつて、どんな感情を含めて、ハロルドやレイド達が自分を助けてくれたのかなんて分からない。

しかし、コトネは迷わずにはらの力になりたいと願った。

何故だろう？ 自分でも理解できなかつた。ただ彼らは困つている。それを解決すれば、現状打破に繋がるような気がしたのだ。

「良いだろう」

鴉天狗の背後には大きな碑石のようなものがあつた。

その碑石から伸びている幾重にも枝分かれした鎖が、鴉天狗を束縛して離さない。

あれを解くのだ。鴉天狗を束縛している鎖の群を。

「我、魔導獸として魔導師たる汝に付き従う」

鴉天狗が詠唱するかのよつて口づさみ、

「但し、契約料金は頂く」

眼光に宿る光を強くして、口元を歪めながら答えた。

視界が黒く黒く、包まれていく。黒色ではなく一切の光が無い黒。

闇へと――

そして今、コトネはここにいる。

鴉天狗もといクロが契約料金と呼んだものは髪の毛だった。意識が戻ると、クロに纏わりついていた鎖は全て解けていた。

という話を搔い摘んで、イリアに説明したコトネは土で押し固められた天井を見上げる。

「だから、正確には私が望んだんです」

訳が分からぬ状況に変わりは無い。ただ、それをどう受け止めて使うかはコトネ次第。イリアは険しい顔を浮かべて、何かを言おうとしたが、それは悲鳴によってかき消される。

即座にロッドを構えて、イリアは悲鳴の元を辿る事に専念する。

「た、助けてくれ！」

山賊だった。

狼獣人で、灰色のゴワゴワとした毛並みに細見ながらも、それなりに鍛えられた体躯が特徴的な男だ。

何やら慌てた様子で駆けてくる狼男はコトネの姿を見て、あつ、と叫ぶ。

「お、お前はあの時の…?」「ヒヤシ…?」「どうして生きてんだ！」

山賊の驚愕の声と、コトネの悲鳴が交互に重なり、イリアは自然と守る姿勢に入った。

”狼男”を。

ヒュウウウヒ耳をつんざくよつの音が駆け巡る。

何かが来ることを先読みして、狼男の前に立ったイリアはロッドを前に翳してクロの攻撃をガードした。耳をつんざく音が、木製のロッドをへし折らんとする感触へ変化する。

幸いにも、ロッドは壊れなかつたが伝わってきた衝撃が冷や汗を排出せせる。

「何で邪魔すんだ！ そいつはコトネに危害を加えようとしたんだぞ」

「殺せば済むつてものじゃないでしょ」

実は、背後で腰を抜かしている狼男は逃走したコトネを追つていた山賊なのだが、そんなことをイリアが知る由もない。知つていようがいまいが、クロの攻撃を防ぐことに変わりは無いが。

クロが、その手に持つた扇を広げる。

瞬時、イリアが反応できない速度で鎌鼬が横合いを駆け抜けた。

肉を引き裂く音が、何度も何度も反響する。

それは人肉を引き裂くといつよりかは、もつと分厚いものを叩き切るようであった。

「おいおい。どんだけ、俺を苛立たせりやあ、気が済むんだよ」

まるで、腹部をナイフで刺されたような苦い顔をしたクロは広げた扇で羽毛を扇ぎながら、鋭い眼光で訴えかける。

途端。地鳴りが響き渡り、大きな広間に幾人もの悲鳴が木霊する。

「な、何！？」

ガタガタガタッヒ、食堂の中央に位置する丸テーブルの上に置かれた食器類が無尽蔵に跳ねて震えて、地面に落ちて割っていく。

「き、来たんだ。奴らがきやがった」

恐慌しながら、狼男が食堂と別のフロアを繋げる道を指差す。

それは、狼男が逃げてくるように食堂に入ってきた時の道だった。血液とは違つ、体液のようなものが倒れた燭台の灯りに映つている。

”奴ら”というのは、山賊とはまた別の何かなのだろうか？いや、狼男の反応と謎の体液を見れば十中八九そうである。

答えは眼前に迫ってきていた。

「ラティール！」

「言われなくとも分かつでる」

既に動き出していたラティールは、混乱している民間人を一箇所に集め出していた。自由国バーロスでは治安維持団体までギルドが担っていると聞いたが、流石の対応速度である。

イリアは、自身の田元で簡単な魔法陣の印を結び、魔法を発動した。

視力が強化される。今まで見えてこなかつたものが鮮明に映し出される。

見えた時には駆け出していた。

眼前に迫り来る怪物。視界に映つたものは、例えるなら大きなミズだ。それが滑るようにして、先陣を切つてクロに微塵切りにされた同胞を焼き分けながら近付いて来ている。

「はああああああ！」

勢いをそのままに跳躍。両手に持つたロッドが撓り、叩き割る感触を得ながら、イリアは勢いを殺しきれずに地面に転がった。

痛烈な断末魔が響き渡り、ミミズの怪物が地に伏す。

(まだだ)

気配は消えていない。

むしろ、堂々との存在感を醸し出している。

即座に立ち上がり、土を払う事すらせず、イリアは視界を巡らせた。

「何処だ？ 何処にいる？ …… いない？

イリアが視界を巡らしても、討ち果たされたミミズの怪物しか見えてこない。

「まさか、」

幾ら目を凝らしても見えてこないなら何処にいる？

イリアが見れない場所。地中だ。

地面が盛り上がり、前のめりになる体を無理矢理に動かしながらイリアは舌打ちを漏らした。

抉られた地面の底から這い出てくるよし、地上にいる者を丸呑みにするようにミミズの怪物が顔を出す。

植えた種が芽を出すまでの成長過程を早送りにしたような、そんな飛び出し方だ。

「地中に潜られたんじゃ、俺たちの力も無暗やたらに振り回せられないと！」

クロが扇を振り下げるとき、風の鈍器がミミズの怪物の顔を叩き割った。

「力があるってのは辛いねえ」

皮肉げに言いつクロを睨みつけながら、内心でイリアは「まことに」と焦燥に駆られていた。

イリアの陣術があれば、このまま動かないでいた方が戦力的には安全だ。

だが、鳴り響き続いている地鳴りがこのまま続いたらどうなるだろ？

地盤は崩れ、全員が生き埋めになってしまつ。その中で生き延びられるのは、クロぐらいだろ？ そして、そんな中で生き延びられるクロの絶対的な力を地面に向けて放つてはいけない。

洞窟が崩壊する。

(こんな時にレイドがいたら……いや、)

雑念を振り払う。

(私が頑張らないでじうするの？)

イリアは、「事ある」とにレイドに助けられてきた。守られつ放しという訳ではないが、レイドがいなければ覆せない戦局のようなものは、今回の山賊騒動だけでも何度もある。

それでは駄目だ。

駄目なのだ。

今ここにレイドはいない。

イリアは覚悟を決める。その手に持ったロッドを引き摺るように地面に魔法陣を描いていく。大きな円形の魔法陣を。

魔法陣を描き終えたイリアは、食堂の丸テーブルの上に立つて、祈るようにロッドを地面に突き立てる。

「生命の息吹。悪しきものを払い、弱きものを守る大樹となれ」

精神を落ち着かせ、昂らせ、相反する二つの精神状態が交差する。

絶妙なバランスを築き上げたイリアの精神が魔力と絡み合い、強大な魔法と成つて形を見出し始める。

地鳴りが一層激しくなり、周囲一帯が揺れ動いた。時間は一刻の猶予も無い。

「全ての生命を司るその力。顯現せよ…」

地鳴りが一層激しくなる。

崩れ落ちる土砂は更に激しくなり、天井の一部が崩落し始めた。しかし、崩落しそうな天井をすんでの所でイリアの魔法が食い止める。

大きな大樹。

突如として生え出した大樹が超重量の土砂を抑え込み、なんとか

この場を支えてくれている。そして、イリアが作り出した魔法の大樹は皆を守る為だけには終わらない。

一本、三本と支柱のように次から次へと大樹が突出し出す。はつきりとした殺意が、ミミズの怪物達を刺し貫く。

（生命を司る自然の力。本来、恩恵や恩寵おんちようを抽象する」とが多いが逆に利用すれば生を刈り取る刃になる）

自然界の厳しさ。食うものと食われるもの。生を与えられたものに必ず訪れる死。そういう概念が、魔法の大樹に武器としての力を与える。

脳裏に刻まれた知識を心の中で暗唱しながら、イリアは祈るように顔を屈み続けた。

そうすることで精神を安定させ、四方八方から近付いてくるミミズの怪物を見逃さないようにする。

（何体いるのよ）

祈りながら苛立つ。

イリアの心に隙間が生まれたが、隙間を作れるほど余裕が生まれ始めたとも言える。

一桁台になつた化物の軍勢を、根を張つた大樹によつて刺し貫く。

残り五体と認知出来るほどになつた所で変化は起きた。

「？」

何かが足りなくなつてきている。

意識的なものではなく、確かに何かが減つてきているのだ。

「魔力の流れが途絶えた？」

先程まであまり余つて漂つていた魔力が無くなつてきていた。魔力で形成していた大樹が、超重量の土砂に挟まれて軋み出す。

今まで供給され続けてきた魔力が枯れ果て、大樹の補強が出来なくなる。

「こりやあ、ちつとばかしまずいか？」

呑気に欠伸をしていたクロが天井を見上げながら、口を開けた。

今まで何ら行動を起こさなかつたのはイリアの集中力を削がない為の配慮か、単に面倒くさかつただけなのか。

「面倒だ」

後者のようだ。

降りいかかつてくる砂埃からコトネを守るように片翼を広げながら、クロは風を纏い始めた。

「待つて！ 何処へ行く気なの！？」

「コトネが風に弾き飛ばされながらも叫ぶ。

「何処って、そりや安全などこりまで」

「見捨てるの！？」

信じられないといった様子でコトネがクロの目を見る。

いや、クロの考えは現実的に考えれば正しいものだらう。

自分達だけでの場から逃げる。それが一番、安全で堅実的だ。

しかし、現実的といつのは同時に冷酷とも受け取れる。その冷酷さを否定したコトネは、

「全員を助けて！」

無理難題かつ優しさに溢れた要求を口にした。

「はあ」

呆れた様子で、もう片方の翼をあげながら、クロは隠し持っていた刀を取り出した。

黒光りする刀身。金箔で彩られた印籠。

それは宙で一度二度と回転し終えてから、クロの手元に収まった。

確かな感触が、クロを満足させる。

「しょうがないな。時間を稼いで、ここにいる連中を一箇所に集め

ろ。さつきも言つたが安全性は保障しない」

黒刀を掲げた鴉天狗。クロの言葉に命じられ、イリアは立ち上が
つた。

たかが食堂と言つても中々の広さがある。その上、この地鳴りの中で声を張り上げてもかき消されてしまう。無尽蔵に降り注いでくる土砂を、ロッドで薙ぎ払いながらイリアはラティール達の元へと走つていく。

クロが何をしようとしているのか。

イリアの想像通りであるならば、本当に安全性は保障されない。

死ぬのが嫌なら、死ぬような思いをして生き延びてください」と言われているようなものである。しかし、何もしなければ死ぬことは変わりない。

だったら、一パーセントでも危険を減らせるように動くべきだ。

頭上から土砂と共にミズの怪物が涎を垂らしながら降ってきた。

醜悪な、品性の欠片も無い大口に向けて火の弾をお見舞いしてやりながら、イリアは土砂に押し潰される、すんでの所を駆け抜ける。

田の前では、ラティールが戦っていた。拳一つで、ミズの化物を相手に奮戦していた。

牙を剥き出したミズの化物の懷に潜り込み、腹部に当たる部分へ四回もの拳を叩き込む。

あれだけ暴れ狂っていたミズの化物が痙攣しながら倒れた。そ

の体に更に踵で止めをさしながら、ワティールはイリアの方へ顔を向けた。

「皆を食堂の中心へ集めて」

返事は無かつた。

驚きに見開かれる目が、イリアの方を見ている。

突如、首元に何かを押し付けられてイリアは背後を振り返りつとしました。振り返れない。

しかし、背後に誰がいるかは大体の検討がつく。検討づけると、自然と苛立ちに口が動いた。

「こんな時まで、自分らの住処が恋しくて堪らないのかしら？」

「よくも囚人達を解放したわね」

「出来れば、そういう鬱憤は別の機会に晴らしてほしいんだけど」

「馬鹿にしないで！」

首元に押しつけられたもの。

ナイフの先端が僅かに動き、果物の皮でも剥くように、イリアの皮膚に食い込んだ。

イリアに、ロッドを地面に落とすよう命じながら、ナイフを突きついている相手は一歩二歩とワティールから間を置く。

「う、動かないで。動いたらい」の女を殺すわ。殺すわよ…」

「あら。私を殺した所で現状は変わらないと思つけど」

「つるさい黙れ」

これ以上、煽るのは危険か。

そう判断したイリアは、静かにナイフを突きつけてきた相手。山賊をからかうのを止めた。

ラティールは隙を窺つて、イリアを助けようとしたが山賊の脅迫に動くにも動けなくなつてしまつてしている。

「お、おここんな時に何やつてんだ。フォロンー！」

第三者の声に一同は注目を集めた。

「ガロン……！？」

声の主は、つこさつきイリアが鴉天狗の攻撃から救つた狼男だつた。その姿を見て驚いたのか、

「ふんつー。」

イリアの首元にナイフを突きつけていた山賊の警戒が揺らいだ。その隙を逃すほど、イリアは甘くない。

「あうつー。」

声質からして明らかに女であったが、その腹部に正拳突きをお見舞いして距離を取つた。

「いついう時に自分も女であることを有利だと思つ。加減とか、遠慮とか、その他諸々を気にしなくて良い（あくまでも常識の範囲内でだが）。

「フォロン！」

痛みに呻きながら倒れ込んだ山賊に、狼男が駆け寄る。

倒れ込んでいる山賊も、狼男と同じ種族。灰褐色の獸毛に包まれた体。刺々しくも豊満な毛並みと尖った鼻。

狼獣人の女性だった。

年齢は狼男よりも少し下ぐらいだろうか？ 大して差は無いように思える。

外見もソックリなせいで、服装や声質が異なつていなければ、どつちがどつちか見分けがつかなくなりそうだ。

「ガ、ガロン。あいつらは私の敵よ！ 現に今だつて私を……」

狼男がフォロンと呼んだ狼獣人の女性が怨恨に染まつた瞳で、イリアを睨みつけた。その尖つた爪をこちらに向かながら、笄のよつな尻尾を怒りに震わせている。

「違うんだ。フォロン。あいつは、俺を助けてくれた」

そんなフォロンを、ガロンと書つ名前からしき狼男が説得しようと/or>してく

してくれている。

「た、助けられた？ ガロンが？」

半信半疑と言つた様子で、交互にイリアとガロンへ目を向けるフォロン。その尻尾は未だに怒りに震えているが、ガロンの強い眼差しに迷いが生じ始めていた。

「どのみち俺達は後戻り出来ない所まできちまつたんだ。これからは足を洗つて——」

「お前らだけ抜け駆けたあ、良い度胸じやねえかよ？」

ガロンの言葉は途中でかき消された。

風を切る音が響くと同時に、ラティールがガロンとフォロンの目前に移動する。

地鳴りの中でもはつきりと分かるほどに、痛々しい音がラティールの肉を突き抜けた。ラティールの腹を、鱗ごと一発の銃弾が貫通したのだ。

誰が撃つた？ イリアは鋭い目つきで犯人を探し、特定した。

わらわらと、一〇人かそこらの山賊の群れがこちらに近付いて来ている。その内の一人が、硝煙を吹かせる拳銃を持っていた。そして、他の山賊達も各自の獲物を手に持ちながら、こちらに殺意の籠つた敵意を刺すように向けてくる。

「揃いも揃つて自暴自棄つて所かしら?」

皮肉げに嘲笑しながらも、イリアは手をあげて降伏を示した。

しかし、ラティールは腹部から流れる血を厭わずに山賊達へと近づいていく。何をやつているんだあの蜥蜴男は。

「それ以上、近付いたら撃——」

「黙つで聞きやがれ!」

怒号が衝撃波となつて、山賊達を怯ませた。横目で見ているイリアでさえ、怯みたくなるほど怒号だ。

腹部の怪我が体内の血の流れを滅茶苦茶にし、口元から血が零れ出す。それでもラティールは怯まない。何十もの武器を向けられても臆してすらいない。

「今がどんな状況が分かつて言つでんだつたら、『デめーらは仲間を見捨てよつとしてる!』

いつ撃たれても可笑しくない状況で、それでも尚、臆さない。

必ず説得するといつも自信よりも、元から備わつてゐる義が彼を突き動かす。

「『じ』で仲良く一緒に死のうつでんだつたら、『デめーらは正真正銘のクズだ』

突然、ラティールが地面に向けて拳を放つた。

これが人間より身体的に優れた獣人であつたとしても為せる業かと疑いたくなるほどの轟音が、ラティールの拳からかき鳴らされる。

その標的は地中の中から機会を窺っていたミミズの怪物だつた。士が盛り上がる瞬間に合わせてラティールの拳をお見舞いされたミミズの怪物は顔を出せずに戦に至る。

たつた一発の拳で、あのミミズの怪物を屠つたラティールの気迫と鬪氣は凄まじいものであつた。

だがしかし、今のラティールの行動は、山賊達にどうぞ映つただろうか？

”その敵意が何処に向けられたものかの分別すらつけずに、危険なものとして判断するのではないか？”

イリアは咄嗟に山賊達を止めようとしたが遅かった。

「もうやめるんだ！」

両手を開いて、ラティールの盾となるようガロンが山賊達の前に立ちはだかつたからだ。

流石の山賊達も銃爪ひきがねを引くことを躊躇つた様子で、ガロンを睨む。

「ヘッドは俺達に、こんな泥のような人生を歩ませたかった訳じゃない。こんな所でおっちんで、許してくれるようなヘッドなら、俺は今までここにいなかつた……全員で生きて、ヘッドに頭下げるのが筋つてもんだろ」

ガロンの吐き出した言葉に、山賊達の瞳に確かに迷いが生まれる。

自暴自棄から目を醒まして、自分達の置かれている状況や、これからどうするかを冷静に考え始めたのだろう。

『感動的な場面の所、悪いですが僕の指示に従つて下さい』

あまりにも唐突にイリア達の元へと降ってきた言葉が、状況を劇的に変える事となる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9320x/>

クローズファンタジー 蒼の巻 第1章

2012年1月10日20時59分発行